令和３年度

小・中学校 実 践 研 究 集 録

八戸市教育委員会

目　　次

◇各小・中学校　実践研究報告

○小学校

１	八　戸	１３	白　鷗	２５	下　長	３７	多賀台
２	城　下	１４	白銀南	２６	城　北	３８	豊　崎
３	吹　上	１５	町　畑	２７	高　館	３９	新井田
４	長　者	１６	鮫	２８	根　岸	４０	旭ヶ丘
５	図　南	１７	種　差	２９	日計ヶ丘	４１	南　郷
６	中居林	１８	大久喜	３０	是　川	４２	島　守
７	柏　崎	１９	金　浜	３１	三　条		
８	小中野	２０	根　城	３２	西　園		
９	江　陽	２１	白山台	３３	明　治		
１０	湊	２２	西白山台	３４	桔梗野		
１１	青　潮	２３	江　南	３５	轟　木		
１２	白　銀	２４	田面木	３６	多　賀		

○中学校

１	第　一	８	白　銀	１５	北　稜	２２	東
２	第　二	９	白銀南	１６	是　川	２３	中　沢
３	第　三	１０	鮫	１７	三　条	２４	島　守
４	長　者	１１	南　浜	１８	明　治		
５	小中野	１２	根　城	１９	市　川		
６	江　陽	１３	白山台	２０	豊　崎		
７	湊	１４	下　長	２１	大　館		

No.	学校名	令和３年度　小学校　研究主題及び副題	年次
1	八戸	考えを深める子の育成	３年計画の ２年次
2	城下	主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成 ～児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して～	３年計画の １年次
3	吹上	主体的に学び、共に高め合う子どもの育成 ～児童の意欲を引き出す「学習課題」と学びを確かなものにする「振り返り」を意識した授業づくり～	３年計画の ３年次
4	長者	確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり ～各教科等において「聞き方」の育成を目指した指導の工夫～	３年計画の ２年次
5	図南	共に学び合い、問題を解決していく子の育成 ～相手意識をもって伝え合う活動を通して～	３年計画の ３年次
6	中居林	主体的に学び合う子どもの育成 ～共に学ぶ楽しさを実感させる指導の工夫を通して～	３年計画の ３年次
7	柏崎	主体的に学ぶ柏っ子の育成 ～国語科における読み取る力を育てる授業づくり～	２年計画の ２年次
8	小中野	自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成	３年計画の １年次
9	江陽	主体的に学ぶ児童の育成 ～児童が表現したくなる「しかけ」と「発問」の工夫～	３年計画の １年次
10	湊	自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成 ～言語活動の工夫～	３年計画の ２年次
11	青潮	主体的に学ぶ子どもの育成 ～問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して～	３年計画の ２年次
12	白銀	「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業づくり ～算数科におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫～	３年計画の ４年次
13	白鷗	ねばり強く考えを深め合う子の育成 ～よく聞き、分かりやすく話す指導を通して～	３年計画の ２年次
14	白銀南	学ぶ意欲を高めるための指導の工夫 ～国語科における問題解決的な学習を軸とした授業実践を通して～	３年計画の ３年次
15	町畑	学びを生かす子どもの育成 ～既習を生かしたステップアップをめざす授業づくり～	３年計画の ４年次
16	鮫	かかわり合いながら、学びを深める子どもの育成	３年計画の ２年次
17	種差	自分の考えをもち、分かりやすく伝え合う子供の育成 ～少人数学習において、主体的・協働的な学びを生み出す授業づくり～	３年計画の ２年次
18	大久喜	主体的に問題解決に取り組む子どもの育成 ～子どもが本気になる算数科の授業づくりを通して～	３年計画の ３年次
19	金浜	主体的にかかわり、ともに学び合う子の育成 ～少人数・複式学級における、算数科の授業実践を通して～	３年計画の ２年次
20	根城	主体的に学び合う子の育成 ～各教科における対話的学びの実現を目指して～	３年計画の ２年次
21	白山台	主体的に表現する児童の育成 ～問題解決的な学習を通して（音楽科）～	３年計画の １年次
22	西白山台	運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもの育成 ～見通しと振り返りを生かした指導の工夫～	３年計画の ２年次

23	江南	主体的に課題に向かい　ともに学び合う子の育成 ～各教科における「発問」と「対話」の深め方の研究を通して～	３年計画の ３年次
24	田面木	自分の考えを進んで表現する子の育成 ～根拠をもって説明する力を育てる授業づくり～	３年計画の ３年次
25	下長	ともに学び合い、考えを深める子どもの育成	３年計画の ２年次
26	城北	自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成 ～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～	３年計画の ２年次
27	高館	主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり ～思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して～	３年計画の ２年次
28	根岸	自分のこととして課題解決する子の育成 ～見通しと振り返りを大切にした授業を通して～	２年計画の ２年次
29	日計ケ丘	主体的に学び合う子の育成 ～対話力を高める指導の工夫～	３年計画の ２年次
30	是川	主体的で対話的な授業づくり ～自分の考えをもち、議論できる発問の工夫～	３年計画の ２年次
31	三条	互いに学び、ともに高め合う子どもの育成 ～学級活動（１）を中心とした、話合い活動の充実を通して～	３年計画の ２年次
32	西園	学びに向かう力の育成 ～「見通し」「対話」「振り返り」の学習過程を大切にした授業づくり～	３年計画の ２年次
33	明治	自ら学び、ともに深め合う力を育てる授業づくり ～よく聴き、考えを深める問題解決の場の工夫を通して～	３年計画の ４年次
34	桔梗野	関わり合い、考えを深め、解決する子の育成 ～主体的に学び合う活動の工夫を通して～	３年計画の １年次
35	轟木	主体的に学び合う力の育成 ～複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して～	３年計画の １年次
36	多賀	進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成 ～数学的な見方・考え方を身に付けさせる指導を通して～	３年計画の ３年次
37	多賀台	自分の考えをもち、進んで表現する子の育成 ～児童の思考に寄り添う授業づくりを通して～	３年計画の １年次
38	豊崎	主体的に学びに向かう子の育成 ～児童が自ら取り組む働きかけの工夫を通して～	３年計画の ２年次
39	新井田	主体的・対話的で深いまなびのできる子の育成 ～問題解決的な授業展開を通して～	３年計画の ２年次
40	旭ヶ丘	関わり合いながら、深く考える子の育成 ～対話的な授業づくりを通して～	２年計画の １年次
41	南郷	自ら考え、進んで表現する児童の育成 ～話す・聞く・話し合う力を育てる授業づくり～	３年計画の ３年次
42	島守	主体的に学び合う子どもの育成	３年計画の ２年次

No.	学校名	令和３年度　中学校　研究主題及びに副題	年次
1	第一	主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成 ～言語活動の充実を図る工夫を通して～	３年計画の ２年次
2	第二	見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成 ～特別支援教育の視点を生かして～	３年計画の ３年次
3	第三	意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成 ～「共有化」を意識した授業づくりを通して～	３年計画の ２年次
4	長者	主体的に学び、自己の生き方を探究する生徒の育成 ～「学ぶ意義」を意識した授業づくりと学習習慣の関連を通して～	３年計画の ２年次
5	小中野	課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成 ～身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を通して～	３年計画の ２年次
6	江陽	自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成 ～対話的・協働的活動を通して～	３年計画の ２年次
7	湊	問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究 ～導入段階における課題設定の工夫～	３年計画の １年次
8	白銀	思考力・判断力・表現力を養うための指導方法の研究 ～各教科・領域の特性を踏まえた語彙力の向上を通して～	３年計画の ３年次
9	白銀南	目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成 ～キャリア教育との関連を図った指導を通して～	３年計画の ３年次
10	鮫	生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究 ～自分の考えを持たせる活動を中心として～	３年計画の １年次
11	南浜	夢や希望に向かい、進んで学ぶ生徒の育成 ～課題解決型学習とテーマ型家庭学習の実践を通して～	３年計画の ３年次
12	根城	主体的に学ぶ生徒の育成 ～課題設定の工夫と振り返りを通して～	３年計画の １年次
13	白山台	主体的に思考・判断・表現する生徒の育成 ～積極的に話し合う授業づくりの研究を通して～	２年計画の １年次
14	下長	意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成 ～自ら学び考え表現できるための効果的な発問の工夫～	３年計画の ３年次
15	北稜	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方 ～生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の工夫～	３年計画の ２年次
16	是川	基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり ～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～	３年計画の ２年次
17	三条	自ら課題を見つけ、主体的に取り組む生徒の育成 ～探究的な学習活動を通して～	２年計画の ２年次
18	明治	「学びに向かう力」の育成 ～主体的な学びを支える学習場面の工夫～	３年計画の ２年次
19	市川	見方・考え方を働かせながら、自分の考えを広げ深める学習指導の在り方 ～言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して～	３年計画の ２年次
20	豊崎	「なぜ」と問い、見通しをもって共に学び合える生徒の育成はいかにあればよいか	３年計画の ３年次
21	大館	主体的に学習に取り組む生徒の育成 ～生徒の学習改善につながる評価の工夫～	１年計画の １年次
22	東	課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成 ～「自発的行動力」の向上を促す指導を通して～	２年計画の １年次
23	中沢	自ら学ぶ力の育成 ～自己調整学習を通して～	２年計画の １年次
24	島守	主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成 ～ＩＣＴとツールの活用を通して～	３年計画の ２年次

令和３年度

小学校

１	八　戸	１３	白　鷗	２５	下　長	３７	多賀台
２	城　下	１４	白銀南	２６	城　北	３８	豊　崎
３	吹　上	１５	町　畑	２７	高　館	３９	新井田
４	長　者	１６	鮫	２８	根　岸	４０	旭ヶ丘
５	図　南	１７	種　差	２９	日計ヶ丘	４１	南　郷
６	中居林	１８	大久喜	３０	是　川	４２	島　守
７	柏　崎	１９	金　浜	３１	三　条		
８	小中野	２０	根　城	３２	西　園		
９	江　陽	２１	白山台	３３	明　治		
１０	湊	２２	西白山台	３４	桔梗野		
１１	青　潮	２３	江　南	３５	轟　木		
１２	白　銀	２４	田面木	３６	多　賀		

八戸小

考えを深める子の育成

（３年計画の２年次）

校長　　小　林　　淳

１　研究主題について

⑴ 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「対話しながら学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標は「みんなとなかよく前向きに解決していく子」と設定した。学習問題の設定の仕方を工夫し、話合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

⑵ これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話合いを通して思考力を高めるという課題をふまえ、昨年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまずき、疑問などを取り上げて必要感をもたせたり、考える内容を明確にして提示したりしたことで、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示したり、モジュールの時間に対話の仕方の指導に取り組んだりしたことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉を活用していても、十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、昨年度に引き続き、児童が主体的に学び思考力を高めることができるように、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。その中で、さらに話合い活動における教師のはたらきかけなどの指導を工夫し、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

２　研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習課題を設定し、相手の意見を受けてつなぐ話合いをさせることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

⑴ 解決する必要感のある学習問題を設定することで、考えを深める意欲が高まるのではないか。

⑵ つなげて話す場の工夫をすることで、考えを深めることができるのではないか。

⑶ 教師のはたらきかけの工夫をすることで、話合いのときにより考えを深めることができるのではないか。

４　研究内容

⑴ 学習問題の設定の工夫

ア　解決する必要感のある学習問題の工夫

イ　学習問題の提示の工夫

⑵ 話合いの指導や支援の工夫

ア　根拠をはっきりさせて話合いをさせる。

イ　既習事項や経験を生かして話合いをさせる。

ウ　図や資料を用いて話合いをさせる。

エ　話をつなぐ言葉を用いて話合いをさせる。

オ　教師のはたらきかけを工夫する。（板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等）

⑶ 考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり

ア　何でも話せる雰囲気を作る。（場の設定の工夫、話す聞くスキルの掲示）

イ　学習の約束の定着を図る。（学習準備・ノートの書き方・振り返りの工夫）

（学習の準備→八戸小「学習のやくそく」の活用・ノートの書き方）

⑷ 研究の検証

ア　授業の中で児童が行う振り返りから、考えが深まったか変容を見取り、研究の日常化を図る。

イ　児童に対して年２回のアンケートをとり、話合いに対する意欲や実態を把握しながら研究を進める。

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・助言者	授業の概要（校内研究との関わり）
６	２８	第１回授業研究（２学年） 「スイミー」（国語） 授業者　教諭　宍戸　文子	導入で挿絵を並び替える活動に取り組ませて場面ごとの内容に対する問題意識をもたせることで、児童の学習意欲が高まった。また、つなぐ言葉を意識させ、小グループで場面ごとに題をつけさせることにより、児童の考えを深めることにつながった。
１０	２０	第２回授業研究（５学年） 「長崎漁港から食卓へ」（社会） 授業者　教諭　広田　陽介	二通りの魚の流通経路を比較させて、その違いから問題意識をもたせたことで、児童の学習意欲が高まった。また、グループ活動では、根拠を明確にして話し合わせたことにより、自分の考えをより深めることができた。

⑵　一般研修

月	日	内容・講師等
４	２８	ノート指導に関する研修
５	１９	１人１台端末の活用と遠隔操作について （講師：総合教育センター　石井　一二三主任指導主事）
６	２１	１人１台端末の活用と遠隔操作について （講師：総合教育センター　石井　一二三主任指導主事）
８	１９	ＡＥＤ講習会（講師：八戸消防署　署員２名）
９	１	１人１台端末の活用に関する研修
１	１２	理科プログラミング教材に関わる研修

６　研究の成果

⑴　児童の思考にずれが生まれるように、意図的に学習問題を設定することにより、問題解決への意欲が高まった。

⑵　「話す聞くスキル」を掲示し、授業の話合い活動で意識させ、児童は話合いをつなげようと努めていた。その結果、児童同士が自分の考えをより明確に伝えることができ、考えが深まる場面が見られた。

⑶　根拠を明確にしたり、つなぐ言葉を用いたりして話させることにより、自分の考えの変容をより明確に理解することができた。授業の終末で書く振り返りに自分の考えの変容やその根拠を書くことができる児童が増えた。

７　研究の課題

⑴　教科によって、学習問題の設定の仕方、話合いの目的、話合いの方法が違うときがあり、問題解決的な学習を進めることが難しい場合があった。児童が問題意識をもつような効果的な学習問題を様々な教科で考えていく必要がある。

⑵　つなぐ言葉を使って話し合うことができるようになってきているが、意識的・意図的に活用している児童は少ない。また、主体的に対話に取り組もうとする児童を育てていくためには、対話に主体的に取り組ませる学習のあり方を考えていく必要がある。

⑶　考えの深まりをしっかり見取ることができるような振り返りの書かせ方や評価の仕方について、より研修を進めていきたい。

（記入者　畑中　衛）

城下小

主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成

～児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校長名　　木村　朋子

１　研究主題について

・教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標の「心豊かに学び　たくましく生きる子どもの育成」及び努力目標の「進んで学ぶ子」を受け、「夢や志の実現に向け進んで努力する子」を目指す児童像として教育活動を行っていく。今年度から主題を「主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成」とし、児童の課題解決力を高め自らの夢や志の実現に向かって行動していくための基礎を培うとともに、課題解決の基盤となる情報活用能力を養うための授業づくりについて研究を深め、教育目標の具現化を進めていく。また立腰姿勢で話をよく聞かせることや特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを共通の取組としながら、児童が本時のねらいに確実に到達できるように努めていきたい。

・児童の実態から

本校児童は、学習面では自分の考えを自分の言葉で書いたり、話したりできる児童が増えてきている。特に、国語科の実践を通して対話活動を工夫し、「対話」と「思考」を関連させた授業を行うことによって自分の考えを表現する力が付いてきた。他教科でも、対話を生かした活動や表現力を学習に生かしてきた。今年度は、子どもたちに配付された１人１台端末やその他ICT機器を課題解決のために効果的に活用していく情報活用能力を育てていきたいと考えている。学習に必要な情報を取り出し、その情報をもとに今まで培ってきた「対話力」「思考力」を使い協働的に課題を解決していく児童の育成を目指していく。

・これまでの実践から

これまで本校では、３年間国語をパイロット教科として、対話活動場面を授業内に位置付け、思考力・判断力・表現力を育てる指導の工夫について研究に取り組んできた。４年目には、国語で培ってきた力を他教科で生かす研究にも取り組んだ。今年度は、児童の課題解決能力を高める指導法を工夫する授業研究を行っていく。課題解決の基盤となる情報活用能力を養うためにICT機器を効果的に活用していく。課題解決に必要な情報を取り出し、精査する力を養うことで、児童の課題解決能力を高め、主体的に学びを深めていくことができると考える。さらに４年間で培ってきた「対話力」を生かし、集めた情報をもとに協働的に課題を解決していく児童の育成を目指していきたいと考えている。そのために、日常の授業で、国語をパイロット教科として校内研修における仮説を意識した指導を積み重ねていきたい。

２　研究のねらい

主体的に関わり、学びを深めていく児童を育成するために、学習に必要な情報を取り出し課題解決のための手立てとしたり、意見を集約し他者とともに問題の発見や解決に挑んだりできるような指導の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童が学習に必要な情報を探し出したり、精査したり、考えを共有してともに考えたりする場を設けることで、課題解決力を高めることにつながり、主体的に関わり、学びを深めていくことができると考える。

４　研究内容

(1) 情報活用能力を養うための指導の工夫

ア　ICT機器の効果的な指導の工夫をする

(2) 特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫

ア　児童が考えたり理解したりする助けとなる視覚支援を工夫する

５　研究の経過

⑴ 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
11	5	第１回授業研究（１学年） 「じどう車くらべ」 授業者　　工藤　江莉　　教諭 助言者　是川小学校校長 佐々木　宏恵 氏	はしご車の「つくり」を見つけるために、はしご車が活動している動画を見ながら、ジャムボード上のはしご車の画像に印を付ける活動を行った。自分のペースで動画を見たり、気になる箇所を繰り返し見たりすることができ、主体的に課題解決に向かうことができた。また、ジャムボードに印を付ける際、ペアで相談する活動を取り入れ、お互いの考えを生かしながら協働的に活動することができた。
12	7	第２回授業研究（４学年） 「冬の楽しみ」 授業者　　十日市　江梨子　　教諭 助言者　是川小学校校長 佐々木　宏恵 氏	かるたを作ることを目的として、冬の言葉や行事についての時期を確認したり、意味を調べたりした。ジャムボードを使い、言葉を時期ごとに仲間分けをしたり、調べた言葉の意味を付箋で付け足したりした。ジャムボードの共有しやすいメリットを生かし、個々の考えを全体で共有しながら考えを深めることができた。また、かるた作りの際に、ジャムボードを見ながら作ることができるよさがある。

⑵ 一般研修

月	日	研　修　の　内　容
４	２８	年間計画の見直し GIGA スクール構想についての研修　　講師：本校職員
６	２	学力テストの分析と対策 １人１台端末活用研修　　講師：本校職員 登校渋りについての研修　　講師：本校職員
６	２３	特別支援教育研修（コグトレ）　　講師：本校職員（ことば）
７	９	若手研修講座　　講師：教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖　氏
７	１２	小・中 JS 特別支援教育(ｽｸﾘｰﾆﾝｸﾞ研修会)　講師：八戸学院短期大学教授　野口　和也　氏
９	１	１人１台端末の活用研修　　講師：本校職員
１０	２０	若手研修講座　　講師：教育指導課主任指導主事　福田　秀貴　氏
１１	１７	１人１台端末の活用研修　　講師：総合教育センター主任指導主事　石井　一二三　氏

６　研究の成果

⑴ １人１台端末を活用することにより、分類する、直す、消すなどが容易にでき、作業が遅い早いなどの個人差への対応がしやすかった。主体的に課題解決へ向かうツールとして有効だった。

⑵ 動画視聴の際、１人１台端末使うことで、自分が気になるところを繰り返し見たり、止めたりすることができた。個々の学びに合わせて学習を進めることができるため、児童の意欲喚起へつながった。

⑶ １人１台端末を使うと、個々の考えを全体に共有するのが容易なため、全体で話し合いながら学びを深めていくことができた。

７　研究の課題

⑴ ノートに書く活動と１人１台端末を使う場面のバランスや共有したり考えを深めたりする際のタブレットと板書のバランスのとれた使い分け、ベストミックスへ向けた研究が必要である。

⑵ 学習のねらいに則して、より効果的に１人１台端末や ICT 機器の活用を工夫していく必要がある。

（記入者　　北浦　純子）

吹上小

主体的に学び、共に高め合う子どもの育成

～児童の意欲を引き出す「学習課題」と

学びを確かなものにする「振り返り」を意識した授業づくり～

（３年計画の３年次）

校　長　　峯　香代子

１　研究主題について

本校では、教育目標として「気づき、考え、行動する子」、努力目標として「進んで学ぶ子」を掲げ、自ら問題を見つけ、解決に向けて主体的に学習に取り組む子どもを育てることを目指している。学習指導要領の目標及び内容をふまえ、児童の意欲を引き出す「学習課題」を設定し、互いの考えを伝え合いながら課題を解決し、授業の終末では学びを確かなものにする「振り返り」をすることで、「わかった！できた！身についた！」を実感し、主体的に学び、高め合う子どもを育てることができると考え、研究主題を設定した。

昨年度は、３年計画２年次として「主体的に学び、共に高め合う子どもの育成～児童の意欲を引き出す『学習課題』と学びを確かなものにする『振り返り』を意識した授業づくり～」という研究主題のもと、教師が意図する「授業のねらい」と児童の「解決したい」という思いが一致したタイミングで設定される「学習課題」や教材のしかけ・発問の工夫、また、授業の終末に、児童が「分かった、できた、身に付いた」と実感したことを、板書やノート、評価問題や発表などで「振り返り」、学びを確かなものにする授業づくりを目指し、授業改善を行った。

その結果、単元を見通した学習活動や問い返し、問題提示の工夫によって、解きたくなる学習課題を設定することができた。また、学習で分かったことや学習に対する意欲など、様々なパターン（文章、数値、観点）での振り返りを提示したことで、児童が自分の学びを振り返ることができるようになった。

今年度は、これまでの成果を生かしつつ、児童同士、教師と児童との対話の中から、より解きたくなる学習課題が設定できるよう、研究を進めたい。また、今年度の振り返りの成果と課題を整理し、児童の発達の段階や教科の特性、授業のねらいに合わせて活用していきたい。それにより、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していくことができると考える。

２　研究のねらい

主体的に学び、共に高め合う児童を育てるために、児童の意欲を引き出す「学習課題」の設定の仕方と学びを確かなものにする「振り返り」の工夫を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童の意欲を引き出す「学習課題」を設定し、学びを確かなものにする「振り返り」を工夫することにより、主体的に学び、共に高め合う子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 児童の意欲を引き出す「学習課題」の設定
(2) 学びを確かなものにする「振り返り」の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授　業　研　究・実　践　発　表	授業の概要
６	２	第１回授業研究（国語） 「たんぽぽのちえ」 ２年２組　　授業者　工藤　麻美	挿絵を順不同に提示して正しく並べ替えさせ、「この順序になるのはなぜ」と問うことで、「とき」を表す言葉に着目することができた。これからの文章の書き方に生かそうとする意欲が高まった。
６	３０	第２回授業研究（国語） 「なつがくる」 ４年１組　　授業者　畠舘　真里恵	連のつながりを意識させるために詩の一部分を隠したり、連を並べ替えさせて３つの観点で整理したりした。振り返りでは、入れる言葉を指定したことで、観点がぶれずに書けた。
１１	１７	第３回授業研究（国語） 「やなせたかし ーアンパンマンの勇気」 ５年１組　　授業者　杉本　佳子	「本当の『正義』『勇気』『ヒーロー』の中でやなせたかしが一番大切にしたものはどれか」と問うことで、選びその根拠を本文から探す必然性が生まれ、対話を重ねて考えを深めることができた。
１１	２４	第４回授業研究（国語） 「やまなし」 ６年１組　　授業者　髙田　千賀子	前時までに「かわせみ」と「やまなし」の対比を十分に行い、「なぜ題名は『やまなし』なのか」と学習課題を提示し、資料と併せて読んだことで、作者の生き方・考え方まで深めることができた。
１２	８	第５回授業研究（国語） 「プラタナスの木」 ４年１組　　授業者　大江　真理子	読む場面を限定して「おじいさんがプラタナスの木だと言えるのはどこからか」その根拠を本文から探させた。３人組で交流して確かめ、自信をもって全体で発表することができた。
１２	１４	第６回授業研究（国語） 「たぬきの糸車」 １年４組　　授業者　望月　暢子	「冬の間、たぬきは何をしていたのか」を春の場面から想像させた。「たぬき日記」を継続して書かせてきたことでたぬきの視点からおかみさんの行動や心情を読み取ることができた。
１	１１	第７回授業研究（自立・国語） 「ミニスマイル集会をしよう」他 特別支援学級　授業者　元木 欣也 阿部 千絵・寺田 晴美	本時の流れを初めに提示する、頑張りの見える化を図る、子どもが活動に参加できなくなったときには話題や環境を変えるなど、通常学級でも普段から実践できる事例を学ぶことができた。

(2) 一般研修

月	日	内　容
５	２６	国語科における問題解決的な授業づくりに関する研修 講師　八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 福田　秀貴　氏
６	９	１人１台端末活用に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏
１	２６	授業における１人１台端末の活用に関する研修 ５学年　教諭　　杉本　佳子・熊野　淑・横内　裕史

６　研究の成果

(1) 児童の意欲を引き出す学習課題を吟味し教師の働きかけを工夫して提示したことで、より深く読み考えようとする意欲が高まった。

(2) 振り返りで使うキーワードを提示することで、何が分かったか、どんな力が付いたのかを意識して、各発達段階に応じて振り返りを記述することができた。

７　研究の課題

(1) 児童の実態を的確に把握し、児童が自ら解きたくなる学習課題を設定できるよう、研究を推進めていきたい。

(2) 何を振り返るのかを教師が明確にもち、単元や題材の内容に合わせて振り返りの場面の設定を工夫していきたい。

（記入者　工藤　麻美）

長者小

確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり

～各教科等において「聞き方」の育成を目指した指導の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　島浦　靖

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域社会との連携のもと学校経営に創意工夫をこらし、教育目標「めあてをもって　自ら学ぶ子」の育成に取り組んでいく。その根幹として校是である「徳と知識を磨く」という理念を共有し、笑顔いっぱいの学校を目指している。学校は、子どもたちにとって学ぶ楽しさを実感できるところでなければならない。その基盤となるのが、学級において受容的・共感的な支持的風土が溢れることである。児童は、各教科等における習得・活用・探究の学びの過程において、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、物事を捉える視点や考え方を広げていく中で、自分自身が受け入れられ、認められ、かけがえのない存在であることを実感したとき、学ぶ力が育まれると考えた。

支持的風土が溢れる本校において、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方を広げていく。各教科等の学習だけでなく、生涯にわたって重要な働きをする「見方・考え方」の育成を目指す本研究は、本校の目指す児童像を具現化するために有効であると考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態から

昨年度は、新型コロナウイルス蔓延の影響により、思うような校内研究を進めることができなかった。そのため、主に個人での研究に取り組んだ。

その結果、児童が自分ごととして課題に取り組む姿が見られたのは、課題提示の仕方によって大きく変わることだった。各教科等における「見方・考え方」を高めるためには、いかに児童自身が必要感をもって課題に取り組むかによる。各教科等における「見方・考え方」を研究することによって学習のねらいが明確になる。そのねらいにせまるため、おのずと課題提示を工夫せざるを得なくなる。そのことによって、児童の学習意欲が高まり、自分ごととして課題に取り組ませることにつながった。しかし、各教科等における「見方・考え方」を働かせるためには、休業中の影響を想定して、児童の実態を把握した上で課題を設定したり、物事を捉える視点を与えたりする必要があった。

そこで今年度は、研究の副題に『各教科等において「聞き方」の育成を目指した指導の工夫』を掲げる。「聞き方」によって物事の捉える視点は多様になると考えられる。そこで、今年度の目指す児童像を「見方・考え方」を広げる子どもとし、「聞き方」に重点を置いた指導を工夫することによって、物事を捉える力の育成を目指す。

課題解決に向けて、多様な「見方・考え方」をすることで、「自分でもできる」という自己肯定感をもたせることができ、努力目標の「進んで学ぶ子」の育成につながると考える。

２　研究のねらい

考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を育てるために、児童の発達段階を考慮し、様々なとらえ方ができる「聞き方」の育成を目指した指導を工夫することによって、各教科等における「見方・考え方」が広がる手立ての有効性について、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

児童の発達段階を考慮し、様々なとらえ方ができる「聞き方」の育成を目指した指導を工夫することによって、各教科等における「見方・考え方」を広げることができる。

４　研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の２点を示す。

(1) 児童の発達段階を考慮し、様々なとらえ方ができる「聞き方」を明確にした指導の効果について検証する。

(2) 様々なとらえ方ができる「聞き方」の指導は、日常の授業において実践できているかについて検証する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等
6	24	教育指導課・センター訪問
9	15	第１回授業研究　低学年ブロック 算数科「図をつかって考えよう（２）」　２年２組　教諭　石倉　睦
10	13	【要請訪問】 第２回授業研究　中学年ブロック 算数科「式と計算の順じょ」　４年２組　教諭　八木橋威智子
12	8	第３回授業研究　高学年ブロック 体育科「Ｅ　ボール運動（ボッチャ）　５年２組　教諭　木村　佳憲

(2) 一般研修

月	日	一　般　研　修
6	24	一人一台端末の活用について　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井一二三先生
8	19	特別支援教育に関わる研修会①『発達障害の特性と支援』 なかよし学級　担任　前田　健一 AED 研修会『コロナ禍における一次救命処置』 本校養護教諭　中田　幸恵
2	2	一人一台端末実践報告・活用研修会①　本校教諭　木村　佳憲　相前　由佳子
2	16	特別支援教育に関わる研修会②『特別支援学級の生活を知ろう』 一人一台端末実践報告・活用研修会②　本校教諭　木村　佳憲　相前　由佳子

６　研究の成果

(1) 確かな「見方・考え方」を育成するために、「聞き方」についての手立てを学び、活用することによって、友達の話を聞こうとする姿勢が見られるようになった。児童が比べて考えたり自分の発表に生かしたりすることから、手立てを研究することは有効だった。

(2) 「話す人を見て聞く」「うなずきながら聞く」の観点を全校で決めて取り組むことで、教師・児童の意識が高まった。聞くことの基盤作りができた。

(3) どういう場面で一人一台端末を利用すると効果的なのか、実践して分かったことを共有し活用することができてよかった。

７　研究の課題

(1) 確かな「見方・考え方」の育成を全体に広げるために、「聞き方」の底上げがまだ必要である。聞くことができても、それを聞いて意見を変えたり広げたり深めたりすることができない児童がいるため、特別支援教育の視点を生かした手立てを講じる必要がある。

(2) 「聞く」を発展させるために、今後も課題提示の工夫が必要である。日常の授業において意識する点は、教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ（コーディネータ機能）が必要である。

(3) 一人一台端末の効果的な方法については、定期的な研修が必要である。

（記入者　相前　由佳子）

図南小

共に学び合い、問題を解決していく子の育成

～相手意識をもって伝え合う活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　鈴木　規夫

１　研究主題について

本校では教育目標に、「明るく　やさしく　たくましい子」を、努力目標の一つに「自ら考え、学び合う子」を掲げている。さらに学校課題をふまえ、今年度の学校目標を「ともに成長する子の育成」と設定し取り組んでいる。この目標の具現化のために、児童一人一人が学ぶ意欲をもち、問題に真剣に向き合い、自分の考えを友達と積極的に伝え合う中で、自分の考えを広げたり深めたりしていくことが必要になると考えた。

一年次は、算数科を研究教科として問題解決的な学習に取り組んできた。その結果、問題提示の工夫をすることで問題場面を共有し、児童一人一人が課題をとらえることができた。また、提示した後の児童の気付きや疑問について交流したことが、解決への見通しをもつことに役立ち、主体的に学習をすることにつながった。さらに、話合いの目的と手順を示し、児童に考えをもたせてから伝え合う場を設定したことで、「話したい」という思いをもって話合いが行われるようになった。しかし、自分の考えを話すことに気持ちが傾き、相手を意識して話したり聞いたりすることが十分とは言えないことや思考の過程が見えるノート指導について、さらに研究が必要であるという課題もあげられた。二年次は問題提示の工夫を継続するとともに、目的を明確にした伝え合う場について算数科を中心に研究を進めた。相手意識をもって伝え合いができるようにするために低・中・高学年での目指す子どもの姿を設定したことは、児童一人一人の「話す」「聞く」スキルの向上につながった。また、課題に対する見通しや自分の考え、学習の振り返りを書くことで、課題解決の方法に目を向けたり、友達のよさや自己の変容に気付いたりすることができた。しかし、全体の場で自分の考えを分かりやすく伝えようとする表現力や相手の考えを分かろうとする理解力は十分とは言えないという課題も残った。そこで今年度は昨年度までの研究成果を生かしながら研究教科を社会科とし、主体的に問題解決に向かうことができるよう問題解決的な学習に向けて授業改善を図ることとした。さらに、自分の考えを伝え合う場において、児童に新しい気付きが生まれるような話合いを工夫することで研究主題に迫ることができると考える。

２　研究のねらい

自分の考えを伝え、共に学び合い、問題を解決していく力を高めるための効果的な指導のあり方を社会科における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫と目的を明確にした伝え合う場の工夫をすることにより、主体的に問題に向かい、共に学び合うことができる。

４　研究内容

⑴　導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫

ア　資料の吟味

⑵　目的を明確にした伝え合う場の工夫

ア　課題解決のための話合いの場面の設定と話合いのさせ方

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師等	授業の概要
９	１５	第１回授業研究　第３学年 社会科「店で発見」 授業者　　教諭　　加藤　晃介 指導助言 校長　　鈴木　規夫	比較する資料を段階的に提示することにより、児童は消費者の立場になって考えることができた。視点を増やしながら話し合いをさせることは、児童の実態に合ったものであり、スーパーマーケットの工夫に気付くことにつながった。
１１	２４	第２回授業研究（要請訪問）　第５学年 社会科「世界とつながる自動車」 授業者　　教諭　　石橋　柊子 指導助言 教育指導課　大野　勉　主任指導主事	授業の導入で、２つの事象が表されているグラフ資料を提示し、どちらが現地生産台数かを予想させた。課題を焦点化することで、児童が主体的に取り組むことにつながった。動画の資料やペアでの伝え合いにより、現地生産が増えている理由を理解することができた。

⑵　一般研修

月	日	内容・講師等
４	７	エピペン講習会　　講師　　養護教諭　大黒　恵里子
５	２６	一人一台端末の活用に関しての研修 講師　　総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事
６	２	体育科に関しての研修　　講師　　教頭　淡路　浩志
６	１６	ＡＥＤ講習会　　講師　　養護教諭　大黒　恵里子
６	３０	特別な配慮を要する子への手立てについて 講師　　こども支援センター　小林　真由美　副参事兼主任指導主事
８	２０	指導と評価の一体化 講師　　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事
８	２５	県学習状況調査の分析・考察

６　研究の成果

⑴　授業のねらいに即し、課題を見出していくような資料を提示するために資料の吟味をした。さらに、授業の導入で具体物やグラフ資料の提示の仕方を工夫し、比較させることで児童の思考にゆさぶりをかけた。その結果、課題解決に必然性が生まれ、児童の意欲が高まり主体的な学びへとつなげることができた。

⑵　ペアや小集団、全体など、適切な形態を選択し、課題について予想したことをノートに書かせてから意見交流させたり、考える視点を与えて話し合わせたりした。このことにより、児童は多様な考えに触れ、自分の考えを深めたり、新しい気付きをもったりすることができた。

７　研究の課題

⑴　吟味された資料から課題を見出すことはできてきているので、様々な資料の中から必要な情報を読み取り、資料を根拠に自分の考えを書いたり話したりする力をつけさせたい。さらに、自分の考えを相手に分かりやすく伝える力や内容を聞き取り理解する力を向上させるための手立てを今後も研究していく必要がある。

（記入者　　松橋　麻紀）

中居林小

主体的に学び合う子どもの育成

～ 共に学ぶ楽しさを実感させる指導の工夫を通して ～

（３年計画の３年次）

校長　齋藤　和香美

１　研究主題について

本校では、昨年度より教育目標を「自分を育てる子」とし、自己を振り返りながらよりよい自分を目指して努力し、自分を高めていく子を育むこととした。また、努力目標の一つとして「自分の考えをもち進んで学習する子」を掲げ、相手の考えを理解するためによく聞き、自分の考えと比べたり質問したりしながらよさに気付く、共に考えを創り上げる、協働して課題解決する子を目指している。今年度の学校目標は「他者とかかわり自分を高める子の育成」とし、自分のよさを知り自分を大切にすることを通して人とかかわる力を育み、自分を高めることを目指す。

昨年度の校内研究では「主体的に学び合う子どもの育成」２年目の取組として、全ての児童に学ぶ意欲をもたせ授業を充実するために、導入では問題提示を工夫したり、前時の振り返りを生かしたりした。これにより児童は問いをもち、解決の見通しを立てて自信をもって問題解決に向かうことができた。自力解決では式や図、言葉、数などを使ってノートに考えを書き、考えを可視化したノートをもとに友達同士で交流し、加筆や修正を加え学び合った。終末の振り返りでは、板書からキーワードを選び短時間でノートに書くことができるようになった。

課題としては、①自力解決で下位の児童も考えを可視化できるようにするための授業の在り方を研究し日常化していく（関係図、テープと数直線図、表やグラフ等の表し方があるが、下位児童に寄り添うために、何で表すか何を使って考えられそうかを全体共有してから自力解決に入る。）②対話（児童と児童、児童と教師）を通して児童の考えを明確にし、課題を解決していくために、学年相応のスキルを習得させる（図や表の使い方、話型、パターン化）、③コロナ禍における対話的な学習の在り方を研究していくことが挙げられた。

本校児童の実態として、CRTの意識調査結果から「主体的に学習に取り組む態度」は全学年ともにＡの児童が少なくＢとＣが多い傾向にある。日頃の様子を見ていても、決められたことを行う素直さはあるが、自分で考えて行動したり失敗を恐れずに前向きに取り組もうとしたりする意欲が低く、学習に対して自信をもてない児童も多く見られる。全ての児童に学ぶ意欲をもたせ共に学ぶ楽しさを実感させるためには、既習事項の何が使えるか、どのように使って考えるかを全体で共有し、解決の見通しをもたせることで、解決できた達成感や充実感を味わわせることが大切であると考える。また、自分一人で考えるのではなく他者との対話を通して課題解決を行い成功体験を積み重ね、自信をもたせることも必要である。

今年度は、算数科で児童が意欲をもち、対話（児童と児童、児童と教師）を通して児童の考えを明確にし、課題を解決していくために、対話的な学習を支える力として学年相応のスキルを習得させ対話力も育成していきたい。自分の考えを可視化させながら、他者との対話を通して共に学び合い問題解決する授業づくりを目指し、本主題を設定することとした。

２　研究のねらい

共に学ぶ楽しさを実感させるための効果的な指導の在り方について、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

共有した問いの解決に向けて、対話を通して協働的に学ぶことによって学ぶ楽しさが実感ができ、児童の学習意欲が高まり学習の理解も深まるのではないか。

４　研究内容

(1) 既習を意識した導入の工夫
(2) 自分の考えを可視化し、対話を通して学び合うための工夫
(3) 学びを実感するための振り返り活動の在り方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究

月	日	内　容
７	７	第１回授業研究（要請訪問）（３学年）授業者　馬渡静香 「棒グラフを使って」　講師：八戸市総合教育センター　副所長　松橋祐哉　氏
		自分の考えの根拠となるところに印を付ける、グラフの縦軸の数字を指で指し示す、言葉を付け足すなど可視化させる。考えを伝え合う場面では、ワークシートを見たり指差ししたりして考えの根拠を示しながら説明させた。
９	１	第２回授業研究（２学年）授業者　大河ひとみ 「１００をこえる数」
		数字カードを並べたり、ペア、グループでの大きさ比べをしたりすることで、大きいと言えるわけを考えたり説明したりしながら、対話を通して学び合わせた。
１１	１０	第３回授業研究（要請訪問）（５学年）授業者　山口義始 「平行四辺形の面積」　講師：八戸市総合教育センター　副所長　松橋祐哉　氏
		ワークシートの図に矢印や線、式等を書いて自分の考えを可視化させる。全体対話では、変形方法についてリレー方式で発表させ、新しい考えを全体で共有し、式に結び付けて考えさせた。

(2) 一般研修

月	日	内　容
４	１４	今年度の研究について、学習用コンピュータ活用研修①「リモート授業」
５	１２	道徳科に関しての研修　提案授業（本校　道徳教育推進教師　安ケ平祐美子）
６	２３	学習用コンピュータ活用研修② 「一人一台端末の活用」について　　総合教育センター　主任指導主事　大下洋一　氏
８	１８	小・中学校ジョイントスクール推進事業　第一中学校区第二回合同研修会
		学習用コンピュータ活用研修③「端末持ち帰りに向けて」 クラスルームの活用、クロムブック活用推進プラン案について
８	２５	県学習状況調査（５学年）
９	２２	学習用コンピュータ活用研修④「Meet」
１０	１３	学習用コンピュータ活用研修⑤「休校中のオンライン授業」
１１	２４	日常の授業実践について
１	１１	日常の授業実践発表（各学年、みどり学級）、Q-U　結果の考察と全体共有（研修主任） 学習用コンピュータ活用研修⑥「ジャムボード」

６　研究の成果

(1) 導入時に前時と本時の違いを明確にして問いを共有する学習の流れを積み重ねた。このことにより、児童が課題解決に意欲的に取り組むことができるようになった。
(2) 考えの根拠を印や直線、言葉を付け足すなどの方法で可視化させたことは、双方向の対話を生み、友達の考えを全体で共有することに有効であった。
(3) できるようになったことやもっと考えてみたいことを書かせたり、説明させたりしたことは、自己の学びを確認したり変容を自覚させたりすることに有効であった。

７　研究の課題

(1) 児童が自分の考えをもつためには既習内容を想起することができなければならない。また、考えに自信がもてないのは根拠を明確にできないからである。日頃から、既習の知識や経験と関連付けて考えさせるような指導の工夫が必要である。
(2) 考えを可視化させる手立てとして有効な表現方法を共有し、今後も板書やノートの中で活用していきたい。(印や線、記号など、簡単で誰が見ても分かる表し方に慣れさせる)
(3) 対話の基礎となる聞く力が十分でないため、深まりがなかった。発表の内容を考えさせながら対話させていく指導の工夫が必要である。

（記入者　佐々木　直子）

柏崎小

主体的に学ぶ柏っ子の育成

～国語科における読み取る力を育てる授業づくり～

（２年計画の２年次）

校　長　　三角　浩司

１　研究主題について

本校では、教育目標に「夢をもち　自分を育てる柏の子」を掲げ、発達の段階や個性に応じて「夢」をもち、自分の心の中の「三本の苗木：やる気・根気・勇気」を育て広げる教育を行っている。今年度は、昨年度の研究の成果と課題を受け、研究主題を引き続き「主体的に学ぶ柏っ子の育成」とし、日常の授業改善を繰り返しながら子どもを育てる取組を行っていくものとした。

昨年度の校内研究では、国語科に焦点をしぼり、児童が主体的に学んでいくために、読み取る力を育てる効果的な指導の在り方についての実践研究に取り組んだ。それにより、読み取る必要性を高めるために、思考のズレを生かすなどの課題設定の工夫、問い返しやゆさぶりなど発問の吟味の重要性を確認することができた。

一方で、「正しく読む」という概念の共通理解を図ることやコロナ禍にあっても随時研究成果や反省を共有していく場をもつことが必要との認識が明らかになった。そこで今年度は、２年計画の２年次として研究を継続していく上で、国語科の授業において目指したい「主体的に学ぶ」児童像の共有、発達の段階に応じた学習の系統性等を意識しながら授業実践を行っていくことで、本校児童が「わかった！できた！身についた！」を実感でき、主体的に学ぶ力を高めていけるものと考え、本主題及び副題を設定した。

２　研究のねらい

児童が主体的に学びに向かい、読み取る力をつけていくための効果的な指導の在り方を国語科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

課題設定、発問の仕方、活動のさせ方を工夫することによって、教材を正しく読み取り、主体的に学ぶ児童を育てることができる。

４　研究内容

(1) 正しく読み取らせる働きかけの工夫

ア　正しく読み取る必要性のある課題設定

イ　読み取る視点に気付かせる発問の仕方

ウ　問いを生み出す教材提示の工夫

(2) 読み取ったことを表現する場の工夫

ア　資料提示、学習形態、ノート・ワークシートの工夫等

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等
7	7	第 1 回授業研究（4 学年）文学的文章「一つの花」／教諭　高橋留美子
9	6	第 2 回授業研究（5 学年）文学的文章「たずねびと」／教諭　松橋 海渡
9	10	第 3 回授業研究（1 学年）説明的文章「うみのかくれんぼ」／教諭　渡辺 柚
9	29	第 4 回授業研究（6 学年）文学的文章「やまなし」／教諭　小向 一樹
11	8	第 5 回授業研究（3 学年）説明的文章「すがたをかえる大豆」／教諭　栗村千香子
11	10	第 6 回授業研究（2 学年）説明的文章「馬のおもちゃの作り方」／教諭 星野 達郎

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
6	2	鉄棒運動の指導法の在り方についての研修 講師：本校教諭　小向 一樹
6	23	国語科の問題解決的な授業の在り方についての研修 講師：福田 秀貴　主任指導主事
6	30	1 人 1 台端末活用についての研修 講師：石井一二三　主任指導主事
8	20	主体的な学びを支える ICT 活用についての研修（1 人 1 台端末活用実践報告会） 講師：本校教諭　星野達郎・畑中裕子・久保理恵・小向一樹
12	15	自己の生き方について考えを深める道徳授業についての研修 講師：本校教頭　相馬 昌之

６　研究の成果

(1) 児童は、教師の課題設定や発問の工夫により問題を自分事として捉え、主体的に学習に取り組むことができた。

(2) 児童は、サイドラインを引きながら考えたり教材文から根拠を捉えたりすることができるようになり、読み取ったことを発表やノートを通して表現する力が育ってきた。

(3) 教師は、問題解決的な学習を展開するため、課題設定や発問の工夫を意識・共有することができた。また、児童が表現する場のための資料提示や板書の工夫・ＩＣＴ（１人１台端末）の活用も進めることができた。

(4) 研究体制として、コロナ禍においてもオンライン活用により研究を継続できたことがよかった。また、「正しく読む」力を付けるために系統的な指導や教材間で関連付ける学習を意識できたことにより次年度への意識が高まった。

７　研究の課題

(1) 今後も取組を通じて誰一人取り残さないための手立ての工夫が求められる。 また、教材・教科をまたいで得られた成果を共有し、校内研究の日常化を図っていく必要がある。

（記入者　小向　一樹）

小中野小

自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

（３年計画の１年次）
校長　花生　典幸

１　研究主題について

これまで本校では、道徳の授業を中心に「対話する場面」、「お互いの考えを聞き合う場」、「自分の考えを振り返る場」を設定し、２年間研究を進めてきた。また、学校生活全体で「話す・聞く系統表」を生かした指導を継続してきた。それにより、相手の気持ちを深く理解し、進んで自分の思いや考えを分かりやすく相手に伝えようとする児童が増え、話す・聞くスキルが身についてきた児童も見られるようになってきた等の成果を確認することができた。しかし、全体的に見ると、自分の考えを進んで発表する意欲がもてなかったり、伝えたい考えや意欲はあるが、相手に対して、分かりやすく自分の考えを伝えたりすることができない児童の割合が依然として多いことが分かった。

そこで、今年度は、研究テーマはそのままで、国語科と算数科に研究教科を広げることとした。そして、昨年度までの研究の成果を生かしながら、「対話する場面」をただ設定するのではなく、「発問」を精選したり、「教材へのしかけ」を工夫したり、「教材提示・板書」の工夫をしたりすることにより、児童が必要感をもって対話に臨めるように促していきたいと考え研究に取り組むこととした。また、子どもが主体的に発言しようとする姿勢が見えた際には積極的にほめることで、学習意欲を喚起していくことにつなげていくことも確認した。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業の中に「対話する場面」を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

４　研究内容

(1)　「対話をする場面」の工夫
　ア　発問の工夫
　イ　教材へのしかけ
　ウ　教材提示の工夫
　エ　板書の工夫
　オ　問い返しの工夫
(2)　「話す・聞く」系統表を生かした指導、評価の工夫
　評価・改善案を次の授業に生かす。
(3)　「自らを振り返る活動の設定」の工夫
　ア　振り返させる手段の工夫
　イ　振り返させる方法の工夫
　ウ　児童の変容を広げる工夫
(4)　学級の支持的風土の育成

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修内容・学年・授業者等
９	２	第１回授業研究（６学年）授業者　教諭　佐々木　亮輔 算数「式のよみ方」
１０	２１	第２回授業研究（１学年）授業者　教諭　類家　志乃 国語「じどう車くらべ」
１１	１１	第３回授業研究（４学年）授業者　教諭　小杉　宙裕 国語「ごんぎつね」

(2) 一般研修

月	日	研修内容・講師・概要等
６	１８	「一人一台端末の活用」について 講師：八戸市総合教育センター 主任指導主事　石井　一二三
６	２３	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修
８	２５	青森県学習状況調査採点と分析
１２	２２	総合的な学習の時間の単元構成計画の見直し①
１	１９	総合的な学習の時間の単元構成計画の見直し②

６　研究の成果

(1) 対話する場面を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫したことにより、子ども同士の対話スキルに向上が見られた。また、教師が子ども同士の対話をファシリテートすることにより、児童同士の関わりが増え、子ども主体の授業が多くみられるようになった。

(2) 対話を意識させて授業を継続したことにより、相手の話に真剣に耳を傾け、相手を理解しようとする意識が育ってきた。

７　研究の課題

(1) 問題意識をもち、その問題に向かって解決するための意味のある対話ではなく、ただの意見交流で終わってしまうことが少なからずあった。授業の中で対話させる場面(課題設定の工夫が必要)をはっきりとさせ、どこで、どのように、何のために行わせるのかを吟味して対話を設定していく必要がある。

(2) 子ども同士の対話を促す際に、教師の発問が適切でないため、活発な対話にならなかったり、課題解決に至るような深い話し合いが実現できなかったりした。どんな発問をすればよいか、また、対話をより効果的なものにするために、課題をどう設定すればよいか等の吟味が必要である。

(記入者　佐々木　亮輔)

江陽小

主体的に学ぶ児童の育成

～児童が表現したくなる「しかけ」と「発問」の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　　豊島　匡生

１　研究主題について

令和２年度の研究主題「確かな学力を育てる授業づくり」の実践についてのアンケートでは、児童に問いの意識をもたせる「しかけ」と「発問」の工夫についての研究を深め、日常の授業に生かすことができたという意見が多かった。実際、導入場面や自力解決の場での「しかけ」や「発問」の工夫によって、児童が、課題解決に向けて主体的に学習に取り組む姿が見られた。

しかし、本時の目標に迫る場面で、意欲や活動が停滞することがあったため、導入場面での「しかけ」や単発の「しかけ」ではなく、授業全体を通して児童の主体性が持続するような「しかけ」の工夫や、効果的にしかける場面選びについて、さらに実践を重ねていくこととした。

そこで今年度は、教科を算数科に絞り、児童に問いの意識をもたせる「しかけ」と「発問」について研究を深めることとした。導入では、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見できるようにし、全体でそれを共有させる。展開では、児童が表現したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりする。それによって、これまで身に付けた「見方・考え方」を働かせて課題解決に向かい、最後までやり遂げようとする児童を育てることができると考える。このような授業を重ねることで、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

２　研究のねらい

問いをもち、最後まで主体的に学ぶ児童を育成するための「しかけ」と「発問」の工夫について、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 導入で、課題提示や発問・指示を工夫することで、「あれ？」「どうして？」「今までとちがう。」「このままではできない。」「どうすればいいの？」など、児童が自ら問題を発見することができる。

(2) 展開で、児童が話したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりすることで、児童の主体性を持続させることができる。

４　研究内容

(1) 問いの意識をもたせそれを全体で共有させるための、課題提示や発問・指示の工夫。

(2) 授業全体を通して児童の主体性を持続させるための、「しかけ」の工夫や場面の選択。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師	授業の概要・成果・課題
7	6	計画訪問・要請訪問 第１回授業研究（２学年） 授業者：担任　横内真樹子 ＴＴ　花岡梨紗 題材名：「１００をこえる数」 講師：総合教育センター副所長 松橋祐哉　先生	既習を使って主体的に数えたり、教師や友だちと対話して解決策を見出したりすることができた。解決策については、教師の説明よりも他のグループの数え方から気付かせることができればよりスムーズに展開でき、個人で数えさせる活動もできたのではないかと思われる。
１２	1	第２回授業研究（６学年） 授業者：担任　野里貴広 ＴＴ　花岡梨紗 題材名：「図形の拡大と縮小」	プログラミングソフトを使って正三角形を拡大・縮小することで、対応する直線の長さや角の大きさの関係について理解を深めることができた。本時が、ICT を活用することで算数科のねらいに迫るものなのかを十分見極めて、ツールとして有効に活用することが望まれる。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師	研修の概要
5	２２	児童理解 行動面・学習面・身体的な面・家庭環境等	左記の面で、共通理解して指導する必要のある児童について、顔写真を見ながら情報を共有した。
7	２１	救命救急法（ＡＥＤの取り扱いなど） 講師：八戸東消防署小中野分遣所 職員３名	2015 年度のガイドラインにそって、意識の確認、呼吸の確認、胸骨圧迫、ＡＥＤの演習を実施した。
8	２０	クロームブックの活用 （クラスルームの作成・活用など） 講師：八戸市総合教育センター 主任指導主事　石井一二三　先生	授業での活用例として、Meet、ドキュメント、スプレッドシート、スライドの演習を実施した。 Classroom を作成し、Meet で児童を参加させるやり方を実習した。

６　研究の成果

(1) 導入での課題提示や発問・指示を工夫したことで、児童が問いの意識をもつようになった。

(2) 児童が課題を把握し、「できそう」「話したい」と見通しをもって解決しようとする姿が見られるようになった。

７　研究の課題

(1) 展開で、効果的に「しかけ」をする実践があまり多く得られなかったので、来年度も実践を続ける。

(2) 導入での「しかけ」は、大掛かりなものではなく、児童の知的好奇心を刺激し日常化できる授業実践を積み重ねる。　（記入者　花生　貴美子）

湊小

自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成

～言語活動の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　加　藤　　慎　一

１　研究主題について

本校は、昨年度、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成」を研究主題とし、教科を４教科（国語・社会・算数・理科）に広げて、「話す・聞く」を中心に言語活動のさらなる充実を図りながら、次のような手立てを工夫した。

○基礎・基本のさらなる定着
○自分の考えたことを表現させる方法
○問題解決のための交流の場の設定

その成果として次のようなことが挙げられる。

・授業の初めに前時の復習をしたり、挿絵・具体物・半具体物の使用や動作化など問題提示の仕方を工夫したりすることで、主体的な自力解決につながった。
・自分の意見をまとめる時間を確保し、ペア、グループ、全体と話合いを繰り返し行うことで自分の意見を伝えることができるようになった。
・友達の意見を聞いて、うなずく、付け加える、質問するなど少しずつ反応できるようになってきた。

その一方で、話合いの中で、教師が分かりやすく言い換えたり、付け加えたりなど話合いがスムーズに進むように子ども同士の話合いに教師が大いに関わらないと話合いが成立しないことが多い。また、言葉だけのやり取りだと正確に相手に伝えることや聞いて理解することが難しいので、実物、資料や図などを活用した話合いができるようにしていきたい。意見を話す、聞くことはできるようになってきたので、相手の話を聞いて自分の考えを深めたり、相違点を見つけてよりよい方法を考えたりする話合いをできるようにさせていきたい。

そこで、今年度も上記の研究主題を継続して設定し、日々の授業実践において言語活動の工夫をすることによって、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子ども」の育成を目指すこととした。

２　研究のねらい

意欲をもって説明しようとする子どもを育成するために、自分の考えが相手に伝わるように話す指導や、相手の伝えたいことを考えて聞く指導を工夫することによって、基礎・基本が定着するとともに、思考力・表現力が高まることを実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

相手に伝わるように話したり正確に聞いたりする活動の工夫をすることにより、基礎的な知識・技能が身に付き、自分の考えを的確に表現できる児童が育つ。

４　研究内容

(1) 児童が意欲的に問題解決に取り組むようにするための工夫
　ア 「問い」や必要感をもたせる手立て
　　① 課題提示の工夫
　　② 発問の吟味
(2) 児童同士が積極的に関わる学び合いができるようにするための工夫
　ア 話合いのもたせ方の工夫
　　① 授業のどの場面で話合いをさせるか
　　② ペア、グループ、全体
　イ 説明のさせ方の工夫
　　① 図や資料を使って説明する
　　② 用語（既習事項、教科の専門用語、本文からの引用など）を使って説明する
　　③ 理由や根拠を明確にして説明する

ウ 話合いの仕方の工夫

① 言い換えて話す

② 付け足して話す

③ 質問したり聞き返したりする

④ 相手が話したことを受けて自分の考えを話す

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名	授業者・指導助言者	主な内容
6	23	４学年 国語 「一つの花」	授業者：教諭　三浦　圭太	ゆみ子をとりまく状況の変化から、十年後のゆみ子と戦争中のゆみ子を比べながら話し合う学習。ネームプレートを活用して立場をはっきりさせ、サイドラインを引いて根拠や理由を明確にしたことで自分の意見を分かりやすく発表できた。教師が「今の意見はどう思うか。」と全体に広げていくような話合いをしていくとよい。

(2) 一般研修

月	日	内　　容	
5	6	タブレット研修会	本校ＩＣＴ主任　　講師　三浦　潤也
6	2	タブレット研修会	本校ＩＣＴ主任　　講師　三浦　潤也
6	16	特別支援研修会	講師　こども支援センター 副所長　種子　和憲氏
8	20	特別支援研修会	本校ことばの教室　教諭　小林　美希子
9	29	タブレット研修会	本校ＩＣＴ主任　　講師　三浦　潤也
11	24	タブレット研修会	本校ＩＣＴ主任　　講師　三浦　潤也
2	22	ＣＲＴ分析・考察	

6　研究の成果

(1) 導入にゲームやクイズ、センテンスカード、視覚に訴える資料、既習事項の確認を取り入れることで、意欲的に問題解決に取り組むようになった。

(2) ペア・３～４人グループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を設定した。話型を提示してパターンを身に付けさせる話合いを繰り返し行うことで、自分の意見を伝えることができるようになってきた。

(3) キーワードや図、順序を表す言葉などを板書し、意識して使うようにさせたことで、話合いや説明のときに視点がずれないようになってきた。

7　研究の課題

(1) 意見を話す、聞くことはできるようになってきたが、自分の考えを比べながら聞く、聞いたことをしっかりと理解して自分の考えを深めているかといえば個人差がある。各教科において、基礎・基本を徹底させ、話型の提示などパターン化し、話すことに抵抗がないようにさせていく必要がある。

(2) 話合い活動の中で、分かるところまで発表したり付け足して説明したりすることや友達の考えを理解して言い換えて説明するなどして全体で考えをまとめていけるような学び合いの指導が必要である。

（記入者　　中川　彩子）

青潮小

主体的に学ぶ子どもの育成

～問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　小泉　孝一

１　研究主題について

本校では、教育目標である「たくましく　心美しく」の具現化のために、昨年度から「主体的に学ぶ子どもの育成」という主題で、全教科において研究を進めてきた。昨年度までの研究により、理科の授業では、導入場面で２つの事象を比較する場面を設定したこと、また、特別な教科道徳の授業では、アンケートの結果を踏まえた問題提示の工夫により、児童の課題解決意識を高めることができた。また、どの教科においても、見通しをもたせる手立てとして、写真や数値などの資料や既習事項の振り返り、ヒントカードなど工夫したことで、どの児童もおおよそ課題解決の見通しをもつことができた。しかし、児童が主体的に問いを見つけ、児童と教師、児童相互のやり取りの中での、問いの共有をすることに曖昧であったり、教師主導の展開になることもあったりするという課題が挙げられた。また、課題解決に向けて、効果的な意見交流の場が必要であると考えるが、意見交流のために書く活動の工夫や話す・聞く活動の工夫が必要であるという課題も挙げられた。

そこで、今年は、昨年度までの研究を踏まえ、また、新学習指導要領を受けて、問題解決的な学習を通して、児童が課題解決に向けて主体的に学ぶことができるよう、学ぶ意欲を高める課題提示や教材、発問の工夫、見通しをもたせ、解決に向けた場の設定の工夫をすることとした。このような研究をすることで児童が「なぜだろう。」から「分かりたい。知りたい。」という課題意識をもって学習に取り組む「主体的に学ぶ子どもの育成」に迫ることができると考えた。

今年度の学校目標は、「よさを生かし、主体的・自立的に取り組む子どもの育成」で、学びづくりの重点施策は、子どもたちの確かな学力の向上（基礎・基本の内容の定着）である。児童が自ら考えたい、調べてみたいと主体的に課題に取り組む授業を重ねることで学力を定着させていきたい。

２　研究のねらい

課題解決に向けて主体的に学ぶことができるようにするために、問いの共有ができる課題提示や見通し、解決に向けた場の設定をどのように工夫していけばよいかを、問題解決的な学習を取り入れた授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

「なぜだろう。」から「分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したか。」が明確になる課題解決するための手立てや場づくりの工夫をすることで、主体的に学ぶ子どもを育成できる。

４　研究の内容

(1) 児童が問題を発見し、主体的に問題解決にむかえるよう、教師のはたらきかけを工夫する。

（導入から課題設定まで）

・教材の工夫
・発問の工夫

(2) 見通し、解決に向けた場の設定の工夫

・書く活動の工夫
・話す・聞く活動の工夫

５　年間計画

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・授業の概要
６	３０	○第１回研究授業・協議（要請訪問　５学年　算数）授業者　教諭　尾形　和紀 題材名　「三角形・四角形の角」 助言者　八戸市総合教育センター副所長兼主任指導主事 松橋　祐哉　先生 ・様々な三角形の３つの角を１点に集める活動を行うことを通して、すべての三角形の内角の和が 180 度になることを理解する。
９	１	○第２回研究授業・協議（１学年　道徳）　授業者　教諭　嶋守　由紀 主題名　れいぎただしく　教材名「スポーツとおじぎ」 ・おじぎについて考える活動を通して、礼儀は心と形の両方が大事であることが分かる。
１１	２４	○第３回研究授業・協議（４学年　道徳）　授業者　教諭　加藤　愛理 主題名　正直に生きる　教材名「ぼくは MVP」 ・心情曲線を用いて正直について考える活動を通して、自分自身をごまかさずに生活していこうとする心情を育てる。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師　等
５	２７	・「問題解決的な授業づくり、主体的に取り組む態度の評価について」 講師　八戸市教育委員会　教育指導課副参事兼主任指導主事 日向端　聖　先生
７	１４	・救急法（AED 講習会・熱中症対策） 講師　八戸東消防署員
９	３	・１人１台端末の活用研修会 講師　八戸市総合教育センター　主任主導主事　大下　洋一　先生

６　研究の成果

(1) ・授業の導入場面で、揺さぶりをかけ、思考のズレを生む問いかけをすることで、児童が問題意識をもって取り組む姿がみられた。
・提案授業からいろいろな教科での「しかけ」を知ることができ、参考になった。
・課題を工夫し、児童の言葉を使ってめあてを引き出した授業を展開することで、学習に意欲的に取り組むことができた。

(2) ・他の児童の解決方法を発表させる場面を設けたことで、自力解決できない児童の参考となった。
・隣の人と話し合う、意見を聞き合う、ヒントコーナーを設けるなど場づくりの工夫で見通しをもって考える児童が増えた。

７　研究の課題

(1) ・児童の実態に合わせて、思考のズレを生じさせるような教師の働きかけを工夫する必要がある。
・考えることを苦手としている児童のため、考える場面の工夫が必要である。

(2) ・既習事項を基に考えをもつことができるようにするために、見通しだけではなく、考えを確実にするなどの工夫も必要である。

（記入者　　髙橋　恵）

白銀小

「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業づくり

～算数科におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫～

（３年計画の４年次）

校長　　堀合　秀治

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では「たくましく心豊かな子」を教育目標に、「明るく思いやりのある子、すすんで学ぶ子、健康にくらす子」を努力目標に掲げ、教育活動を展開している。その中で校内研究が特に担う役割は「すすんで学ぶ子」の育成である。学習をする上での基礎的な学習ルールを徹底させ、児童一人一人の学びの場である授業において、すべての子どもに主体的に学ぶ態度を身に付けさせ、確かな学力を保証することが「たくましく心豊かな子」の育成に寄与すると考える。

そこで、全ての児童に学ぶ意欲と、学ぶ喜びをもたせるため、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを継続していくこととした。進んで学び、確かな学力を身に付けさせるためには、教師の授業力の向上が必要である。児童が「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業づくりの研究は、学校目標にせまっていくことができるものと考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態とこれまでの研究経過から

本校の実態として、基礎的な課題を素早く解決できる児童がいるが、授業の取り掛かりから時間がかかり、なかなか学習に乗れずにいる児童も多い。その差が大きいために、どちらも満足のいかない状態となっていることもある。また、この状態は授業への集中を欠きやすく、全員が確実に身に付けるべき基礎・基本の習得や授業中の課題の解決にも影響が出ていたが、６年前からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだところ、児童の学習への意欲が少しずつ高まり、学習の理解も深まってきた。昨年度は、「焦点化」を意識して授業することで、活動に見通しをもてるようになった児童が増え、児童の集中力も高まってきた。また、コロナ禍の中でも「共有化」の場面では、グループやペアで分担して発表するなど、全体で自分の考えを伝える場の工夫が見られた。伝え合いを繰り返すことにより、児童はペアや全体等で話し合うことが抵抗なくできるようになったり、理解が深まったりして、達成感も見られた。

しかし、コロナ禍の中、話合いや伝え合いが活発にできたとは言えず、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立ても十分とは言えなかったので、「共有化」をどのような形で行うともっと効果的であるのか、活動のさせ方の工夫が必要であることが分かった。

そこで今年度も引き続き、「焦点化」の場面で見通しをもって課題に取り組めるような手立てや方法を工夫し、「共有化」の場面で児童のやり取りや深め合いが効果的にできるように、実践を蓄積していきたい。授業づくりにおける「焦点化」と「共有化」のより深い効果を算数科に絞って進めていきたい。それにより、児童が主体的に自分の考えをもち、その考えを伝え合うことで理解を深め、学びを確実なものにできると考える。

２　研究のねらい

すべての児童が「わかった！できた！身についた！」を実感する授業を目指すため、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて教員が理解を深めることによって、学習に困難を抱える児童だけでなく、全ての児童の学習への意欲が高まり学習の理解も深まることを授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

ユニバーサルデザインの視点に基づいた授業づくりを推進することによって、全ての児童の学習への意欲が高まり、学習の理解も深まるのではないか。

４　研究内容

(1) 授業づくりにおける「焦点化」の場面で、子どもたちが見通しをもって取り組めるような手立てや方法を工夫する。（めあてや課題設定、発問の工夫等）

(2) 授業づくりにおける「共有化」の場面で、子どもたちのやり取りや深め合いが効果的にできるような手立てや方法を工夫する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名等
6	14	教育指導課・総合教育センター訪問　　全学級授業 第１回授業研究　（２年１組）　　授業者　教諭　後藤　静花 算数「たし算とひき算のひっ算（1）」
9	8	第２回公開授業　（４年１組）　　授業者　教諭　淡路　衣津季 算数「割合」

(2) 一般研修

月	日	研　修　日　の　内　容
4	28	校内における配慮を要する児童の共通理解
6	9	一人一台端末活用研修（課題の配付・アンケート作成の仕方）
6	23	児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）
6	30	教育指導課・総合教育センター訪問報告会
8	20	個別の指導計画の報告会 一人一台端末活用研修（共有ドライブ、デジタル教材チエルの活用の仕方）
8	25	県学力状況調査　学力分析
9	1	一人一台端末活用研修（オンラインによる授業の仕方）
11	24	特別支援指導について 講師　こども支援センター副参事兼主任指導主事　小林　真由美先生
12	8	児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）
1	7	特別支援教育に関わる指導について　（さくら学級の実態・個別の指導計画）

６　研究の成果

(1) 焦点化の場面では、発問や課題提示を工夫する授業をすることで、既習事項を使って考えたり、自力解決へ見通しをもって取り組んだりする児童が見られるようになり、児童の意欲や集中力が高まった。

(2) 共有化の場面では、伝え合う場面を意図的に取り入れ、グループやペアでの発表の仕方を工夫することで、友達の考えを聞いて自分の言葉で説明したり、話合うことが抵抗なくできるようになったりするなど、理解を深めることができた。

７　研究の課題

(1) 焦点化の場面では、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立てがまだ十分とは言えなかった。活動内容を理解することはできるが、問題解決につながる見通しまでもつことができない児童も見られた。今後は、児童がさらに見通しをもって主体的に問題解決に取り組めるような指導の工夫をしていきたい。

(2) 共有化の場面では、時間の確保が難しかった。個人差が大きく、発表者が固定化してしまったり、自分の言葉で説明できなかったりすることで、個別の指導に時間を要してしまうことが多かった。理解を深めるための更なる効果的な指導の工夫をしていきたい。

（記入者　古川　裕子）

ねばり強く考えを深め合う子の育成

～よく聞き、分かりやすく話す指導を通して～

（３年計画の２年次）

校　長　　寺　井　　健　司

１　研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、主体的・対話的で深い学びを通して確かな学力を身に付けることができるよう、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努める」ことが大切であると考える。また自分の考えをもって伝え合える場を設定し、話合いのさせ方や支援・手立ての在り方を工夫することは、生き生きと自分の考えを表現することにつながり本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、授業前に「話し方・聞き方名人の歌」を日常的に唱和させることで、気を付けるべき事項を意識できるようになり、聞き方・話し方が向上してきた。話し方では、理由付け・意見の付け足しができるようになってきた。また、教師からの問い返しを継続して行ったり、反応を促したりすることで、子ども同士でも問い返しや反応ができるようになってきている。

しかし、話合いの場において、友達の話を最後まで聞いていなかったり、話している最中に相手の話を遮ってしまったりする様子が見られ、話合いが深まらないことなどが課題としてあげられた。さらに、アンケートの結果から、分からないとすぐにあきらめてしまったり、相手の理解が不十分でも説明を根気強く続けることができなかったりする傾向が見られた。

そこで、今年度は、研究主題に新たに「ねばり強く」の文言を加えることとした。「よく聞き、分かりやすく話す」指導の工夫を継続することで、最後までしっかり聞くことや諦めずに考えること、相手が分かるまで説明したり分かりやすく話したりできるのではないかと考える。

(3) 「ねばり強く考えを深め合う」とは

「何を理解しているか、何ができるか」という生きて働く「知識・技能」を習得させ、「理解していること・できることをどう使うか」という未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成していくことが深い学びにつながると考える。「自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった。」「他者の話を聞いたら自分の気付かなかったことが分かった。」などの対話的活動を通して学びが深まると考える。また、学習内容を理解し記憶することも重要だが、それを通して新たな事象に対する見方を形成し、「自分なりの見方・考え方」ができるようになることも深い学びととらえる。そして、このような取組を日常の授業の中で継続して行うことが、確かな学力の育成につながると考える。これらから、本校では「ねばり強く考えを深め合う」ことを、次のようにとらえる。

ア　お互いに納得できるまで話し合い、学びを深めること。
イ　お互いに気付かなかった新しい視点を獲得できるまで、学びを深めること。
ウ　お互いに新たな事象に対してよりよい考え方ができるまで、学びを深めること。

２　研究のねらい

ねばり強く考えを深め合う子を育成するために、発問や学びに向かう力を向上させる手立て、話合い活動の工夫、聞き方・話し方の日常的な指導はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

よく聞き、分かりやすく話す指導を工夫することにより、ねばり強く考えを深め合う子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 発問（主発問・補助発問）の工夫

ア　教師からの問い返す内容の吟味とその効果等について。
イ　発問の仕方、内容、タイミング等の工夫。

(2) 学びに向かう力を向上させる手立ての工夫

子どもが見通しをもって主体的に取り組めるように、教材・環境の工夫をする。

ア　課題の吟味、問題提示の仕方や場面想起のさせ方の工夫。
イ　「やりたい、できそう！」と問題解決の見通しをもたせる場の工夫。
ウ　振り返りを生かす工夫。

(3) 話合い活動の工夫
ア　話し合う観点を与える等、思考を深める工夫。
イ　順序立てて話す指導の継続。

５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
９	１５	第１回授業研究（３学年）　題材名　「あまりのあるわり算」 授業者　高橋　亜佑　　指導助言　本校教頭　三津谷　喜美典
１１	１０	第２回授業研究（５学年）　題材名　「面積」 授業者　相馬　由紀子　　指導助言　本校教頭　三津谷　喜美典

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	19	支援を要する子に関する情報交換（心の架け橋）　担当　生徒指導部
	24	一人一台端末活用に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三氏
6	16	ＡＥＤ講習会 講師　八戸東消防署鮫分署　署員
	30	絵の描き方について 講師　宇部　好子氏
8	25	県学習状況調査採点
9	15	プログラミング教育に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石　井一二三氏

６　研究の成果

(1) ねらいに沿った問い返しを行うことにより、児童の思考を揺さぶり問いをもたせたり、話合いを焦点化させ根拠を明らかにして考えを深めたりすることができた。
(2) 課題の提示の工夫により、主体的に学びに向かうことができた。そのままの教科書の問題ではなく、必要に応じて「数字を変える」「出題の順序を変える」「多様な考えが期待できる課題提示」など、少しの工夫をすることは、児童が意欲をもって学びに向かう上で有効であった。
(3) 既習内容の確認をしたり、視覚的に具体的なイメージをもたせたりするなど、見通しのもたせ方を工夫することは、児童の思考を促し、主体的に課題を解決しようとする意欲をもたせる上で有効であった。
(4) 話合いのさせ方の工夫により、話合いがスムーズに行われた。話し合う際、何を話し合えばよいのかについて観点をはっきりさせたことや、「話し方の努力事項」（ポイント）を意識させて説明をさせたこと、「考えの足跡」（考えの過程）や既習内容の掲示が話合いに生かされ、ポイントがずれることなく、話合いの内容が深まっていた。
(5) ペアやグループで話し合う際、相手に分かるようにノートやワークシートを指し示しながら話したり、図をかいて説明したりするなど、説明の仕方に相手意識が見られるようになってきた。また、相手の話を聞いて、分かろうとする意欲に高まりが見られた。

７　研究の課題

(1) 教師の問い返しにはよく反応し、考えを深めるようになってきた。今後は、話合いの場で「子ども達同士での問い返し」を意識させることにより、練り合いの場における言語活動をより充実させ、対話を通した主体的で深い学びへつなげていく必要がある。
(2) グループ内での話合いはこれまでの経験の積み重ねによりできるようになってきているが、粘り強く自分の考えを伝え合うまでには至っていない。分かっている子だけが話合いを進めるのではなく、理解が不十分な子が、「あっ、わかった」と思えるようにすることが大切である。その素地を養うためにも、自然に聞き合ったり教え合ったりできる風土を醸成していくことが必要である。
(3) 課題提示の工夫や問いを引き出す問い返しは、学びに向かう意欲を引き出す上で効果が見られた。今後も児童が自ら解決したい、取り組んでみたいと思うような課題の提示や教師のはたらきかけの工夫を継続していくことが求められる。
(4) 児童の実態として、「はきはき話す」ことが苦手な子が多い。全体の場で、自分の意見を堂々と言える力はまだ付いていないように思われる。話したくなる状況を作る手立てや自信がない子への手立てを講じ、「話し方や聞き方」のスキルの日常的な指導を積み重ねていく必要がある。

（記入者　　時村　真弓）

白銀南小

学ぶ意欲を高めるための指導の工夫

～国語科における問題解決的な学習を軸とした授業実践を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　越　戸　　順　子

１　研究主題について

本校の児童は，明るく素直で，与えられた課題に対してまじめに取り組む。しかし，自分の力を高めようと意欲をもって自ら進んで学習に取り組むという点では，消極的な姿が見られる。このような実態から，本校では，教育目標として「豊かな心をもち，主体的に活動する子」，努力目標として「進んで学習する子」を掲げ，自ら課題を見つけ，問題解決に向けて意欲的に取り組む児童の育成を目指している。

校内研究では，２８年度以降，国語科を中心に，書く力や読む力の育成に取り組んできている。令和元年度からは，児童がより主体的に学習に取り組み，思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことを目標に，国語科における「問題解決的な学習」を軸とし研究を進めてきた。「二択」「言葉の追加」「対比」などのしかけにより，思考のずれを起こさせる問いや，文章を読み直す必要のある問いをもたせることなど，課題設定の工夫をすることで，問題解決の意欲を高めることができた。また，全員に自分の考えの立場を明らかにさせることで，文章から根拠を探そうとする主体的な読みにつながり，叙述からの読み取りを大切にする意識が高まった。しかし，考える土台を揃える必要性，問いのもたせ方や焦点化，児童の変容の見取り方など，いくつかの課題も見いだされた。

そこで，今年度も国語科における問題解決的な学習を軸に研究を継続し，これらの課題を解決したいと考える。「指導する用語を整理し，児童一人一人の土台を揃えること」「児童の思考の流れに沿った学習課題の設定や提示を工夫し，児童の考えをゆさぶり考えさせる授業を展開すること」「考えの変容を児童同士が分かるように対話の視点を明確にすること」などによって学ぶ意欲が高められると考え，本研究主題を設定した。

２　研究のねらい

問題解決に向けて意欲的に取り組むための効果的な指導のあり方を，国語科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 児童一人一人に問いをもたせる学習課題を設定し，話合い活動の充実を図ることによって，児童が課題解決に向かうことができる。

(2)「わかった！できた！身についた！」が実感できる振り返り（自己評価・相互評価）を充実させることによって，児童の学ぶ意欲を高めることができる。

４　研究内容

(1) 学習課題の工夫（一人一人に問いをもたせる課題設定・提示の仕方）

(2) 課題解決に向けての話合いの工夫

(3) 評価の工夫（変容を見取り，次の学びに生かす評価）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者・助言者	授業の概要
６	３０	第１回授業研究（４学年） 〇事実を分かりやすくほうこくしよう 「新聞を作ろう」 授業者　教諭　木村　智花	教師の適切ではない見出しの提示が問いを共有させ，意欲的な自力解決に向かわせた。またグループの話合いを通して他の考えのよさに気付き，よりよい見出しにしようとする意識の高まりが感じられた。
９	２９	第２回授業研究（５学年） 〇伝記を読み，自分の生き方について考えよう 「やなせたかしーアンパンマンの勇気」 授業者　教諭　髙橋　裕子	自作のポスターの見出しをクイズ形式にしてグループで紹介し合うことで意欲を喚起した。また仲間分けをしたキーワードについて意見交流することを通して考えを広げることができた。
１１	４	第３回授業研究（１学年）要請訪問 〇せつめいする文しょうをよもう 「じどう車くらべ」 授業者　教諭　平田真亜子 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 福田　秀貴氏	順序を変えた絵カードを並び替え，その根拠を考えさせることによって，学習課題を共有させた。また，クレーン車を最後にした理由を交流しまとめることで，次時の自動車図鑑を作る活動への意欲につなげることができた。

(2) 一般研修

月	日	研修名	講　　師	内　　容
４	２８	子ども理解のための情報交換	担当：生徒指導部	支援を要する児童についての共通理解を図る。
５	２６	１人１台端末活用研修①	八戸市立白銀南小学校 教頭　石岡　茂樹	Chromebook を活用したリモート授業の仕方を学ぶ。
６	１１	１人１台端末活用研修②	八戸市総合教育センター 主任指導主事 石井一二三氏	Chromebook を活用した授業実践を学ぶ。
９	１	ＡＥＤ講習会	八戸市立白銀南小学校 養護教諭　小野梨花子	心肺蘇生法や気道内異物除去についての演習を行う。
１１	１７	特別支援教育研修		４つの特別支援学級の授業参観を通して児童理解や学習の仕方を学ぶ。

６　研究の成果

(1) 導入で学習のしかけをすることによって児童の思考のずれを引き出し，問いを共有させることができた。また，１時間を貫く学習課題の設定が児童の意欲につながった。

(2) ペアやグループでの話合いの場の設定や「反応プロへの道」の日常的な取組が，聞こうとする意識の向上や認め合う学級の雰囲気につながり，積極的に自分の考えを発信したり根拠をつけて説明したりできる児童が増えた。

(3) 「振り返りのポイント」をもとにわかったことや難しかったところ，次にやってみたいことを書ける児童が増え，次時への学習意欲にもつながった。

７　研究の課題

(1) 相手の話を聞いて肯定的な反応はできるが，疑問や問い返し，相手の意見につなげて話し合うことはまだ不十分なので，今後も研究していく必要がある。

(2) 学習課題に対する振り返りはできるようになってきたが，自分の変容を見取ったり，友達の考えを取り入れたりする多面的な振り返りができるように，段階をふんで指導していく必要がある。

（記入者　中野　　千香）

町畑小

学びを生かす子どもの育成

～既習を生かしたステップアップをめざす授業づくり～

（３年計画の４年次）

校長　　工　藤　　正　道

１　研究主題について

本校では、教育目標に「心豊かにたくましく」、努力目標に「すすんで学ぶ」を掲げ、教育活動を展開している。「すすんで学ぶ」を具現化するために、平成３０年度より学びを生かして主体的に課題を解決しようとする児童の育成を目指して授業研究を進めてきた。

１年次は、導入時にフラッシュ型教材学習やミニテストを実施したり、前時の振り返りノートを活用したりして、本時に必要な既習事項を確認しながら、学習課題の共有化や基礎学力の向上を図った。また、振り返り活動の場を設定し、取り組みを続けたことで自己の向上を自覚できる児童も見られるようになった。

一方で、４５分で終える授業展開が課題として挙げられたため、２年次は発問や学習活動の精選を図り、より効果的な導入場面と振り返り活動の方法を探った。問題提示に工夫を凝らして課題を把握させていく方法、発問や教材を工夫して前時との違いを捉えさせる方法、本時に必要な既習事項を素早く確認できる学習環境の工夫は、本時において課題がより焦点化され、児童が既習を生かしながら主体的に課題解決に向かうための手立てとなることが明らかになった。また、振り返りをする場面で書き出しや書き方のパターンを示す方法は、より多くの児童が自己の向上を捉えて振り返り、次時に生かしたいことを手早くまとめることができる手立てとして有効であることも明らかになった。しかし、書くことがパターン化する児童が見られるようになり、３年次はより実感を伴って振り返りができる方法を探った。児童同士の関わりや問題提示・教師の発問等に工夫を凝らした授業研究を進めたが、新型コロナウィルス感染症拡大に伴い児童同士の関わり合いに困難が生じ、校内研究の在り方や、意見を交わして協議を行い成果と課題を共有しながら日々の実践に生かすことが難しかった。そこで、３年次計画だったが今年度も昨年度までの研究を継続することとした。

２　研究のねらい

既習を生かした向上（ステップアップ）をめざす授業づくりを手立てに、学びを生かす子どもの育成について、実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

課題設定を工夫し、自己の向上や変容を実感できる授業展開をすることによって、学びを生かそうとする子どもを育てることができる。

４　研究内容

⑴ 既習を生かしながら主体的に解決に向かうための導入から課題設定までの教師のはたらきかけ

⑵ 視点を明確にした振り返り活動

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく研究授業等

月	日	学年・授業提案者（報告者）・題材名
７	７	第１回授授業研究（２学年）　算数　「図をつかって考えよう（１）」 授業者　和泉　範子
９	６	第２回授業研究（５学年）　算数　「三角形の面積」 授業者　大坂　幸、吉田　吉人
１１	２４	小・中ジョイントスクール推進事業公開授業
１	７	授業研究実践報告 報告者　吉田　吉人、堀切　まり子、三橋　亜未、佐藤　真美、磯谷　琢磨、 長瀬　さおり、髙谷　園江、酒寄　あゆみ、奥山　睦子、

⑵　一般研修

月	日	内容・講師
５	２６	一人一台タブレット端末の活用について　講師　本校教諭　乙山　竜太郎
６	２	エピペンの使い方　講師　本校教諭　梅内　洋子
６	１１	問題解決的な学習を取り入れた授業づくり 講師　八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　福田　秀貴氏
７	１６	救命救急講習　講師　八戸市東消防署員

６　研究の成果

⑴　授業の導入で既習との関連を想起できるようにはたらきかけ、ズレを生じさせる発問や教材提示に工夫をしたことで、児童は見通しをもち、既習との関連を意識しながら、課題解決に主体的に向かうことができた。

⑵　既習とのつながりを意識させる授業展開を続けてきたことで、既習を生かして課題解決しようとする児童が増えた。

⑶　学習の終末には振り返りをする習慣が身に付き、視点やキーワードを与えて振り返りをさせると、学習でわかったことやできたこと、友達との関わりから気づいたこと、生活や学習で生かしたいことなどを構成して書くことのできる児童が増えた。

７　研究の課題

⑴　見通しをもたせるはたらきかけが教師主導で時間がかかる時がある。児童の見方や考え方を生かしながら学びを深めていく働きかけについて今後も研究が必要である。

⑵　校内において学習の終末の振り返りでは「①課題との関わり②仲間との関わり③自分との関わり」を視点に取り組んできた。３つの視点で書くことのできる児童は学年が上がるほど多くなるが、困難を示す児童もいる。話型や書き方を示しながら指導したり、他児童の振り返りを紹介したり、視点に軽重をつけて行ったりするなどして、主体的に振り返ることのできる子の育成に今後も努めたい。

（記入者　髙谷　園江）

鮫小

かかわり合いながら、学びを深める子どもの育成

（３年計画の２年次）

校　長　　横　濵　誠　一

１　研究主題について

本校は、「明るく思いやりのある子」「めあてをもって学ぶ子」「健康でたくましい子」を教育目標に掲げ、徳・知・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成のため、「心の教育」を基盤とし、個を生かしながら「生きる力」の育成を推進してきた。

過去２年間、道徳の授業実践を通して「やり抜く力と思いやりの心をもつ児童」の育成に努めてきた。その成果として、以下の２点を挙げることができる。

①問題を焦点化したり終末部分で学習した価値について児童に自分事として考えさせたりするための発問や、考えを深めたり共有したりするための問い返しの仕方を工夫することで、児童が主体的に考え、学習の深まりをより実感させることができた。

②授業者が意図する学習展開に応じて構造的な板書の仕方を工夫することで、児童が価値の関係性について視覚的に捉えることができるようになった。また、その板書を手掛かりに自分の考えを振り返り、表現する力も高まってきている。

一方、道徳の授業において積極的に自分の考えを発表することができずに、聞き手に回ることが多い児童が一定数見られたり、児童同士の交流でもあまり思考の深まりが認められなかったりする場面も見られた。

そこで、新学習指導要領が本格実施となり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められる今年度は、これらの成果と課題を踏まえ、他教科・領域でも、問題を焦点化したり共有したりする発問や板書構成、対話のさせ方などを工夫し、「かかわり合いながら、学びを深める子どもの育成」を目指したいと考えた。

２　研究のねらい

児童が共通の問題意識をもち、教師や児童または自己との対話を通して、学びを深める授業づくりの工夫について、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

国語科の授業において、問題を焦点化し共有するための発問や、他者または自己との対話のさせ方について工夫することで、ともにかかわり合い、学びを深める児童を育成できると考える。

４　研究内容

(1) 授業構成の工夫

　ア 問題を焦点化し、共有する発問の工夫

(2) 思考を伴う言語活動の充実

　ア 考えを表現する場や話し合う場の位置づけ

　イ 振り返りの内容

５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者等
１０	１４	第１回　授業研究（下学年ブロック） 「食べ物のひみつを教えます」 ３年１組　授業者　教諭　近藤　唯華
１２	２	第２回　授業研究（上学年ブロック） 「『鳥獣戯画』を読む　日本文化を発信しよう」 ６年２組　授業者　教諭　近藤　純子

(2) 一般研修

月	日	内　容　等
５	１２	特別支援研修会 「指導上配慮を必要とする児童に関する共通理解」 講師：本校生徒指導部
６	９	アセス研修会 「アセスを活用した児童の支援について」 講師：本校生徒指導部
６	３０	一人１台端末活用研修会 「クロムブック各教科での活用法について」 講師：本校視聴覚部・６学年担任
７	１６	保健安全研修会 「食物アレルギー・ＡＥＤについて」 講師：東消防署鮫分署　沢田　信悟　氏 関川　真裕　氏 立崎　海平　氏

６　研究の成果

(1) 説明的な文章の教材を中心に、導入部分での発問や教材文の提示の仕方を工夫することにより、思考を揺さぶり課題解決に取り組もうとする意欲につながった。

(2) 「相手意識」を持たせたり「キーワード」を確認させたことにより、伝え合う場面で内容が焦点化され、言語活動の充実につながった。

(3) 導入の段階で、本時の「まとめの形を示したこと」や「これまでの学習を振り返らせたこと」により、児童に見通しをもって学習活動に取り組ませることができた。

７　研究の課題

(1) 互いの考えを伝え合い、かかわり合いながら学びを深める児童の育成を目指し、児童の思考に沿った授業構成に取り組むなど、さらに実践を重ねていく必要がある。

(2) 文章をまとめさせる活動では、具体的な手本を示す等の手立てを講じながら、６年間を見通した段階的な指導に取り組むことが必要である。

（記入者　戸舘　典子）

種差小

自分の考えをもち、分かりやすく伝え合う子供の育成

～少人数学習において、主体的・協働的な学びを生み出す授業づくり～

（３年計画の２年次）

校長　　寺　口　朋　男

１　研究主題について

教育目標「自ら学ぶたくましい子」の具現化のためには、身に付けた知識・技能を活用し、自ら考え表現し合いながら主体的に学ぶことのできる資質や能力の育成が重要であると考える。これを受け、昨年度は根拠に基づいた思考や話合いを生み出すための指導の工夫について研究した。その成果として、問題提示を工夫し考える意欲を高めた上で解決の見通しをもたせることにより、根拠を明確にして考える子供の育成につながった。しかし課題としては、自分の考えを伝えたいという相手意識や分かりやすく説明するスキル、または分かろうとしながら聞く態度が不十分であることが挙げられた。さらに、少人数学習や間接指導場面での子供同士の対話的な学びをいかにして生み出すかという、小規模校ならではの課題が改めて浮き彫りになった。狭い人間関係の中で、間違いを恐れ生き生きと学ぶことが難しい傾向が強いことも、本校児童の大きな課題である。そこで今年度は、少人数学習のよさを生かして、主体的・協働的な学びを生み出すための手立てについて、授業実践を通して明らかにしていきたい。

２　研究のねらい

少人数学習において、主体的に考え、伝え合うことによって学びを深め合える子供を育てるために、効果的な指導法を算数科の実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

少人数学習において、自分の考えをもった上で比べ合い、相違点を学びに生かそうとする視点をもちながらよりよい考え方をみんなで見つけようとする学習過程や指導・支援の在り方を工夫することにより、主体的に考え、協働的に学びを深め合う力を高めることができると考える。

４　研究内容

(1) 少人数学習のよさを生かし、「みんなで解決しよう」という思いに基づく授業づくり
　ア　問題解決の意欲と見通しをもたせるための手立て
　イ　考えの違いを学びに生かす学習過程の工夫
(2) 複式指導における効果的な授業展開
　ア　直接・間接指導場面の効果的な組み立て
　イ　間接指導場面における学習の有効な進め方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者
６	３０	第１回授業研究　１年「かずしらべ」 ２年「１００をこえる数」　授業者　小林美奈子
７	９	教育指導課・総合教育センター訪問
９	１	第２回授業研究　３年「あまりのあるわり算」 ４年「２けたでわるわり算の筆算」　授業者　片山きよみ
１１	８	南浜中学校区小・中ジョイントスクール
１１	２５	第３回授業研究　４年「表を使って考えよう」 ５年「割合を使って」　授業者　阿保　祐一

(2) 一般研修

月	日	内　容　・　講　師　等
４	１	非違行為根絶のための研修　講師　教頭　髙橋将樹
４	２８	種差の学習素材探索　講師　種差観光協会　会長　柳沢卓美氏
６	４	三八管内複式学級担当者研修会（南部町立杉沢小学校）
６	９	救急法に関する研修　講師　八戸東消防署　鮫分署　職員
７	７	クロームブックに関する研修　講師　小中野小学校　教諭　佐々木亮輔先生
８	２０	プログラミング教育に関する研修 講師　是川小学校　教諭　佐々木俊介先生
８	２５	県学力調査採点及びNRT分析結果についての考察と対策

６　研究の成果

(1) ずれを感じ取らせる課題設定や選択肢の工夫、一部を隠した問題提示、意図的な誤答提示などの手立てにより、問いが生まれ、主体的に解決しようとする姿に結び付いた。考えの違いを生かしてみんなで学ぶことを意識した授業づくりを行うことにより、みんなで解決しようという気持ちが高まり、分かりやすく説明しようとする態度が育ってきた。

(2) 本校における基本的な複式授業の展開を共通理解した上で、児童の実態や指導内容に合わせて工夫した授業づくりを重ねた結果、複式指導のスキルアップにつながった。

７　研究の課題

(1) ガイドの育成や学習指示の方法など、間接指導場面において主体的・協働的な学びを生み出すための指導の在り方について研究する必要がある。

(2) 間接指導場面で、児童が何をどこまで学びつまずいているかを把握することが、児童の思考過程を大切にした学びの継続につながると考える。今後は、間接指導場面の学習状況を適切に把握する方法について、研究を深める必要がある。

（記入者　小林美奈子）

大久喜小

主体的に問題解決に取り組む子どもの育成
～子どもが本気になる算数科の授業づくりを通して～

（３年計画の３年次）

校　長　　長　倉　一　志

１　研究主題について

⑴ 教育目標の具現化のために

本校では、教育目標に「夢に向かいたくましく生きる大久喜の子」、努力目標に「進んで勉強する子」を掲げ、夢や希望をもち、進んで学習する児童の育成を目指している。

その具現化に向けて、自力解決につながる学習活動を工夫し、自分の考えをもち（「自分で」）その考えを持ち寄って学びを深める（「みんなで」）という学習の仕方を身に付けさせることが、教育目標の具現化につながると考え、研究主題を「主体的に問題解決に取り組む子どもの育成」と設定し、研究を進めてきた。

⑵ これまでの研究経過から

昨年度は、算数科の授業を中心にして、問題把握のさせ方や課題を解決していくための手立てを具体的に工夫することによって、自分でできる部分を増やし「主体的に問題を解決する」、つまり「自分一人の力で解き進めること＝本気で取り組む」ことができるのではないかと考えた。何もできないではなく「ここまではできる」、この数字とこの数字を使えば「解けるかもしれない」、終わったからいいやではなく「確かめてみよう」というような、主体的に取り組む児童の姿を目指し、算数科を中心に実践を積み重ねてきた。

成果として、次の点が挙げられた。

ア　スタートスイッチ（学習の手引き）を使うことによって、問題において問われている部分や問題を解決したり演算決定したりするために必要な数や言葉を整理することができ、自力解決において有効な手立てとなった。

イ　前時までの学習内容の意図的な掲示や、導入時で既習の問題に取り組ませることは、児童にとって問題解決へのヒントや解き方のモデルとなり、見通しをもって自力解決に向かうことができた。

ウ　キーワードや順序を表す言葉を使うようにさせたり、図や実物と式を関連させて説明させたりすることで、自分の考えを整理して伝えることができるようになってきた。

一方で、次のような課題も明らかになってきた。

ア　児童が自分（たち）で課題を発見する部分がやや受動的であるため、主体的に課題解決する力を伸ばすことが必要。

イ　お互いの考えを伝え合う活動や場面を工夫することで、学び合う力を高める必要がある。

そこで、本気で問題解決に取り組み、お互いの考えを伝え学び合う姿を目指す児童像として掲げ、気付きを生かして自分（たち）で課題をつくり、既習事項を活用して自力解決していく経験を積み重ねることによって本主題に迫ることができるのではないかと考えた。

２　研究のねらい

主体的に問題解決に取り組む力を育てるための効果的な学習指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説（主体的→自分一人の力で解き進めること＝本気で取り組むこと）

算数科の学習指導において

⑴授業の導入から課題設定までにおいて、児童が自分（たち）で課題を発見し、見通しをもてるように工夫することで、自力解決に意欲的に取り組み自分の考えをもつことができる。

⑵自分の考えをもち、伝え合う活動を工夫することで、学び合う力を高めることができる。

４　研究内容

⑴ 問題の出会わせ方と自己決定の場面の工夫

・子どもの問題意識を刺激する課題設定の工夫

・自己決定の場面（見通しをもつ、見当をつける、アイテムの選択）

⑵ 教師の発問の工夫

５　研究の経過

⑴ 研究授業

月	日	学年・単元名・授業者	成　果
6	16	３・４年 ３年　何十、何百を１０でわる計算 ４年　垂直・平行と四角形 授業者：大沢　泰尚　教諭	＜３年生＞ ○ホワイトボードを活用することで、意欲的に自分の考えを書き、友だちの考えと比較・検討しやすくなっていたが、「一番分かりやすいのはどれか」視点を与えてから間接に入らせると更によかった。 ⇒より良いものを選ぶ視点を与えることで、教師が戻ってきたときに発表させやすくすることができる。 ＜４年生＞ ○平行という視点をもって仲間分けできていたが、点つなぎでもっとたくさんの四角形を作らせ、仲間分けをもっと自由にやらせると更によかった。
10	28	１年　ひきざん（２） 授業者：副島　慶子　講師	○キーワードがあることで、イメージしやすく意欲的に問題作りに取り組んだ。「みんなで」「あわせて」「ふえる」「かう」等、様々なたし算言葉が混在していたことが効果的な負荷となった。 ○図や動作をヒントにしたことで、「合併」と「増加」の違いに気付くことができた。 ⇒ふりかえりをして前時との相違点を明らかにし、「合併」と「増加」の違いに気付かせる。
11	17	５・６年 ５年　速さ ６年　比例と反比例 授業者：千葉　美樹子　教諭	＜５年生＞ ○導入で速さを求めるために、２量の関係（道のりと時間）を、しっかり確かめられたことが、解決への見通しへとつながった。 ⇒児童の考えの変容が分かる板書やノートの書かせ方を工夫する。 ＜６年生＞ ○反比例のグラフの点と点の間の変化を全体で話し合いながら解決へと向かうことができた。
12	15	２年　はこの形 授業者：佐々木　永子　教諭	○見本と同じ形の箱をつくるために、数個の長方形の中から選ばせることで、どのような形の長方形がいくつずつ必要になるかを考えさせることができた。 ⇒ １ つ足りない形をつくるなどして、実態に合った負荷をかけると、「伝え合い」が自然発生的に生まれる。

⑵ 一般研修

月	日	内容・講師
6	9	授業における教育機器の活用について 講師　大久喜小学校　大沢　泰尚　教諭
8	25	１人１台端末の活用について　（オンライン） 講師　総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一　先生

６　研究の成果

⑴ 課題との出会わせ方、導入の工夫、発問の仕方や問い返し等、子どもたちが本気になる支援の仕方が少しずつ分かってきた。

⑵ 「比べる」「選ぶ」「順番をつける」等、子どもたちが本気になるような展開の仕方を工夫することができた。

⑶ 考えを交流する場を授業の中に位置づけて、日常的に取り組むことができた。

７　研究の課題

⑴ 児童が解きたい、話したいと思うような課題の設定や授業構成を工夫することで、あえて「場」を設定しなくても伝えたくなるような本気度を高めていく必要がある。

⑵ 考えに根拠をもたせ、いろいろな意見を柔軟に取り入れていく力を育てていく必要がある。

（記入者　佐々木　永子）

金浜小

主体的にかかわり、ともに学び合う子の育成

～少人数・複式学級における、算数科の授業実践を通して～

（３年計画の２年次）

校長　野田頭　典枝

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標は「夢に向かって挑戦する元気な子」である。努力目標である「かんしゃする子」「ねばりづよい子」「はきはきはなす子」「まなびつづける子」の育成に向けて教育活動を展開している。

「はきはきはなす子」「まなびつづける子」の具現のためには、自信をもって主体的にかかわることや思いや考えをつなげて話合うこと、自分の学びを振り返ることを通して、学び合いの充実を図ることが必要であると考えた。

(2) これまでの研究経過から

昨年度は、算数科において、解決の見通しをもち問題に取り組み、考えをつなげて話合い学び合うための指導のあり方について授業実践を通し研究を行った。その結果、成果として以下のようなことがあげられた。

ア　授業の導入に本時の内容に関わる既習事項の復習を行ったり、学習内容を掲示物として残したりしたことにより、児童は、問題解決への見通しをもつことができ意欲的に課題解決に向かえるようになった。

イ　問題解決に関わる教材や教具を準備することにより、児童は、それらを用いて問題解決の見通しをもったり、話合ったりして間接指導を効果的に進めることができた。

ウ　ワークシートや発表ボードを活用し話合いを行うことは、相手の考えを理解することに効果的だった。

これらの成果の一方で、より主体的にかかわり、学び合う児童を育成するために、以下のことが課題としてあげられた。

ア　児童に育成する力

①自分の考えと相手の考えを比較し、類似点や相違点に気づき考えをつなげて話合う力。

②説明するためのツール（半具体物・図等）を使いながら、わかりやすく伝える力。

③わかりやすく伝える技能の基盤となる、語彙力や文章力。

イ　教師の研究課題

①効果的な話合い活動が行われるような指導過程の工夫（話合い場面の位置づけ）。

②各教科及び教育活動全般で、考えをつなげて話し合えるような場の設定。

③間接指導を児童だけで効果的に進められるような、ICT 機器の活用。

④学年に応じためざす児童像の明確化と、児童の実態の把握（話合いのレベル）、それに応じた話合いの仕方の指導。

そこで今年度は、昨年の研究の成果を取り入れつつ、「自信と見通しをもち問題に取り組み、話合いを通し、考えを広げ深められる子」という姿をめざす児童像として掲げ、見通しのもたせ方の工夫、話合い・振り返りの場の設定を意識した授業実践を行うことにより、本主題の実現にせまることができるのではないかと考えた。

２　研究のねらい

解決の見通しをもち問題に取り組ませ、話合いや振り返りを学習過程に位置づけた指導を工夫することで、自信をもって学び合う児童を育成できることを、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

少人数・複式学級の算数科学習指導において、見通しのもたせ方の工夫、話合い・振り返りの場の設定を意識した授業実践を行うことにより、学ぶことのよさを実感し、自信をもって学び合う児童を育成することができる。

４　研究内容

(1) 間接指導を支える見通しのもたせ方の工夫

(2) 考えをつなげて話合い、自分の考えを広げたり深めたりさせる場の工夫

(3) 自分の学びを実感し、学習のよさに気づかせる振り返りの場の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材・授業者など
６	９	第１回授業研究（５・６年） ５年　「整数÷小数（小数のわり算）」 ６年　「分数でわる計算」 授業者　教諭　佐藤　かおる
９	２２	第２回授業研究（３・４年　要請訪問） ３年　「あまりの大きさ」 ４年　「割合」 授業者　教諭　田名部　純一 助言者　八戸市総合教育センター副所長 松橋　祐哉　氏
１０	２７	第３回授業研究（５・６年　小教研複式研） ５年　「面積のくふう」 ６年　「面積の公式を使って」 授業者　教諭　佐藤　かおる 助言者　八戸市総合教育センター副所長 松橋　祐哉　氏
１１	２４	第４回授業研究（２年） ２年　「図やしきをつかって」 授業者　講師　北村　美沙紀

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
７	８	食育指導研修　（東地区給食センター　栄養教諭　中村　孝江　氏）
７	１４	道徳科指導研修　（教育指導課　主任指導主事　大野　勉　氏）
１０	１３	１人１台端末の活用研修　（総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一　氏）

６　研究の成果

(1) 本時の内容に関わる既習事項の掲示、前時の学習内容の想起、教具や図の提示等を行うことは、問題解決の見通しをもつことができ、児童同士で間接指導を進めていくことに有効だった。
(2) 指導過程内に意図的・計画的に話合いの場を設定し、ペアやグループ、全体との関わり方を工夫し話合いをさせてきたことにより、自分の考えに自信をもったり友だちとの違いに気づいたりすることができるようになってきた。
(3) 振り返りの工夫や継続により、内容に質の高まりが生まれ、自分の学びや伸びを実感し、次時への意欲をもてるようになってきた。

７　研究の課題

(1) 主体的に問題解決に向かうための、授業の導入から課題設定までの教師のはたらきかけ。
(2) 考えを深めさせるための、児童同士の話合いや教師と児童での話合いの工夫。
(3) 学習効果を高めるためのICT機器の活用。

（記入者　佐藤　かおる）

根城小

主体的に学び合う子の育成

～各教科における対話的学びの実現を目指して～

（３年計画の２年次）

校長　中　村　雅　臣

１　研究主題について

昨年度、本校では、「主体的に学び合う子の育成」という研究主題のもと、児童の考えを深める対話的学びの在り方に焦点を当てて研究を進めた。全学級が研究主題に沿った授業を様々な教科で実践し、検証してきた。研究の成果として、次の点があげられる。

・考えたくなる課題設定場面では、前時の復習をしたり、考えやすいテーマから想像させたりして本時の課題と関連付けるなど、「課題をつかむ」「意欲を高める」「自分で、見通しをもたせる」ための手立てを工夫したことで、児童が意欲的に課題に取り組むことができた。

・伝え合う場面では、「ルール（進行、言葉）」「話し合わせ方」「発表のさせ方」のほか、コロナ禍における対話の充実を考え、「ハンドサイン・うなずき」「書いて伝える」「一人が発表し教師が全体につなげる伝え合う活動」などの手立てを工夫した。制限がある中での対話であったが、様々な対話を取り入れた実践を行うことで主体的に学び合う子の育成が図られた。

・全教員が様々な教科で校内研の視点に沿った授業を公開し、研究内容を意識して日々の授業実践に努めるようにした。参観する人数を限定して授業を公開したことや、定期的に授業実践報告会を行い、成果や課題を明らかにしたことは、教師間の学び合いや授業実践への意欲向上につながった。

また、昨年度のＣＲＴの結果（観点別得点率全国比）を見ると、ほとんどの学年において、４教科の全観点が全国平均を上回っていた。さらに、全ての教科において「思考力・判断力・表現力」に関する観点別の得点率が、合計得点率を上回っていた。上記の点から、日常の授業において、学習課題を理解させ、対話的学びの工夫をした授業を展開することで、児童の「思考・判断し、表現する力」を伸ばすことができたと思われる。

一方、課題として、次の点があげられる。

・コロナ禍にあった昨年度は、子ども同士が考えを伝え合う対話的な授業が思うように実践できなかったため、対話的な活動を取り入れて考えを深めたり、認め合ったりする授業の展開や仮説の検証について十分に研究されたとは言えない状況であった。すべての児童が主体的に学び合える授業の実現のために、対話的な学びや認め合う場づくりの研究と検証の手立てを工夫していくことが課題と考える。

そこで、今年度は、「児童が主体的に学び合うためには、どのような対話的な活動と認め合う場の工夫が必要か」を全教科での授業づくりの実践により研究していくことにした。課題設定や発問の工夫を引き続き行い、自分たちの考えを伝え合う交流活動を重点項目とする。さらに、まとめや振り返りを書いて表現する活動･認め合う場の設定も取り入れながら、より充実した対話的学びについて協議していく。そのような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

２　研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。（課題と向き合う、伝え合う、認める・認め合う）

３　研究仮説

対話的な学び（課題と向き合う、意思表示・伝え合う、認める・認め合う）の工夫をすることにより、児童が主体的に学び合うことができる。

４　研究内容

対話的な学びの工夫

ア　考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫（課題と向き合う）

イ　目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定（意思表示・伝え合う）

ウ　伝え合う活動やまとめにおいて、お互いを認め合う場づくりの工夫（認める・認め合う）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	曜	授業研究	全体会等
４	１４	水	今年度の研究の方向性について	全体会（共通理解）
７	１４	水	授業実践報告①・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
９	８	水	校内授業研究（１年）	全体会（授業研究）
９	２９	水	校内授業研究（５年）	全体会（授業研究）
１０	２０	水	授業実践報告②・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
１１	１９	金	授業研究（指導課・センター訪問）（４年）	全体会（授業研究）
１２	８	水	授業実践報告③・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
１	１２	水	校内研修アンケートの結果と研究のまとめ	全体会（成果と課題）
１	２６	水	来年度の研究の方向性について	全体会（成果と課題）

＊授業研究学年以外の先生方は、校内研究の視点にそった公開授業を全員行う。

(2) 一般研修等

月	日	曜	一般研修	備考
５	２６	水	児童理解　配慮を要する児童	
６	２３	水	ＩＣＴ活用研修	
８	１９	木	アセス活用研修	外部講師
８	２５	水	県学習状況調査分析・考察	
２	１６	水	ＣＲＴ分析・考察	

６　研究の成果

(1)　課題設定場面では、既習事項を想起させて課題と関連付けたり、課題解決のためのイメージをもたせる資料提示を工夫したりする手立てを取り入れた。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組む姿が見られた。

(2)　伝え合う場面では、「身振り手振りを取り入れて表現させる」「分かりやすく書いて伝える」「教師が全体の合意形成をサポートする」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、友達と関わり合いながら学ぶよろこびを感じさせることができ、学びに向かう主体性が高められた。

(3)　認め合いの場面として、小グループでの伝え合いの後に相手の話した内容に対する励ましや評価をしたり、学習内容のまとめや感想のふりかえりの他に、「友達のいいところ」を視点として与え書く活動を取り入れたりした。これらの活動により、互いに認め合う姿が見られ、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

７　研究の課題

(1)　課題提示の工夫により、児童は意欲的に課題に取り組もうとするが、自力解決では活動や思考が進まないという場面も見られた。課題を自分のものとしてとらえさせ、より具体的な見通しをもたせるなどの教師側の働きかけを工夫していく必要がある。

(2)　伝え合う場面では、話合いの目的が曖昧になってしまった実践も見られた。自己の考えを広げ深めるための対話的な学びの実現のために、伝え合う活動の目的を明確にし、児童にも目的意識をもたせた授業展開を考えていく必要がある。

(3)　認め合う場面では、友達の頑張りを認めるだけでなく、交流した内容のよさや共感できたことにも着目させることが次の学びへの意欲につながると考える。認める内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような認め合いの場を設定して、学び合いのよさを実感させていきたい。

（記入者　相馬　昌文）

白山台小

主体的に表現する児童の育成

～問題解決的な学習を通して（音楽科）～

（３年計画の１年次）
校長　　種市　八重子

１　研究主題について

本校では、教育目標に「めあてに向かってともに学び合う子」を掲げ、校歌に謳われた「学ぶたのしさを分かちあう学校」「心とからだを鍛えあう学校」の実現を目指している。この具現化のために、教育は人づくりという視点に立ち、児童一人一人の学びの場である授業において、すべての子どもに主体的に学ぶ態度を身に付けさせ、確かな学力を保証する必要がある。そこで、すべての子どもが楽しく「わかる・できる」ように、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりをもとに、表現力を高めるための指導の研究を進めてきた。「指導内容の明確化を図る。(本時のめあてとGOALをはっきりさせる。）」「授業展開の工夫に重点を置いた授業の効果の検証をする。」を意識して授業を進めてきた結果、既有の知識・技能をもとに多様な方法で表現してみようとする児童が少しずつ増え、指導者が教材の工夫やしかけ、児童の振り返りを活用して課題解決に向かわせることで、児童の考えを深めることにつながった。しかし、自信がもてずに、積極的に表現することができない児童がまだ多く見られ、学習課題の設定や課題解決のための手立て、有効な発問についての課題も残された。また、今年度は、本校を会場に音楽科の全国大会が開催されることから、全校児童に音楽を学ぶ楽しさを実感させ、子どもの思いや願いを表現することを通して、確かな音楽の学びにつなげていく必要がある。

そこで、児童が主体的に学びに向かい、生き生きと表現することができるような学習の授業づくりに取り組むこととした。その際、学習過程全体を見通し、「何を学ばせるのか」を意識した課題設定や常時活動を行い、意欲的に問題解決的な学習に取り組めるようにする。また、「音楽を形づくっている要素」を生かして、子どもの思いや願いを表現させていきたい。更に、子どもたち一人一人の変容を見取るために、発問の吟味やワークシートの工夫をしていきたい。このように、学習過程全体を見通した問題解決的な学習を進めることで、児童の学びが深まり、表現力を高めることができると考える。

今年度の学校目標は、「アップデート！表現力！自分の思いや考えを主体的に表現することができる学力と態度の育成」である。子どもたちが、学ぶ意義やよさを実感しながら、友達と共に学習に取り組むことで、自分の思いや願いを主体的に表現することができ、本校の研究主題である「主体的に表現する児童の育成」に迫ることができるであろう。

２　研究のねらい

児童が主体的に表現する力を高めるために、どのような指導が有効か、授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

学習過程全体を見通した問題解決的な学習を進める中で、児童が感じ取ったことや学んだことを生かして表現させることで、一人一人が学びを深め、主体的な表現力を高めることができると考える。

４　研究内容

(1) 基礎基本の確実な習得
　ア　「音楽を形づくっている要素」を意識した授業づくり
　イ　本時のねらいにあった常時活動の設定
(2) 問題解決的な学習の充実
　ア　学習過程の工夫（課題設定の工夫）
　イ　発問の吟味、ワークシートの工夫

５　年間計画

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
６	２９	第１回授業研究（要請訪問） ２年１組　授業者　講師　越後　順子　　音楽科「ゆかいな時計」 指導助言　高倉　弘光　教諭（筑波大付属小）・石井一二三　主任指導主事
７	６	第２回授業研究 ６年１組　授業者　教諭　関下　健司　　音楽科「動機をもとに音楽をつくろう」 指導助言　石井一二三　主任指導主事
７	１９	第３回授業研究 ３年３組　授業者　教諭　俵山　光子　　音楽科「明日を信じて」 指導助言　小林　真人　氏（作曲家）・石井一二三　主任指導主事
１０	１９	第４回授業研究（ブロック研究） ６年３組　授業者　教諭　関下　健司　　音楽科「動機をもとに音楽をつくろう」
１１	１	第５回授業研究（全日音研八戸・三戸大会紙上開催のための録画） ６年２組　授業者　教諭　関下　健司　　音楽科「動機をもとに音楽をつくろう」 指導助言　石井一二三　主任指導主事
１１	４	第６回授業研究（全日音研八戸・三戸大会紙上開催のための録画） ３年１組　授業者　教諭　俵山　光子　　音楽科「明日を信じて」 指導助言　小林　真人　氏（作曲家）・石井一二三　主任指導主事
１１	５	第７回授業研究（全日音研八戸・三戸大会紙上開催のための録画） ２年２組　授業者　講師　越後　順子　　音楽科「ゆかいな時計」 指導助言　高倉　弘光　教諭（筑波大付属小）・石井一二三　主任指導主事

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要
４	１９	「問題解決的な音楽の授業づくりについて」 講師：八戸市総合教育センター　　石井　一二三　主任指導主事

６　研究の成果

(1) 音楽を形づくっている要素を「音楽のたねカード」として常に音楽室に掲示し、本時に関係するカードを児童に提示しながら授業を進めることで、児童がそれらの要素を意識しながら学習を進めたり、ふり返りをしたりすることができた。

(2) 導入時に、本時のねらいに関わる常時活動を設定することで、児童の学習意欲を高め、学びを深めることにつながった。

(3) 「本時の見通しをもつ（常時活動）」→「焦点化・視覚化・共有化する場面（教材との出会い）」→「関連付ける場面（教材との関わり）」→「よさ・面白さ・美しさを味わう場面（教材を味わう）」という学習過程や児童が考えを深めるための発問や児童の思考が見えるワークシートの工夫をしたことで、 問題解決的な学習を充実させ、児童一人ひとりの表現力を高めることにつながった。

７　研究の課題

(1) 児童自ら、音楽を形づくっている要素を使って学習を進めたり、ふり返りをしたりすることができるようなワークシートの工夫。

(2) 児童が主体的に問題を解決しようとする課題のもたせ方の工夫。

（記入者　橋本　泰子）

西白山台小

運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもの育成

～見通しと振り返りを生かした指導の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　原　　寿

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

今年度は開校から４年間の蓄積を生かし、“With コロナから Post コロナの学校”を見据えて「一つの節目を作る年」になる。そのために、青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域の実態を考慮して、目指す児童像に「夢や志の実現に向かって学び続ける人間性豊かな子ども」を掲げ、教育目標「心豊かに　たくましく　ともに学び合う子」の達成のため、継続して取り組んでいくことにした。

教育活動を展開していくにあたり、「体育・保健の見方・考え方を働かせて、課題を発見し、その解決に向けた主体的・協働的な学習をすること」や「生涯にわたって心身の健康を保持促進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」を基本方針とする体育科の授業を中核に据えて研究を進め、日常の授業実践に反映させることにより、教育目標に迫ることができると考えた。

体育科を中核に据えて取り組んだ４年間の研究で、「組み合わせ単元」の有効性が検証でき、教員の授業のマネジメント力も向上した。今年度は、４年間の研究成果の上に「見通しと振り返りを生かした指導の工夫」をサブテーマに掲げ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践研究を推進していくこととした。

(2) 児童の実態から

昨年度は「自らを高める子どもの育成」を研究テーマに掲げ、体育科における「対話的な学び」に焦点をあて、低・中・高学年ブロックで授業研究に取り組んだ。その成果として、「児童が意欲的に自己の課題を解決しようするための教員や友だちとの対話【指導方法】」「ねらいを達成するための振り返りでの対話【評価】」を教員同士で共有化することができ、授業のマネジメント力を高めることができた。しかし、コロナ禍の中で、技能を高めるための子ども同士の交流（教え合い）や教員が補助をする活動を十分に行うことができなかった。今後も「かかわり」を減らさざるをえない状況の中で、自己の課題解決のための効果的な場づくりやICT活用を進めていく必要がある。

そこで、今年度は、児童の運動に対する主体性を高め、全教員が体育科における授業のマネジメント力をさらに高めるために、「見通しと振り返り」に焦点をあてながら指導を工夫していく。児童が学習の見通しをもって粘り強く取り組んだり、自己の学習活動を振り返って次につなげたりすることで、児童一人一人が「できた」という達成感、「自分でもできる」という自己肯定感をもたせることができ、「自らを高める子どもの育成」につながると考える。

２　研究のねらい

運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める子どもを育てるために、見通しと振り返りを生かした指導の工夫について、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

運動や健康についての課題の解決のために、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりすることによって、すべての児童が運動の楽しさや喜びを味わい、自らを高める授業を目指すことができる。

４　研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の３点を示す。

(1) 体育科の授業での見通しと振り返りを生かした学習指導の検証。
(2) タブレット端末を効果的に活用した体育の授業についての検証。
(3) 研究協議会及び研究報告会で、児童の変容を検証。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者
6	9	第１回中学年ブロック授業研究（３学年「タグ取り鬼」「タグラグビー」） 授業者　講師　太田　俊
	24	第１回中学年ブロック研究報告会　３学年報告者　講師　太田　俊 ４学年報告者　教諭　吉田　悟
9	1	第２回低学年ブロック授業研究　（１学年「ねこちゃん体操」「マットを使った運動遊び」） 授業者　教諭　佐藤　光子
11	10	第２回低学年ブロック研究報告会　１学年報告者　教諭　佐藤　光子 ２学年報告者　講師　工藤　律子
12	3	第３回高学年ブロック授業研究（６学年「フラッグフットボール」） 【要請訪問】　授業者　教諭　大里　薫 〈助言者〉　八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　竹井　亮
1	11	第３回高学年ブロック研究報告会　５学年報告者　教諭　外舘　季和 ６学年報告者　教諭　大里　薫

(2) 一般研修

月	日	一般研修
8	20	普通救命救急法講習会（AED の扱い方と救命救急法について・エピペンの使い方） 講師　八戸消防署根城分遣所職員　養護教諭　工藤　亜紀子
9	8	１人１台端末ｅライブラリー講習会　講師　教諭　吉田　悟　講師　太田　俊
9	29	１人１台端末講習会　講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三
10	20	特別支援教育に関わる研修会 授業者　教諭　夏坂 美保子　教諭　山下 由美子　教諭　櫻井 まき子

６　研究の成果

(1) 授業の最初に「見通し」をもたせることで、運動が苦手な児童も意欲的に取り組めるようになった。また、授業の展開・終末と適切に振り返りをすることで、児童同士の関わりが生まれ、ルールや運動の動きを理解することができた。
(2) １人１台端末を使って、ボール運動の様子を撮影することで、運動の課題についてチームで話し合うきっかけになった。また、児童同士で運動の様子を撮影し、みんなに紹介することを通して、学習意欲や自己有用感の向上につながった。
(3) 研究報告会では、ブロック毎に同じ題材で研究に取り組んだ。「タグラグビー」や「フラッグフットボール」など、ボール運動の場づくりやルールの工夫を学ぶ機会となった。

７　研究の課題

(1) 体育では運動量を確保するために１人１台端末を日常的に活用することができなかった。今後は、マット運動や陸上運動などで運動の様子を撮影し、自己を振り返ることも必要である。
(2) コロナ禍の中で、児童の運動技能を高めることが十分にできなかった。今後は、柔軟性を高めるために、授業の導入に、発達段階に応じた共通の運動に取り組む場を設定することも必要である。

（記入者　　吉田　悟）

江南小

主体的に課題に向かい　ともに学び合う子の育成

～各教科における「発問」と「対話」の深め方の研究を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　笹川　力

１　研究主題について

(1) 研究主題設定の理由

ア　教育目標具現化のために

本校では、「強い子になろう」を教育目標に掲げ、児童の「生きる力」を育んでいくという理念を共有している。「生きる力」とは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の３つの要素の調和である。昨年度は、授業の核となる部分に、児童の思考につながる「しかけ」や思考を促すような「発問」を設定することにより、課題解決に必然性が生まれ、集中して意欲的に課題に取り組もうとする場面が多く見られるようになった。また、焦点化した対話のポイントを与え、視点を明確にして対話させることで、進んで自分の考えを伝えようとする児童が増えた。さらに、友達の考えの良いところに気付いたり、自分の考えを深めたりする児童も見られた。児童同士のより良い関わり合いが見られるようになったことは、「豊かな心」を育むことにつながっていると言える。今年度は、授業のどの段階に重きを置くかを明確にし、より効果的な「対話」の場面について考え、学習の組み立てを吟味することで、主体的な深い学びを実現し「確かな学力」へとつながるように研究を進めていきたい。

イ　児童の実態から

３年計画の２年次である昨年度は、授業研究において、「発問」や「授業展開」の工夫に加えて、目的と視点を明確にした必然性のある「対話」のさせ方について取り組み、授業改善に努めてきた。視点を明確にして対話させることで、進んで意見を伝えたり、友達の考えの良さに気付いたりしながら考えを深められる児童が増えた。一方、「対話」の場面では、発言力に個人差があり、自信をもって発言できない児童もいた。今後は、各教科の授業において主体的に課題解決ができるように、より効果的な「対話」のあり方を工夫し、質の高い学び合いをさせていくことで、更に学びを深めていくことができると考え、本主題を設定した。

ウ　これまでの研究経過から

昨年度の研究を通して次のような課題が明らかになった。

①主体的で深い学びにつなげていくためには、教師が授業のどの段階に重きを置くかを明確にし、より効果的な「対話」の場面について考え、学習の組み立てを吟味していく必要があること。

②「対話」の場面で発言力に個人差があり、自信をもって発言できない児童もいるため、自信をもって発言できるようにするための手立てを考えていく必要があること。

今年度は、昨年度までの実践の積み重ねを大切にしながら、①についての研究を重点的に進めていきたいと考える。昨年度の授業研究を通して、目的と視点を明確にした必然性のある「対話」をさせることで主体的な対話の場が生じ、より深い学びにつながっていくことが明らかとなった。３年計画の３年次である今年度は、主体的で深い学びとなるために、授業のどの段階に重きを置くとよいかについて明確になるように取り組んでいきたい。

２　研究のねらい

各教科の授業において、主体的に課題に向かい、対話を通してともに学び合おうとする児童を育てるための指導のあり方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

各教科の授業において、思考を促すような「しかけ」や「発問」の工夫、重点を置く段階を明確にした授業展開を工夫することで、主体的に課題に向かい、ともに学び合う児童を育成することができると考える。

４　研究内容

(1) 児童が主体的に課題に向かうための工夫

ア 思考を促すような「しかけ」や「発問」、「授業展開」の工夫

イ どの児童にも自分の考えをもたせ、自信をもって発言するための手立ての工夫

(2) 児童同士が進んで関わり合い、深い学びにつなげていくための「対話」の工夫

ア 「対話」に必然性をもたせるための手立て

イ 「対話」の目的と視点の明確化

(3) 自己の学びを見つめ直す「振り返り」の視点の与え方の工夫

５　年間計画

(1) 授業研究等

月	日	授業研究・教材研究等
６	３０	第１回授業研究（１学年　国語） 題材名　「じどう車くらべ」 １年１組　授業者　教諭　池田　美幸
９	２２	第２回授業研究（４学年　道徳） 題材名　「せきが空いているのに」 ４年１組　授業者　教諭　上條　優美

(2) 一般研修

月	日	内　　容　　等
５	２６	児童理解研修会
７	１４	算数における問題解決的な授業展開について 講師　峯　明紀　（本校　拠点校指導教員）
８	２５	１人１台端末活用研修会 講師　石井　一二三　主任指導主事
１２	１５	描画の効果的な指導法について 講師　三浦　真弓　（本校　拠点校指導教員）
２	２２	CRT 学力テスト分析（各学年）

６　研究の成果

(1) 児童の思考を促すため、カードの使用や教材提示の工夫などのしかけをすることで、根拠を探ったり、予想とのずれから深く考えたりするなど、主体的に課題に取り組む態度につながった。
(2) 対話に必然性をもたせるために、ペアで課題解決に取り組ませた結果、間違いへの気付きや自分の考えに対する自信につながり、全体の場でも進んで発言する児童が多くなった。
(3) 全体で対話をする場面では、教師が「対話」の目的と視点を明確にするために問い返しをしたことにより、児童から多様な考えが引き出され、個々の考えの深まりや広がりにつながった。

７　研究の課題

(1) 思考を伴う課題解決に消極的な児童もいるため、「主体的に課題に向かうためのしかけや授業展開の工夫」を個に応じて日常化していく必要がある。
(2) 自分の考えを分かりやすく説明したり、正しく書いたりすることが苦手な傾向が見られるため、表現力向上に役立つ表現活動の在り方を探っていく必要がある。

（記入者　池田　美幸）

田面木小

自分の考えを進んで表現する子の育成

～根拠をもって説明する力を育てる授業づくり～

（３年計画の３年次）

校長　高山　一雄

１　研究主題について

本校では、教育目標の「よく聞き考える子」及び、努力目標の「よく聞き、しっかり考えて課題に取り組む」を受け、相手の考えを聞き、自分の考えを深めることのできる児童の育成を目指している。

１年次では課題に意欲的に取り組ませるための授業づくりや、自分の考えを積極的に表現しようとする気持ちを高めるための授業づくりを、全教科・領域で研究した。学習課題を設定する場面では、「しかけづくり」を取り入れ、児童に揺さぶりをかけたり葛藤させたりしながら、意欲的に課題に取り組むことができるように、自分の考えの根拠について、全ての児童が書いたり話したりできるような手立てについて工夫し、全ての児童が理由をつけて表現できることを目標にして取り組んできた。その結果、児童の発表意欲や課題解決への意欲を高めることができ、また、様々な場面で、多くの児童が理由をつけて表現することができるようになった。しかし、理由を書く力は向上したものの、話す力が弱いという課題が挙げられた。

２年次では、書く力だけではなく話す力も高めていくことを目標に、研究に取り組んだ。１年次同様、課題設定では学習の題材に「しかけ」をすることで、児童の課題解決への意欲を高め、さらに、課題設定の場面でも児童が理由を話せるような発問を、積極的に取り入れるようにした。課題解決場面では、考えさせるための材料となるものを児童に工夫して提示したり、少人数で話す場面を設定したりしたことで、話すことに抵抗感が少なくなった児童が増えたという成果を挙げることができた。しかし、発表することに重点を置いたことで、話すことがあまり得意ではない児童にとっては、考えの根拠が深めにくくなってしまうことや、個人差が大きくなってしまうという新たな課題が見つかった。

以上のような理由から、今年度は児童の課題解決への意欲を高め、全ての児童が自分の考えについて根拠をもって説明する力を育てる授業づくりを目指していくことにした。

２　研究のねらい

自分の考えについて根拠を明らかにしながら、進んで表現できる児童を育てるための指導のあり方を明らかにする。

３　研究仮説

思考の対立や葛藤、疑問をもたせるための課題設定や発問を工夫し、自分の考えの根拠について書いたり話したりするための支援や表現する場の設定を工夫することによって、児童が意欲的に課題解決に向かい、根拠をもって説明する力が高められると考える。

４　研究内容

(1)　児童に思考の対立や葛藤、疑問をもたせ、意欲的に解決しようとする学習課題を設定するための、学習材の「しかけ」や、発問の工夫はどうあればよいか、実践を通して明らかにする。

(2)　課題を解決するための話合いの場面や課題についてまとめる場面で、全ての児童が自分の考えの根拠をもって説明するための支援はどうあればよいか、実践を通して明らかにする。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
５	２６	第１回授業研究　　第５学年　理科「植物が成長する条件」 授業者　　教諭　　鎌田　裕子
６	２４	第２回授業研究(要請訪問)　　第２学年　国語「たんぽぽのちえ」 授業者　　教諭　　野里　さや香 助言者　八戸市教育委員会教育指導課　　福田　秀貴　主任指導主事
９	２３	第３回授業研究（要請訪問）　第３学年　体育「逆上がり・多様な動きを作る運動」 授業者　　教諭　　三浦　紗耶香 助言者　八戸市教育委員会教育指導課　　竹井　亮　主任指導主事
１１	４	第４回授業研究　　あすなろ１組　自立活動「きもちをことばでつたえよう」　授業者　　教諭　　田村　久美子
９	１５	特別支援ブロック参観授業　　おおぞら学級　自立活動「宿題をやっていない時」　授業者　　教諭　　荒木　育子
１１	１１	低学年ブロック参観授業　　第１学年　算数科「くりさがりのあるひき算」 授業者　　教諭　　坂本　明希子
１１	１６	中学年ブロック参観授業　　第３学年　音楽「せんりつの流れと変化」 授業者　　教諭　　荒井　美佳
１１	１７	特別支援ブロック参観授業　あすなろ２組　自立活動「気持ちについて考えよう」　授業者　　講師　　湊　美穂
１２	３	高学年ブロック参観授業　　第６学年　理科「電気の有効利用」 授業者　　教諭　　磯谷　誠之
１２	１４	中学年ブロック参観授業　　第５学年　理科「もののあたたまり方」 授業者　　教諭　　山下　淳

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	２	特別な配慮を必要とする児童生徒への支援 講師　青森県総合学校教育センター　特別支援教育課　藤川　くみ　指導主事
７	７	いじめへの対応 講師　青森県総合学校教育センター　　教育相談課　平川　淳一朗　指導主事
８	２３	１人１台端末活用に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事

６　研究の成果

(1) 学習題材への「しかけ」は、この三年間で試行錯誤しながら様々な方法を実践できるようになった。研究授業などを通して、全ての教員が工夫して課題設定に取り組んだことにより、児童の意欲も全体的に高めることができた。

(2) 全員が考えを表現する取組では、「書くこと」と「話すこと」を組み合わせながら、どちらかの形で全員が考えをもつための手立てを工夫することにより、児童の表現する意欲や力を向上させることができた。また、話す場面では、少人数で話すことや、話すことが楽しいと感じられるような場面設定などを工夫することにより、自分の考えを伝えることに対する抵抗感を減らすことができた。

７　研究の課題

児童の学習意欲を高めるために、学習課題の設定場面では「しかけ」についてさらに研究を深めていくことが必要だと思われる。また、自分の考えを表現するだけではなく、相手の考えを聞きながら、解決に向けて伝え合う力を高めることについても、今後の課題として取り上げていきたい。

（記入者　　鎌田裕子）

下長小

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

（３年計画の２年次）

校長名　　宍戸　義彦

１　研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」～思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子～を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主に伝え合う力を身に付けさせるための指導方法のあり方について研究した。教科を問わず、自分の考えをもち、話したい、聞きたいと思えるしかけや発問の工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童が自分の考えを話したい、友達の考えを聞きたいという意欲が高まった。また、発問の工夫により、話し合う内容が焦点化され課題を解決したいという児童の意欲も高まった。また、書く活動を効果的に取り入れることにより、考えをもたせる手立てとして有効であることも検証された。さらに、「話す・聞く」表は教室に掲示し、普段の授業における話合いの指標となった。児童にとって共通理解しやすく、定期的な評価及び指導の改善を図ることができ、伝え合う力に成長が見られた。一方、課題として、全体の話合いで参加することができない児童の意見やよさを生かすことができなかったことが挙げられた。全員が参加することができるように、教師が児童の意見をつなぐコーディネート役になる必要がある。

そこで、今年度は、「子どもが課題解決したいと思えるしかけ（教材提示や発問）の工夫」「子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

２　研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけやコーディネートなどの指導方法のあり方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

子どもが課題解決したいと思えるしかけの工夫、子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫をすることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 子どもが課題解決したいと思えるしかけ（教材提示や発問）の工夫（授業の導入場面）
(2) 子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫（話合いの場面）

留意点・・・上記（1）（2）を進める上で次の点にも留意する。
　ア　自分の考えを書く活動を取り入れること
　イ　学年の段階に応じて「話す・聞く」表を活用すること

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容
６	２３	第１回授業研究（３学年）授業者　皆川　千恵教諭　　理科「風やゴムで動かそう」
９	１	第２回授業研究（５学年）授業者　田中　椋教諭　　算数「面積」
１０	１３	第３回授業研究（１学年）授業者　奈良　真優子教諭　　算数「かたちづくり」

⑵　一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	２	「一人一台端末活用研修」 講師：本校　川村　祐輝教諭
６	１６	「問題解決的な授業づくり」 講師：八戸市総合教育センター　副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉先生
６	３０	・Q-U 分析
８	２５	・青森県学習状況調査採点作業
１１	２４	・特別支援学級　授業公開
１	１２	「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　副参事兼主任指導主事　日向端　聖先生

６　研究の成果

⑴　しかけの工夫により、児童の課題解決への意欲が高まった。また、児童が問いや解決の見通しをもち、課題解決に向かうことができた。

⑵　ヒントを言わせる、話し合う内容を焦点化する、発問を工夫するなど、話合いで教師がコーディネートの工夫をすることによって、聞き手を育てるとともに、児童の理解を深めることができた。

⑶　話すことが苦手な児童にとっては、書く活動が伝える力となった。考えをもたせる手立てとしても有効であった。また、各教室に「話す・聞く」表の掲示をしたことにより、授業中、児童が発表する際に確認することができ、話合いの指標となっていた。

７　研究の課題

⑴　児童の興味・関心を高めるためだけのしかけではなく、問いをもち、課題解決につながるようなしかけを日常的に行っていくように努めることが大切である。

⑵　全員が話合いに参加し、課題解決に向かうようにするためには、教師は安心して学べる学級づくり、板書の工夫（視覚化）等を含めた、ファシリテーターになる必要がある。

⑶　引き続き、書く活動を工夫して取り入れることで、教師が児童の考えを把握していくことも大切である。また、「話す・聞く」表を見直し、本校の実態に適したものにしていく。

（記入者　寺澤　麻美）

城北小

自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成

～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　高　谷　　信　行

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「考えを表す子」「きたえる子」の徳・知・体の柱を掲げ、「学ぶ意欲」と「豊かな心」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者と関わり合いながら協働的に学習を進め、自分の考えを深めていくことが必要になると考えた。

(2) 研究の経過から

昨年度は、児童が興味をもったり、身近なこととして考えたりできる課題設定や発問、しかけなど、児童を主体的に学習へ向かわせる工夫を授業に盛り込んだことで、児童の意欲を引き出すことに一定の成果が得られた。また、課題に取り組ませる際には、既習の確認、ヒントの提示、具体物・半具体物の提示等によりしっかりと見通しをもたせることが、児童の意欲を持続させることに有効であるとわかった。しかし、「意欲」を「主体的な学び」へと導くためには、児童の感想、誤答、疑問等を生かしたり、教材や資料の提示の仕方を工夫したりして、児童にとって「必要感のある課題設定」を引き続き研究していく必要性を感じた。

そこで、今年度は「必要感」を意識して、児童を主体的に学習へ向かわせるための課題設定について研究を進めてきた。魅力的な教材、よい発問などによって、子ども達に疑問や違和感、憧れ、興味などを抱かせ、「解決したい」「明らかにしたい」と思う「必要感のある課題設定」につなげることで、子どもの主体性を引き出すよう工夫した。また、導入場面だけでなく、児童を最後まで粘り強く学びに向かわせることができるよう、引き続き、学習の進め方や学びのゴールをイメージさせる見通し、自分の学びを見つめさせる振り返りについても吟味し、城北小の目指す児童像に迫れるよう実践を重ねた。

２　研究のねらい

自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育てるための指導の在り方を、授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

課題設定や見通しのもたせ方、振り返りなどを工夫することによって、自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成することができる。

４　研究内容

○自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成するための効果的な指導の在り方

・児童を主体的に学習へ向かわせるための必要感のある課題設定の工夫

・学習の進め方や学びのゴールをイメージさせる見通し、自分の学びを見つめさせる振り返りの工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者・講師・授業の概要
6	9	６学年　算数：「分数×整数　分数÷分数」　　教諭　小向　美保子
		前時のやり方では解けない問題を提示することによって既習とのずれが生まれ、必要感をもたせて話合いをさせることができた。また、面積図を分割する動画を示し、見通しをもたせたことで、児童が図と式のつながりを理解することができた。
7	１４	３学年　理科：「ゴムのはたらき」　　教諭　遠藤　彩華
		動いた距離の違う２台の車の写真を提示し、既習や経験をもとにゴムの伸ばし方を予想させたことによって、意欲的に実験に取り組ませることができた。適切に実験のやり方やまとめ方を指導したことによって、よりゴムを伸ばせば、車の進む距離が長くなることを理解させることができた。

9	1	４学年　国語：「世界にほこる和紙」　　教諭　髙森　龍太郎
		筆者の伝えたいことは何かをおさえたうえで、資料と文章のつながりを考えさせることによって、児童に見通しをもたせ、意欲的に学習させることができた。そのことにより、説明文の資料の役割について理解させることができた。
9	8	５学年　社会：「水産業のさかんな地域」　　教諭　向中野　也美
		児童に馴染みのあるマグロを資料に扱い、実際のスーパーの陳列棚の写真を示したことによって、児童の疑問をもとに課題を設定することができた。児童は自分の疑問を解決するために、資料を用いて進んで調べることができた。
１０	２０	２学年　国語：「お手紙」　　教諭　福田　新子
		教材の一部を隠すしかけを作り、児童に予想させることによって、問題意識をもって学習に向かわせるとともに、課題を解決するために叙述に沿って考えさせることができた。また、考えを吹き出しに書かせることによって、自然と登場人物の気持ちを想像する必要性が生まれた。
１２	１５	１学年　国語：「じどう車くらべ」　　教諭　坂松　夢咲
		本文の叙述に合わない絵を提示し、間違い探しをしたことによって、児童に抵抗感なく意欲的に文章を読ませることができた。さらに、間違いを言語化することによって、自動車の「しごと」と「つくり」を関連付けて読み取らせることができた。

(2) 一般研修

月	日	一　般　研　修
4	１４	１人１台端末活用研修 講師：八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事
5	１９	個別な配慮を要する児童の理解及びいじめ対応に関わる研修 担当：本校教諭　根城　恵美　　小笠原　真一
5	２６	不審者対応訓練 講師：下長交番所長　他２名
5	３１	問題解決的な学習を取り入れた授業づくりに向けて 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事

６　研究の成果

(1) 児童自らが課題を見出せるように、教材へのしかけや発問の工夫を行ったことにより、自分の考えと友達の考えとのずれ、既習とのずれが生じ、それを解決するために考える必要感や問題を解きたい、実験をやってみたいという意欲をもたせることができた。また、教師が導入でこのような課題設定を意識したことによって、児童の学習への苦手意識や抵抗感を減らし、積極的に楽しく学習に向かわせることができた。さらに、児童によっては課題を解決するために粘り強く試行錯誤するなど、主体的な学びの姿も見られた。

(2) 課題を解決するための見通しをもたせたり、ワークシートや表などを工夫して予想されるつまずきに対して支援したりしたことによって、自信をもって課題に取り組ませることができた。また、課題解決に取り組む中で、他の解き方があると気づいたり、自他の立場に立って考えたりと、教科の特性に応じた見方・考え方の広がりも生まれた。

７　研究の課題

(1) 児童が課題を解決していくために、国語の学習においては叙述に即して読むなど、根拠のある考えをもたせることが必要である。そのことが、各教科の学習目標を達成し、児童に基礎的、基本的な力を身に付けさせることにつながると考えられる。

(2) 成果(2)にあるように、児童を最後まで意欲的に課題に向かわせるためには、解決への見通しをもたせることが有効であると明らかになった。今年度は、教師が積極的に支援をして見通しをもたせることが多かったが、今後は児童の思考に寄り添い、適切に支援しながら、児童が課題の解決方法を見出していけるような指導方法を研究していきたい。

（記入者　　小向　美保子）

高館小

主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して～

（３年計画の２年次）

校長名　　古　戸　美　登　子

１　研究主題について

本校の教育目標は「たくましく生きる子」である。めざす児童像である「夢や志の実現に向かって学び続ける人間性豊かな子ども」の育成に向けて教育活動に取り組んでいる。

この具現のためには、児童が主体的、創造的に学習に取り組む資質や能力、態度を育てるとともに、積極的に他者と関わりをもち、学び合いながら問題を解決しようとする意欲を高めていく必要がある。

昨年度から、国語科を中心に、本校における主体的に学び合う子どもの姿について共通理解を図るとともに、児童に問いをもたせるための発問、学びを広げ深めるための学び合いのさせ方、活用につなげるための振り返りについて、授業研究に取り組んできた。

その結果、

(1) 判断のずれを生みだす発問をすることにより、発言しようとする児童やより深く考えた内容をノートに書いている児童が、見られるようになり、全体的に児童の学ぶ意欲が高まってきた。

(2) 友だちの意見を聞いた後によく考えて発言したり、友だちの意見と自分の意見を比較した後に付け加えて発言したりするなど、考えるためのポイントを押さえた聞き方ができるようになってきた。また、学習課題を明確にするために、焦点化した授業を展開することで、ペアやグループ、全体での話合いの内容が、課題を意識したものになってきた。

一方で、

(1) 振り返りの際は、ワークシートを活用して分かったことを明確化させたり、児童に活用場面を想定させたりするなど、習得と活用を意識した振り返りの場面を設定する必要がある。

という課題が挙げられた。

これらの成果と課題を踏まえ、今年度は、児童が主体的に学び合い、互いの考えを広げ深める授業づくりを目指すとともに、振り返りを工夫することで習得と活用につなげることができる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

主体的・対話的で深い学びを実現する授業のあり方を、国語科における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童同士が思いや考えを伝え、学び合う学習活動を工夫することによって、主体的・対話的で深い学びを実現することができる。

４　研究内容

(1) 習得と活用を意識した授業のしかけ

ア　判断のずれを生みだす発問の工夫

イ　学び合いのさせ方（身に付けさせるスキル、形態、焦点化など）

ウ　振り返りのさせ方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者
６	３０	第１回授業研究（６学年） 国語「時計の時間と心の時間」　教諭　安井　康智
９	２９	第２回授業研究（２学年）（要請訪問） 国語「お手紙」　教諭　佐藤　亜貴子

(2) 一般研修

月	日	内　　容
６	３	国語のデジタル教科書の活用について 講師　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴　先生
７	１６	一人一台端末の活用の仕方（実践編） 講師　総合教育センター主任指導主事 石井　一二三先生
８	２３	絵画研修会　講師　川村　真弓　先生
９	２２	Chromebook の活用（実践編）
１１	２４	体育科における指導法（跳び箱） 講師　本校教頭　中村　雅人
１２	１	特別支援教育について　あじさい学級公開授業　教諭　粟津　綾子
１	１２	Chromebook の活用
２	１９	ＣＲＴ分析

６　研究の成果

(1) 判断のずれを生みだす発問をすることにより、叙述にしっかりと目を向けて考えるようになってきた。それに伴って、どの言葉や文章に着目して考えたのか、根拠をもって説明したり書いたりする児童が増え、 課題に対して児童の主体的に学ぶ意欲が高まった。

(2) 振り返りの際、ワークシートを活用して分かったことを明確化させたり、児童に活用場面を想定させたりすることで、次の学習への意欲につながった。

７　研究の課題

(1) 意見交流に留まらず、児童同士がより深い学び合いにつながるような工夫が必要である。

(2) 問いを正確に読み取り、自分の考えを簡潔に書かせたり表現させたりするための工夫が必要である。

（記入者　金田　光子）

自分のこととして課題解決する子の育成

～見通しと振り返りを大切にした授業を通して～

（２年計画の２年次）

校長　　亀谷　孝子

１　研究主題について

本校では、教育目標である「かしこく　やさしく　たくましく」の具現化のために、主題「自分のこととして課題解決する子の育成～『わくわく』『どきどき』する授業の工夫を通して～」を掲げ、研究を進めてきた。昨年度は、授業の充実を図るため、継続的に問いの意識を喚起させるような学習活動を工夫し、ブロックごとに研究授業を行った。その結果、課題を理解して学習に取り組んだり、理由や根拠を述べながら交流したりすることができるようになってきた。しかし、児童の実態として、基礎的・基本的な力が定着していないことにより、自分の考えに自信をもてないことや、「わかった・できた・身についた」という実感をもてないことが課題となった。学力諸検査等においても、全学年、思考・判断・表現よりも知識・技能が低いという結果が出ている。また、主体的に学習に取り組む態度も十分とは言えない結果であった。

そこで、今年度は、昨年度までの研究を踏まえながら、見通しと振り返りを大切にした授業を通して、学習における基礎的・基本的な力を習得させ、意欲の向上を図っていきたいと考えた。教師が児童に身に付けさせたい力を明確にし、授業の導入においては、課題提示や発問・指示の工夫をすることで、児童に既習事項を基に解決の手がかりを見つけ出させ、見通しを共有させながら、「できそうだ」「解決したい」という意欲をもたせ、主体的・対話的に課題解決できるようにさせたい。さらに、授業の振り返りにおいては、できるようになったことや身に付いたことを確認する手立てや場を工夫する。課題解決することを通して知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力を培うことで、「わかった・できた・身についた」を実感させたい。このように、見通しと振り返りを大切にすることで、児童は安心感や自信をもち、「自分のこととして課題解決する子の育成」に迫ることができると考える。

今年度の学校目標は「根っこを鍛える子～学習・生活の基礎の定着～」である。学習の根っことして、分かる授業を目指し、学力全体の底上げをしていきたい。

２　研究のねらい

安心感や自信をもって、自分のこととして課題解決する子を育成するために、見通しと振り返りを大切にした授業が効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 見通しをもたせる場面では、既習と未習のずれ等から問いをもたせ、めあてを明確にするとともに、解決の見通しを共有することで、主体的に取り組むことができると考える。

(2) 振り返りの場面ではできるようになったことや身に付いたことを確認する手立てや場を工夫することで、学習内容の習得を実感することができると考える。

４　研究内容

(1) 分かる授業の実践

ア　意欲を向上させ、基礎的・基本的な力を習得させる授業づくり

イ　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

(2) 言語活動能力と基礎学力の定着

ア　教材「ことばのきまり」の継続指導

イ　読書

ウ　月末の小テスト

エ　家庭学習（自学のすすめ）

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
６	１６	第１回授業研究（６学年）「逆数」　授業者　教諭　石橋　睦子
１１	１０	第２回授業研究（１学年）「かたちづくり」　授業者　教諭　大浦　まどか
１２	８	第３回授業研究（３学年）「分数」　授業者　教諭　岩城　裕美子

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	３０	道徳科に関しての研修　本校教諭　佐藤　直子
８	２０	ソーシャルスキルトレーニングの研修　本校通級指導教室 教諭　中村　久美子 教諭　宮崎　千登理 教諭　中岫　美奈子
１０	１３	１人１台端末を活用した授業についての研修　（要請訪問） 八戸市教育委員会　教育指導課　主任指導主事　福田秀貴先生
１	１１	カリキュラム・マネジメントの研修　本校校長　亀谷　孝子
２	９	中央研修報告　カリキュラム・マネジメント開発研修 本校教諭　大嶋　和明

６　研究の成果

(1) 既習と未習のずれ等から問いをもたせ、めあてを明確にし、解決の見通しを共有することで、主体的に取り組むことができるようになってきた。

(2) 授業の流れをシステム化することで、児童が見通しをもって取り組み、安心して活動することができるようになった。

(3) 選択肢や文章など、学年に応じた振り返りを行い、できるようになったことを確認することができた。

(4) 授業の中で、練習問題等に取り組ませる場を工夫することで、学習内容の習得を実感させることができた。

７　研究の課題

(1) 思考のずれを毎時間設定することが難しかったため、単元全体を見通し、問いをもたせる場を計画的に設定していきたい。

(2) 振り返りの表現の仕方に個人差が見られたため、観点を明確にし、校内で統一して取り組ませていきたい。

（記入者　岩城　裕美子）

日計ヶ丘小

主体的に学び合う子の育成

～ 対話力を高める指導の工夫 ～

（３年計画の２年次）

校長　　楢木　慎一

１　研究主題について

本校では、教育目標として「共に学び　共に輝く　日計ヶ丘の子」、努力目標「めあてをもって学び合う」の具現化のため、昨年度から、「主体的に学び合う子の育成」を目指し、「自分の考えを筋道立てて説明させる手立ての工夫」、「聞く意図に応じた聞き方の指導の工夫」について研究を進めてきた。

その結果、学習内容に合わせた思考ツールを使わせることで、課題解決に向かう学習の見通しをもつことができた。さらに、自分の考えが視覚化され、筋道立てて説明することができた。また、自分の考えを書くことで考えが整理され、人に説明する準備ができ、話すことへの抵抗感が少なくなった。しかし、聞き取った内容を自分の言葉で表現できる児童は少数だった。内容を聞き取れない、聞き取った内容を整理できないことが原因として考えられる。

これらの成果と課題から、相手に伝えられる話す力に加え、内容を聞き取り、整理できる聞く力が必要であることが明らかとなった。そこで、話す、聞く活動を同時に行う対話のさせ方を工夫することによって、仲間と意見を交流し、協働で課題解決に向かうことができると考えた。このように、対話力を高める指導の工夫により、課題解決において対話が効果的であるという経験を積み重ねることが、主体的に学び合う子の育成につながると考え、本主題及び副題を設定した。

２　研究のねらい

主体的に学び合う子を育てるためには、課題解決における手段の一つである対話力を高める指導方法が有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

自分の考えを筋道立てて説明させたり、必要な情報を集めさせたりする手立てを工夫することにより、課題解決のために対話を効果的に進めることができ、主体的に課題解決する子どもを育てることができる。

４　研究内容

(1) 思考ツールを使った対話のさせ方の工夫

ア　筋道立てて説明させる手立ての工夫

イ　必要な情報を集めさせる手立ての工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・教科・題材名・授業者
6	16	第１回公開授業　５年国語科「言葉の意味が分かること」 ６年国語科「時計の時間と心の時間」授業者　教諭　清水　紀昭
9	8	第２回公開授業　１年国語科「たのしいな、ことばあそび」 授業者　教諭　山村　美香子
	29	第３回公開授業　２年国語科「お手紙」　授業者　教諭　齋藤　孝志
11	17	第４回公開授業　３年国語科「すがたをかえる大豆」 ４年国語科「世界にほこる和紙」　授業者　教諭　吉田　悦子
12	8	第５回公開授業　あおぞら学級　３年国語科「三年とうげ」 ４年国語科「プラタナスの木」 授業者　教諭　階上　明子

(2) 一般研修

月	日	内容	講師
4	28	緊急時の対応（食物アレルギー）	本校養護助教諭　斉藤　利香
7	14	鉄棒指導	八戸市立柏崎小学校 教諭　小向　一樹
8	17	Chromebook 活用の実践	本校教諭　清水　紀昭
2	16	県外研修報告会	

６　研究の成果

(1) 学習内容に合わせた思考ツールを使わせることで、自分の考えが視覚化され、筋道立てて説明することができた。また、書くことで共有化、操作化が可能となり、対話場面で活用することができた。

(2) 思考ツールを使い、聞き取る内容を焦点化することで、対話にとって必要な情報を集めることができた。

(3) 同じ型の思考ツールを繰り返し使うことで、学習の見通しをもつことができ、前向きに対話することができた。

７　研究の課題

(1) 主体的に学び合うための手段としての対話であり、思考ツールである。学びの手段として活用できるようにするためには、成功体験が大事だと考える。対話の良さ、思考ツールを使う良さを味わわせる必要がある。

(2) 話す、聞くと部分的には成果が見られたが、課題解決するための対話力はまだ不十分である。聞き取った情報を課題解決に生かすことができないことが原因として考えられる。課題解決のための対話の仕方が身に付く指導法について研修していく必要がある。

（記入者　清水紀昭）

是川小

主体的で対話的な授業づくり

～自分の考えをもち、議論できる発問の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　佐々木　宏恵

１　研究主題について

本校では、教育目標「学ぶことの喜びと確かな力をもつ是川の子」、努力目標「考えを表現する子」を掲げ、主体的に学習に取り組む子どもを育てることを目指している。そのために必要なのは、児童が「学びたい、話し合いたい」という意欲をもって学んでいける授業づくりをすることである。対話を通して学ぶ楽しさを感じさせることにより、友達と共に学び合い、高め合う、主体的に学ぶ子どもが育成できると考え、本研究主題を設定した。

昨年度も「主体的で対話的な授業づくり」という研究主題のもと、必要感をもって学びに向かわせる発問や題材の提示を工夫し、児童の伝え合いを促すことに取り組んできた。その成果は以下のとおりである。

○実態調査や教材理解をもとに、授業のねらいを適切に設定したことにより、その授業の中心が明確になり、授業を貫く中心的発問や、児童の思考をゆさぶる補助発問が適切に配されるなど発問が吟味され、対話を促す授業づくりへの理解を深めることができた。

○子どもに必要感をもたせようと教師が意識して日常の授業づくりをしたことにより、資料提示や子どもの思考をつなぐ聞き返し、思考を整理する板書及びワークシートなど、必要感をもたせる適切な手立てを講じることができた。その結果、子どもの「考えたい」「解決したい」という意欲が高まり、対話的な学びにつながった。

その一方で、話合いの場面では「他者の意見をうけ自らの学びを深める力が十分に身に付いているとは言えない」という課題が残された。

そこで今年度は、児童が自分の考えをもてる授業づくりをすること、議論を通して学ぶ楽しさを感じさせることにより、共に学び合い、高め合うことができ、主体的な学びにつながると考え、副題を「自分の考えをもち、議論できる発問の工夫」と設定して取り組む。なおその際には、昨年度の研究の成果である以下の３点を生かした授業づくりを行う。

・事前調査や実態調査、深い教材理解を基にめあてと適切な手立てを工夫する。
・児童の「議論する姿」「主体的な姿」を共通理解し、日常において対話する力を育てる。
・短い間隔で、教員間で成果を共有してさらに指導に生かす。

これらのことによって、児童が自分の考えをもち、主体的に伝えたり、受けとめたりして議論できる学びの力を身に付けることができると考える。

２　研究のねらい

主体的で対話的な学びの実現に向けた指導の在り方について、児童が課題を解決したいという必要感をもたせるために、授業づくりにおいて発問を工夫し、自分の考えをもって議論できる力を育むことを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

次の手立てを継続的に実践した道徳科及び日常の指導を行うことによって、児童が自分の考えをもち議論できるようになり、主体的で対話的な学びを実現することができると考える。

(1) 教材の特性（価値）及び系統性や児童の実態、学習内容から、児童が身に付けるべき（育てるべき）学びの力を明確にし、児童に自分の考えをもたせる手立てと、児童の思考を促す発問を吟味する。

(2) 子どもの「主体的な姿」「議論している姿」を定義し共通理解した上で、対話する力を育成することを意識した日常の指導を行う。

４　研究内容

(1) 系統性（上下の学年とのつながり、学年内での同じ価値内容での児童の学び）をもとに教材を理解し、適切な授業のねらいとそのための手立てを明確にする。

(2) 児童の対話を促すための教師の働きかけを吟味する。

(3) 児童一人一人に、自分の考えをもたせることができる導入及び発問を工夫する。
(4) 対話する力を育むことを意識した日常の指導を行い、その成果を教員間で共有して道徳科の授業及び日常の指導に生かす。

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究（感染症対策に配慮し、ビデオ協議会とした）

月日	題材名及び授業者	本時の目標
7/9	４学年道徳「心の体温計」 授業者　教諭　佐々木俊介 助言者　八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事　大野　勉　氏	○自分自身を客観的な視点で振り返ることを通して、節度ある生活を心掛けることですっきりした気持ちで過ごせることに共感し、自分も節度ある生活をしていこうとする心情を育てる。
9/29	２学年道徳「くつかくし」 授業者　教諭　井沼志穂	○物を隠すことについて、様々な人の立場になって話し合うことを通して、周りの人だけでなく自分も困るということに気付かせ、人としてしてはならないことは絶対にしないように生活していこうという心情を育てる。
12/1	５学年道徳「手品師」 授業者　教諭　釜石優子	○手品師が約束の方を選んだことの是非について議論することを通して、誠実に生きることの大切さと難しさを理解し、誠実に明るい心で生きていこうとする心情を育てる。

(2) 一般研修

月	日	研　修　内　容	講　　師
6	2	一人一台端末活用相談会①	是川小学校　教諭　佐々木俊介
6	23	対話力を高める日常の指導相談会	是川小学校　校長　佐々木宏恵
8	18	絵をかく会審査研修会	前江南小学校　教諭　川村真弓氏
9	1	作文指導について	是川小学校　校長　佐々木宏恵
9	22	「議論する道徳」板書相談会	是川小学校　校長　佐々木宏恵
11	17	特別支援教育	八戸市こども支援センター 主任指導主事　横沢吉則　氏
1	7	一人一台端末活用相談会②	八戸市総合教育センター 主任指導主事　石井一二三　氏

6　研究の成果

(1) 児童が身に付けるべき力を明確にした上で、「めあて」ではなく「考えたいこと、課題」として児童に提示することで、児童に考えさせたいことや課題を中心とした授業づくりを行った。考えさせたいことや課題が明確になったことで、導入の工夫や児童をゆさぶり思考を促す発問、考えさせたり表現させたりする場の設定などの適切な手立てを講じることにつながり、考えをもたせる授業づくりについて理解を深めた。
(2) 主体的に議論する姿について共通理解して日常の指導の中で対話する力を高める指導を行い、その成果や課題を短いサイクルで検証し共有することを重ねた。教師の工夫により、考えを話せない児童でも自分の考えをノートに書いたり、うなずきや相づちで自分の意思を表したりするなど、考えを表現するよう児童の意識を高めることができた。その結果、児童が自分の考えをもって議論できる力を育むことにつながった。

7　研究の課題

(1) 話合いにおいて、自分の意見を主張することや、些細な表現の違いを指摘することに意識が向いてしまうことが多く、他者の意見を聞いて自らの学びを深める力や、折り合いをつけて建設的な話合いを行おうとする態度が十分に身に付いているとは言えない。他者の意見を聞いて理解しようとしたり、共通点を探し自分の考えとつなげて話したりするなど、話合いを通して全体で課題を解決する力をどのように身に付けさせていくか、研究を重ねていく必要がある。
(2) 児童が自ら対話できるよう促す教師の働きかけについて、今後も教師が日常の授業の中で研究し、短いサイクルで共有と検証を重ね、全体での研究を推進していく必要がある。

（記入者　佐々木俊介）

三条小

互いに学び、ともに高め合う子どもの育成

～学級活動（１）を中心とした、話合い活動の充実を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　在家　正行

１　研究主題について

本校では、教育目標を「自分をのばす」、努力目標を「学ぶ力をのばす」と設定し、教育活動全体を通して、自己のよさや能力をのばす児童の育成を目指している。今年度も学級活動（１）を中心とした話合い活動を通して、一人一人のよさを互いに認め合いながら、進んで表現し、課題を解決する力を身に付けさせたいと考える。そのために、考えをもち、表現する力をつけさせるための土台づくりをし、主体的に参加できるような話合い活動を充実させることで、教育目標の実現を目指したい。

本校の児童は、素直な児童が多く、指示を聞いて行動に移したり、与えられた課題に対して真面目に取り組んだりするよさがある。しかし、自ら課題に気付き、解決に向けて挑戦したり、粘り強く取り組んだりすることに課題がある。また、様々な活動場面で、よい考えをもっていながら、自信をもって話せない姿が見られる。自分のよさ、友達のよさを認め合い、学級での自分の役割を理解し、みんなで何かを成し遂げる成功体験が必要と思われる。そのために、児童が必要感をもって主体的に参加できる話合い活動を充実させることによって、互いに学び、ともに高め合う児童の育成を図っていきたい。

昨年度は、考えをもち表現する力を付けさせる土台づくりとして、各教科の授業で、話合いの場を設定すること、児童が必要感をもって話し合うための環境づくりとして、①各学級で議題箱や学級会コーナーの設置、②話合いを効率的に進めるための司会グループの事前指導、③話合いを深めるための構造化した板書、を意識して研究を進めた。その結果、学級会が円滑に行われるようになり、児童が自分の考えをもち、見通しをもって話合いに参加するようになった。しかし、考えをもつことができても、相手に分かりやすく要点をまとめて話すことができないことが課題として残った。また、児童自らが、学級の生活をよりよくしていこうという視点で議題を見付けることが難しいという反省点も挙げられた。そこで、今年度は、①児童が主体的に聴き合う構えづくり、②集団での合意形成に向けた話し方の習得、③自他のよさや成長に向けた課題を気付かせる振り返りの工夫、により研究主題に迫りたい。

２　研究のねらい

児童が自分の考えをもち、主体的に参加できるように話合い活動を工夫することにより、互いに学び、ともに高め合う子どもが育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

学級活動の話合いにおいて、

① 相手が述べようとしている思いや考えを聴き合わせ、

② 自分の思いや考えを伝える話型・発言の仕方を体験的に学ばせ、

③ 自他のよさや成長に向けた課題に気付くように振り返らせれば、

互いに学び、ともに高め合う子どもを育成できる。

４　研究内容

(1) 主体的に聴き合う構えづくり

ア　問いをもって聴き、語る活動の工夫

イ　議題箱や学級活動コーナーの活用

ウ　議題例の掲示、係活動タイム・ミニ学級会の時間の確保

(2) 集団での合意形成に向けた話し方の習得

ア　自分の思いや考えを伝える話型・発言の仕方の体験的な学習づくり

イ　音読タイム、トークトレーニングの実施

(3) 自他のよさや成長に向けた課題に気付かせる振り返りの工夫

ア　学級会ノート、レベルアップ表の活用

イ　活動の振り返りの工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者　等
６	３０	第１回授業研究【学級活動（１）】 授業者　４年２組　教諭　久保沢達哉 議題「４の２お手本プロジェクト」
９	１	第２回授業研究【学級活動（１）】 授業者　２年１組　教諭　鎌田まゆ 助言者　八戸市総合教育センター　河村雅庸　所長 議題「夏休みの思い出発表会をしよう」
１２	１	第３回授業研究【学級活動（１）】（要請訪問） 授業者　５年２組　教諭　永田丈治 助言者　八戸市総合教育センター　中村美穂　主任指導主事 議題「６年生に向けて３０日チャレンジ！」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要　等
５	１２	ＡＥＤの使い方に関する研修　　講師　八戸市消防署尻内分遣所　署員
６	２	ノート指導に関する研修
９	２１	１人１台端末活用に関する研修（要請訪問）　講師　八戸市総合教育センター 石井一二三　主任指導主事

６　研究の成果

(1) 日常の授業の中で、「話している人に体を向ける」「うなずく」「つぶやく」「よさを見付ける」など、聴く態度を指導することによって、児童らに相手を意識して話を聴く様子が見られるようになった。反応しながら聴くことは「聴いているよ」「理解したよ」という証拠にもなり、話す側も「聴いてもらえる」「認めてもらえる」という安心感から「発表してみよう」という意欲にもつながることが分かった。

(2) 学級会の議題の年間計画を児童と作成して教室に掲示したこと、また、学級目標から生活を振り返ったり、係活動を充実させたりしたことによって、児童らが学級の問題に目を向けるようになった。そのことにより、話合いに意欲的に参加し、主体的に考える児童が増えてきた。

(3) 各学年に応じた話型を指導して、掲示することにより、自分の考えに理由を付けて話したり、相手の意見を尊重したりして、うまく折り合いを付けて合意形成することにつながった。相手の意見を尊重する、理解する、肯定的に受け止めるという態度が育ってきた。

(4) 振り返りの場面では、態度面だけではなく、めあてに沿った発言や合意形成につながる発言など、内容面を記入・発表させたことによって、児童の自己有用感が高まり、個々の成長につながった。自分だけでなく、友達の発言や態度に目を向けさせたことは、よりよい学級づくりにもつながった。

７　研究の課題

(1) 聴く態度が身に付いても、話している内容を理解すること、友達の考えと自分の考えを比べて聴くことがまだ十分ではない。主体的に聴くためには、自分の「問い」「考え」をもたせることが必要である。

(2) 学級会だけで自分の思いや考えを伝える指導をするのでなく、国語の「話す・聞く」単元と関連させて指導するなど、各教科等と連携して資質・能力を育成することが必要である。

(3) １人１台端末の活用など、情報を活用して主体的に学習を進めていくための資質・能力を身に付けさせるために研修をさらに推進していく必要がある。

（記入者　佐々木寿子）

西園小

学びに向かう力の育成

～「見通し」「対話」「振り返り」の学習過程を大切にした授業づくり～

（３年計画の２年次）

校長　　古　川　祐　行

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「めあてをもって生き生きと学ぶ子に」、努力目標に「進んで楽しく学ぶ」を掲げ、教育活動に取り組んでいる。今年度は学校目標を「共に高め合う西園っ子」とした。その具現化のために、課題解決に向けて共に考え、学習活動を振り返ることで身に付けた力を自覚したり、新たな課題を設定したりできる、「学びに向かう子」の育成を目指している。

(2) これまでの研究経過から

本校では昨年度から、研究主題を「学びに向かう力の育成」と設定した。「学びに向かう力」を、「見通しをもって学習に取り組む力」「他者との関わりの中で、自分の考えを広げたり深めたりする力」「学習活動を振り返って次につなげる力」ととらえ、授業実践に取り組んだ。

その結果、見通しをもたせることで課題が焦点化されたことや、対話する場を設定したことで自分の考えをもたせることができたこと、また、振り返りによって学習した内容を意識させたり次時への意欲付けが図られたりしたことが成果として挙げられた。

今年度も、昨年度の成果を生かしつつ、児童が自ら課題を発見し、問題解決に向かうための「見通し」をもたせる場、自分の考えを広げたり深めたりさせるための「対話」する場、身に付けた力や自己の学び方を意識させ、学ぶ意欲を喚起する「振り返り」の場を学習過程に位置付け、研究を展開していく。

２　研究のねらい

学習に対する見通しをもたせ、対話や振り返りを学習過程に位置付けた指導を工夫することで確かな学力の定着を図り、学びに向かう力を育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

「見通し」「対話」「振り返り」を意識した授業実践を行うことにより、児童一人一人の課題意識を喚起し、学ぶことのよさや意義を意識させることで、学びに向かう力を育成することができる。

４　研究内容

研究のねらいを達成するために、支持的雰囲気の学級づくりを基盤に、次の３つの内容について授業実践を通して明らかにする。

(1) 見通しをもって学習に取り組むための教材のしかけや発問の工夫
(2) 他者との関わりの中で、自分の考えを広げたり深めたりするための対話の場の工夫
(3) 学習活動を振り返るための視点の与え方の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名	概要
5	26	第１回授業研究（５学年　道徳科） 授業者　教諭　太田　麻木 題材名　心の管理人	導入で事前アンケートをもとに「自由」について考えさせたことで、教材と自分との間でギャップやずれが生じ、考えを深めることができた。
6	25	第２回授業研究（要請訪問　３学年　理科） 授業者　教諭　佐々木　柾斗 題材名　どれぐらい育ったかな 助言者　小野寺　良治　主任指導主事	既習事項を振り返り課題解決の土台を作ることで､見通しをもって取り組むことができた。身近な植物を教材としたことが意欲向上につながった。
6	30	第３回授業研究（２学年　算数科） 授業者　教諭　鮫ノ口　佳織 題材名　かさ	児童のつぶやきから長さの解き方と同じように単位を揃えて計算することを想起させることで、かさの計算に見通しをもって取り組むことができた。
10	11	第４回授業研究（１学年　算数科） 授業者　教諭　木村　彩佳 題材名　かたちづくり	色板の提示の仕方やワークシートを工夫したことで、形だけでなく枚数にも意識を向けて「かたちづくり」の学習に意欲的に取り組むことができた。
11	10	第５回授業研究（２学年　国語科） 授業者　教諭　木村　真由美 題材名　馬のおもちゃの作り方	説明文の順序を入れ替えて提示する導入のしかけによって、文章を正しい順序にする必要感が生まれた。振り返りを３つの観点に絞って設定したことが効果的だった。

(2) 一般研修

月	日	研修内容
8	23	ＡＥＤ等を使用した救命講習（講師　日本赤十字救急指導員　小野　梨花子　先生） クロームブック活用研修会（講師　八戸市総合教育センター　石井一二三　主任指導主事）
10	14	特別支援教育研修会（講師　八戸学院短期大学　野口　和也　教授）
11	11	若手研修会（講師　八戸市教育委員会　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事）

６　研究の成果

(1) 見通しをもって学習に取り組むための課題提示や導入の工夫について

「導入部分にしかけを加える」､「既習事項を想起させて本時の課題解決の土台をつくる」､「児童のつぶやきから本時のめあてを設定する」ことにより、見通しがたち、必要感をもって学習に取り組ませることができた。

(2) 他者との関わりの中で、自分の考えを広げたり深めたりするための対話の場の工夫について

児童が「分からない」と感じたところで対話の場を設けることにより、自分の考えを広げたり深めたりすることができた。

(3) 学習活動を振り返るための視点の与え方の工夫について

本校独自の「振り返りの１０のポイント」を今年度も活用し、授業内容に沿って振り返る項目を精選して提示したことによって、多くの児童が考えたことを文章化しまとめることができた。

７　研究の課題

(1) 学年や教科に応じてよりよい手立てを構築するために、発問の仕方や導入の工夫をさらに行っていく。

(2) 対話の定義を明確にし、どの児童も対話に参加できる場づくりを工夫していく。

(3) 学習のまとめとして振り返りを行うだけでなく、次時への見通しをもたせることにつなげられるようにする。

（記入者　太田　麻木）

明治小

自ら学び、ともに深め合う力を育てる授業づくり
～よく聴き、考えを深める問題解決の場の工夫を通して～

（３年計画の４年次）

校　長　　八嶋　　俊次

１　研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「よく考え学習する子、思いやりをもつ子、体をきたえる子」を掲げ、教育活動を展開している。また、今年度の学校目標を「児童の問題解決能力の向上～聴く力の育成と振り返りの充実～」とした。

本校の児童は、明るく素直で、教師から出された課題には意欲的に取り組んでいる。しかし一方で、自分で判断したり、行動したりすることに受け身になる傾向がまだ見られる。また、自信がもてないためか、自分の考えを表現することが苦手な児童も見られる。そこで、主体的に追究し解決する活動を通して、達成感や充実感を味わうことができるような授業づくりを研究していく必要があると考えた。

昨年度までは、集団解決の場において児童の思考や言語活動を促すための発問を工夫し、ともに深め合う力を育てる学習指導の充実・改善を図ってきた。 それにより、自分の考えをもって話合いに臨むことができるようになり、徐々に考えを深め合う力が向上してきている。また、児童の思考の流れが分かるような板書を工夫することにより、児童は自分の考えを広げたり、深めたりすることができるようになってきている。しかし、お互いの考えを比べながら聴き、微妙なずれや共通点に気付く力が不足しているためか、論点を見失ってしまったり、思考が停滞したりしてしまう様子も見られた。また、振り返りの内容は、やや情意面に偏っていて、教科のねらいに合わせた振り返りをさせることが十分ではなかった。

そこで、今年度は、昨年度までの研究の成果を継続しつつ、課題の共有や発問の吟味など、これまでも「よく聴き、ともに深め合う問題解決の場の工夫」として実践してきたことを通して、「主体的・対話的で深い学び」を実感させることができるよう、ともに深め合う力を育てる学習指導の充実・改善を図っていくこととした。教科としては、昨年度に引き続き国語科に絞って研究し、さらに充実させていくこととした。

２　研究のねらい

児童の考えを広げたり深めたりするための効果的な指導のあり方を、国語科における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

問題解決的な学習の実践を通して、児童の思考や言語活動を促すための働きかけを工夫したり、振り返りの場を設定したりすることにより、児童の考えが深まり、達成感や充実感を味わわせることができると考える。

４　研究内容

(1) 児童の思考や言語活動を促し、考えを広げたり深めたりさせるための働きかけの工夫
　ア 児童の思考の助けとなる板書、児童の思考の流れが分かる板書、お互いの考えが見える板書をする。
　イ 場に応じた発問の使い分けをし、児童の考えを引き出したり、友達の考えを聴く意欲をもたせたりする。

(2) 児童に達成感や充実感を味わわせ、学びを実感させるための振り返り
　ア 児童に自分が学んだことや変化したことを自覚させる。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等	授業の概要
6	１６	５学年　授業研究 「たずねびと」 授業者　田村　享太	「おばあさんの言葉を聞いてあなたならどう思う」という発問をすることにより、お互いの考えのズレに着目して聴き合うことができ、綾の心情の変化を捉えることにつながった。

6	２３	６学年　公開授業 「時計の時間と心の時間」 授業者　井畑　八千代	「事例に納得できているか、いないか、分からないか」という発問をすることにより、考えを比べながら聞くことができ、主張とそれを支える事例の関係について読み深めることにつながった。
7	7	１学年　授業研究 「はをへ」をつかおう 授業者　沼舘　優子	「わにはあらう。かおをあらう。を一つの文にできないか」という発問をすることにより、既習とのズレを生じさせ、助詞「は・を・へ」を正しい使い方について考えさせることにつながった。
9	２９	４学年　公開授業 「ごんぎつね」 授業者　下館　眞梨	文章を書き替えて提示し「ごんはどんなきつねか」と発問することにより、本文とのズレについて話したいという意欲をかき立て、ごんの人物像について、叙述を基に捉えさせることにつながった。
１０	１３	２学年　公開授業 「お手紙」 授業者　澤村　明香	「お手紙をうさぎに頼んだら･･･」と発問することにより、児童の反論したい意欲を高め、お手紙を待つ時間が幸せなものになったことを想像させることにつながった。
１１	１０	３学年　授業研究 「すがたをかえる大豆」 授業者　大嶌　禎子	「カードの色が同じ食品はどんな仲間だろう」と発問することにより、文中の決まりを探す必要感が生じ、話合いの過程で分類の視点を読み取らせることにつながった。
１２	１５	いちょう学級公開授業(自立) 「ルールについて考えよう」 授業者　中村　好秀	アンケートの結果を基に「ルールについて考えよう」という発問をすることにより、よりよい学校生活を送っていくための言動や適切な行動について児童の意識を高めることにつながった。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
9	1	1 人 1 台端末を活用した授業づくりⅡ 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下洋一先生
12	17	「主体的・対話的で深い学び」を実現させるための指導法改善 指導助言：教育指導課　副参事（実践支援グループリーダー）兼主任指導主事 日向端　聖先生
12	22	1 人 1 台端末を活用した授業づくりⅢ 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井一二三先生

６　研究の成果

(1) 主に発問や板書を工夫することで、互いの思いや考えをよく聴き、理解し合う等、学びの広がりや深まりが見られた。話合いや振り返りの過程で自らの学びを見つめ直し、修正したり新たな考えを発見したりすることが、自ら学び、ともに深め合う力の育成につながることが分かった。

(2) 全学級による授業公開を実施することによって、様々な発問（しかけ）の事例や手法、問題解決の場面を学ぶことができ、それらを日常の実践に生かすことができた。

７　研究の課題

(1) 個々の考えをもたせること、発言の場を保障すること、全体の場で効果的に共有させることなど、限られた時間を最大限に活用するための指導過程の工夫が必要である。

(2) 異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す協働的学びの実現に向けて、学びに向かう力を育成したい。

（記入者　　大嶌　禎子）

桔梗野小

関わり合い、考えを深め、解決する子の育成

～主体的に学び合う活動の工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　吉田　朝子

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「進んで学習する子」「進んで体をきたえる子」の徳、知、体の柱を掲げ、「自ら学び、よく考え、進んで表現する子」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、主体的に学習に取り組み、お互いの学び合いの中から思考を深め、課題解決に向かうことが重要であると考えた。

(2) 研究の経過から

昨年度まで、「言葉を身に付け、豊かに表現する子供の育成～主体的・対話的で深い学びを目指して～」という研究主題で取り組んできた。発問を吟味したり考えさせる場面を多く作ったりすることにより、主体的に学び、自分の考えを表現できる児童が増えてきた。さらに、教師から一問一答ではない揺さぶりや問い返しの発問をすることで、児童が必要感をもって学習に取り組むようになった。そして、課題解決に向かうことが対話的活動につながり、学び合いでの効果的な思考の展開を可能にした。自分の意見が確立することで、考えを発信することに自信をもち、円滑なコミュニケーションと主体性の向上につながった。

このように、児童のコミュニケーション力や主体性の向上についての成果が見られたものの、学び合いの工夫により自分の考えを深め、課題解決に生かすところまでは及ばなかった。

そこで、研究主題「関わり合い、考えを深め、解決する子の育成」を掲げ、深い学びとして目指す姿を共有しながら課題の解決に迫りたい。今年度は３年計画の１年次として、児童が関わり合いの中から自分の考えを深め、主体的に学び合う効果的な指導について研究を進める。関わり合いの中から生まれた「問い」を学習課題につなげることで、思考の枠が広がり、お互いの意見を交流させながら課題解決力を向上させられるのではないかと考える。

昨年度までの研究成果を生かしつつ、自力解決や集団解決に見通しをもつための手立てや関わり合いの場面作りを工夫することで共通意識を高めさせ、目指す児童像に迫っていきたい。

２　研究のねらい

関わり合いの中から、考えを広げたり深めたりして、主体的に学ぶ児童を育てるための指導の在り方について算数科を中心とした授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

教師の働きかけや発問を工夫して、関わり合いの中から考えを深める授業を日常化することにより、主体的に問題解決に向かおうとする児童を育成することができる。

４　研究内容

(1) 算数科における、主体的に問題解決に向かう指導の在り方。

ア　導入場面で、問いをもたせる課題（問題）提示の工夫。

イ　問題解決へ向かうための対話的活動の工夫。

(2) 学びのわざの継続による主体的に学ぼうとする態度の育成。

(3) 学習用語の掲示など、学びの手がかりの活用や工夫。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等
６	３０	第１回授業研究　　３年２組　算数「表とグラフ」 授業者　教諭　長谷山　有也
９	２９	第２回授業研究（要請訪問）　４年２組　算数「面積」 授業者　教諭　直井　万里　　助言者：戸耒　友拓　主任指導主事

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２８	特別な配慮を要する児童の理解　　担当：本校教諭　富岡　明美
５	２６	「問題解決的な授業づくり」の研修　　講師：松橋　祐哉　主任指導主事
６	９	「食物アレルギーの緊急時の対応について」　担当：本校養護教諭　井上　佳林
６	１６	「１人１台端末の活用」の研修　　講師：石井一二三　主任指導主事
８	２５	県学習状況調査の分析・考察
９	８	「ネットいじめ」情報モラル研修　　担当：本校教諭　小堀　祐二
１１	１６	Q－U に関する研修　　講師　西白山台小学校　原　寿　校長先生
１	１２	研修報告　算数科～児童が話したくなるしかけを通して～
２	９	総合的な学習の時間報告会　（各学年より）

６　研究の成果

(1) 身近で興味がわく問題の提示や ICT の活用により、児童が自分のこととして課題を捉え、必要感をもって主体的に問題解決に向かうことができた。対話的活動では、個の考えをもたせてから対話を進めることで目的意識が明確になり、活発な話合いにつながった。

(2) 自主学習ノートや家庭学習の約束を定着させることで、その日の学びを自分の言葉で表す力が育った。振り返りを継続して書くことにより、大切なキーワードを入れたり既習事項と関連させたりしてより深い思考ができるようになった。既習事項のアウトプットが可能になり、問題解決能力が向上した。

(3) 既習事項や振り返りを生かした掲示を工夫して、全校で学習環境を整えることで、児童にとって既習内容の確認や問題解決の手がかりとして活用することができた。また、学習活動を進める際の共通のキーワードとして認識して、個々の発表や振り返り、自主学習などに取り入れる児童が増える等、学びの広がりが見られた。

７　研究の課題

(1) 課題から問いをもてたかどうか全員の把握が難しく、さらに、独自の解き方にこだわる児童もいるため、思考の共有や整理、転換、再構築等を促す働きかけを考えていかなければならない。対話的活動をより深めるために、今後は発問の工夫や揺さぶりを計画していきたい。なお、習熟度別クラスによる授業においては、クラスごとの到達点を各授業者が共通認識して、見取りや評価を行う必要がある。

(2) 学びのわざを定着させるために、全学年で取り組める内容を検討する必要がある。授業の振り返りの場面や方法、提示について共通理解し、学びのわざを充実させていく必要がある。

(3) 学習用語や言葉を正しく使い、自分の考えをまとめたり発信したりする機会を意図的に設定していく必要がある。たくさんの掲示物があることで集中できない児童もいるため、精選して学びの環境を整えていく必要がある。

（記入者　田島　結希子）

轟木小

主体的に学び合う力の育成

～複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　松橋　淳子

１　研究主題について

本校では、教育目標である「いきいき学びあう子」「なかよくふれあう子」「ほん気できたえあう子」の具現化のために、平成30年度から「主体的に課題を解決する力の育成」を研究主題とし、児童一人一人が学ぶ意欲をもち、主体的に課題を解決するための見通しのもたせ方はどのようにすればよいか、算数科において研究を進めてきた。その結果、前時の振り返りや既習事項の掲示をもとに学習問題の把握をさせ、解決方法の見通しをより明確にもたせることができた。また、解決方法を全体で確認してから自力解決させたり、共通の図を使って話し合わせたりすることは互いの考えが比較しやすくなり、共通点や相違点を共有しながら話し合うことに有効だった。しかし、自力解決の内容に個人差があり、相手に分かるように伝える技能を身につけさせることや、個々の児童の考えをつなげる教師の働きかけの仕方が課題としてあげられた。また、自ら課題意識をもち、解決していこうとする意欲や、進んで表現しようとする主体的な態度はまだ十分とはいえず，互いの考えからそれぞれの考えをさらに深めていく少人数ならではの力を高めていく必要性のあることも明らかとなった。

そこで、これまでの研究成果を生かしながら、個々の考えを深めさせるために、一人一人が自力解決する確かな力を育てたい。そのためには、基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせるとともに、習得した力を活用しながら自力解決にあたろうとする意欲や意識を育てていき、さらに、問題解決したことを相手に分かりやすく伝える力を育てていく必要があると考える。これらの取組を、見通しのもたせ方やＩＣＴを活用した教材や活動の仕方の工夫の研究を進めていくことで、「主体的に学び合う力の育成」を目指していきたいと考えた。

２　研究のねらい

一人一人が自分の考えをもち、進んで自力解決するための効果的な指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

一人一人の自力解決につながる見通しや考えをもたせる工夫をすることで，主体的に学び合う力を育てることができる。

４　研究内容

⑴　一人一人が自分の考えをもち，主体的に取り組むための工夫

ア　「やってみたい」「できそうだ」と思わせるための課題提示の工夫

イ　課題解決につながるＩＣＴの活用の工夫

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年　・　授業者　・　題材名
８	１８	第１回　指導案検討会（６年）
６	２	第１回授業研究　（６年）　授業者　教諭　中川　健郎 ６年「走り高跳び」
９	１４	八戸市教育委員会教育指導課・総合教育センター訪問
６	３０	第２回授業研究　（２・３年）授業者　教諭　高島　庸 ２年「図を使って考えよう（１）」　３年「ぼうグラフを使って」
９	１５	第３回授業研究　（１年）　授業者　教諭　山田　訓子 １年「おおきさくらべ（１）」
１０	２０	第４回授業研究　（４・５年）授業者　教諭　木村　頼子 ４年「面積の単位」　５年「平行四辺形の面積」

⑵　一般研修

月	日	内容　・　講師
４	１７	１人１台端末の研修　講師　教諭　中川　健郎
４	２８	絵を描く会のための研修「描画指導（特に初めの意欲のもたせ方）や対応の仕方」 講師　宇部　好子先生
７	１４	「１人１台端末の活用について」 講師　八戸市総合教育センター　大下　洋一　主任指導主事
８	１９	「学校における防災・減災対策～児童生徒の命を守るための環境整備～」 講師　八戸工業大学　土木建築工学科　教授　加藤　雅也先生
９	８	絵を描く会審査会の研修「自分の気に入った一点を選ぶ」　宇部　好子先生　指導
１１	２４	特別に支援を要する子の指導方法について 「つなぐ支援～今、私たちにできること～」 講師　学校心理士・特別支援教育士　青森県立八戸盲学校　教諭　三浦　亜紀先生
２	９	県学習状況調査結果の考察

６　研究の成果

⑴　比較、類推、既習事項の確認、疑問・違いのある課題や気づきを予想させる課題などの提示の工夫による課題解決の方法と活動を指導過程に位置づけることが主体的な問題解決の見通しにつながり、自力解決への意欲につながった。

⑵　児童が自分の活動を振り返ったり、全体で話し合う際に本時の視点やポイントを共有したりする場面では、児童の発達段階にそった指導の工夫ができた。

７　研究の課題

⑴　個人差が大きいので、個々の児童の実態に合わせた問題解決の見通しのもたせ方や自力解決の意欲を持続させる工夫をする必要がある。

⑵　児童の思考にそった、より主体的で効果的なＩＣＴの活用方法を研修していきたい。

（記入者　高島　庸）

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成

～数学的な見方・考え方を身に付けさせる指導を通して～

（３年計画の３年次）

校長名　　福士　良樹

１　研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、単元を通しての児童の「ゴールの姿」を明確にし、導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに取り組んだ。また、学び合いの場においての手立てとして、話合いの視点を明確にすることにも取り組んだ。

その結果、それぞれの時間に押さえるべき重点項目を俯瞰した指導が継続され、子どもたちに「数学的な見方・考え方」を身に付けさせることができた。また、課題解決へ向けた学び合いを促すために、グループやペアで説明する場を設定することが有効であることが確かめられた。

しかし、「共に学び合う具体的な姿」について共通理解できたものの、まだ一部の児童の発言に頼って授業が進んでいく場面が見られ、児童同士がよりよい課題解決に向けて話し合い、深い学びができるような授業展開を工夫していく必要性が挙げられた。また、主体的な学びの土台である各学年の基礎基本を身に付けさせるために、系統性を意識した教材研究や算数的表現力を育成することの必要性も挙げられた。

そこで今年度は、既習を活用する場面を研究授業に設定し、話合いの根拠となる材料を蓄積しながら授業づくりに励むこととした。そのために、単元や題材に関わる知識・技能、見方・考え方の明確化と整理をし、効果的な学び方に関する認知をしていく。また、発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、振り返りのさせ方を工夫したりしながら、説明する力や伝え合う力を伸ばす手立てについて研究を進めて行く。また、これまで取り組んできた導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、本校の課題を解決していく。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、振り返りのさせ方を工夫したりしながら、説明する力や伝え合う力を伸ばす手立てについて研究を進めることにより、「進んで伝え合い、共に学び合う子」の育成につながると考える。

４　研究内容

(1) 主体的な伝え合い・学び合いを支える手立てや工夫
　ア 発言をつなげるための話型やつなぎ言葉の提示
　イ 式や図の活用
　ウ 視点をもたせた振り返りのさせ方(ノート、発表など)

(2) 導入・課題提示の工夫

(3) 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
　ア ねらいや意図に添った視覚化、共有化、焦点化
　イ 活動時間の区切り、パターン化

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
6	３０	第１回授業研究（２学年）　授業者　石塚　里佳　「図を使って考えよう（1）」
9	8	第２回授業研究（３学年）　授業者　髙橋　祥子　「あまりのあるわり算」
１１	２４	第３回授業研究（５学年）　授業者　蟹沢　歩美　「割合」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
9	１５	１人１台端末活用研修 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏
１０	1	ジャムボードの活用、学級経営について 講師：八戸市立小中野小学校　教諭　佐々木　亮輔　氏
3	2	教職人生を振り返って（仮） 講師：八戸市立多賀小学校　校長　福士　良樹

６　研究の成果

(1) 発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、話合いの際に手元にカードをもたせたりすることは、話すことが苦手な児童にとって有効な手立てとなった。また、単元ごとに話合いの根拠となる材料を蓄積し、それを使って説明する時間を設定することで、進んで伝え合う力が育ってきた。

(2) 導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、児童に問いをもたせたり、必要感をもって課題に取り組ませることができた。

(3) １人１台端末活用についての研修を継続することで、日常の指導に生かしたり、今後の授業で活用したりするための基礎を学ぶことができた。

７　研究の課題

(1) よりよい課題解決に向けてペアやグループで学び合う姿が見られる一方、課題把握の場面でのつまずきや自力解決での個人差により、伝え合いに時間が多くかかって学び合いがうまく進まないという実態が明らかになった。個に応じた指導を、よりよい学び合いにつなげられるよう研究を深めていく必要がある。

(2) 学習内容や方法、次時や他教科とのつながり、友達とのかかわりなどの視点をもたせた学習の振り返りについて研究が不足していた。ねらいや課題と整合した振り返りのさせ方や、そのための十分な時間の確保について実践と検証が必要である。

（記入者　石塚　里佳）

多賀台小

自分の考えをもち、進んで表現する子の育成

～児童の思考に寄り添う授業づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　梅　内　太　郎

１　研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに　たくましく」、努力目標として「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「体をきたえる子」を掲げ、問いをもち、その解決に向けて主体的に学ぶ児童、また、自分の考えを広げたり深めたりするために、目的意識をもって対話的な学びに取り組む児童の育成を目指している。

昨年度は、「問いをもたせ、主体的に問題解決に取り組ませる課題設定や発問」「思考の流れが分かり、対話的な学びを促す板書や働きかけ」「自己の変容を自覚できるような振り返り」についての研究を進めてきた。児童の実態把握に基づいた課題設定や課題提示、発問の工夫を行い、一目見ただけで授業の流れや友達の考えが分かる板書に取り組んだことにより、児童は意欲的に学習に取り組めるようになった。しかし、対話的な学びを促す上で必要な、児童の考えを引き出したり、揺さぶったりする指導者の働きかけの工夫については課題が残った。また、振り返りを行うことの効果を実感することはできたが、継続した振り返りの時間を確保できず、効果的な振り返りの方法を確立するまでには至らなかった。

そこで、これらの成果と課題から、今年度は、「児童の思考過程を大切にした授業づくり」を土台とし、これまで以上に児童の思考に寄り添った授業づくりの研究を進めていく。まずは、児童の問いを引き出す学習課題を設定する。事前テストの結果などをとおした実態把握を基に、児童が意欲的に考えることのできる課題を提示したい。次に、児童が主体的・協働的な課題解決に取り組めるような働きかけを工夫する。児童の様子を観察し、その状態に合わせた適切な働きかけをすることによって、一斉やグループなどの形態を問わず、主体的・協働的な学びが実現できると考える。そして、児童が自己の変容に気付くことができる振り返りを工夫して行うことにより、児童の学びを深め、「わかった！できた！身についた！」を実感させたいと考える。

２　研究のねらい

児童が問題を解決する際に、児童の思考に寄り添うことを意識した授業づくりを行うことが、自分の考えをもち、進んで表現する子の育成に有効であるということを授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童の思考に寄り添う授業づくりのため、児童の問いを引き出す学習課題を設定し、児童が主体的・協働的に課題を解決できる働きかけを工夫した授業を展開する。そして、児童が自己の変容に気付くような振り返り活動を行うことにより、自分の考えをもち、進んで表現する子を育成できる。

４　研究内容

(1) 問いを引き出す学習課題の設定
(2) 主体的・協働的に課題を解決させる働きかけ
(3) 自己の変容に気付かせる振り返りの工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師
7	12	第１回授業研究（２学年）永澤　舞梨　国語「スイミー」 講師：八戸市立是川小学校　校長　佐々木　宏恵　氏
9	21	計画訪問（指導案を作成し指導していただいた。）
11	2	授業公開（１学年）児玉　友絵　国語「じどう車くらべ」
11	8	授業公開（６学年）福士　貴人　理科「てこのはたらき」
11	12	第２回授業研究（４学年）寺下　真彩子　社会「かわいた大地に水を引く」 講師：八戸市教育委員会教育指導課　主任指導主事　大野　勉　氏
11	17	授業公開（３学年）類家　直人　理科「物の重さをくらべてみよう」
12	1	授業公開（５学年）吉田　彰子　道徳「生きる力を引き出す笑い」
12	2	授業公開（すずかけ）佐々木　禅　算数「お金を工夫して代金をはらおう」
12	16	授業公開（わかば）伊藤　直子　自立活動「こんなときどうするの？」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	26	学力検査（ＣＲＴ）の分析・考察
6	22	救急救命講習 講師：日本赤十字社水上安全法指導員　南郷屋内運動場　館長　下田　尋通　氏
8	25	県学習状況調査の採点・分析・考察
9	22	基本的技能や投動作の運動についての研修 講師：本校教諭　類家　直人　　本校講師　藤井　佑太
10	13	図画工作の指導についての研修　講師：本校教頭　種子　麻佐子
10	20	１人１台端末の活用 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏
11	17	音楽の指導についての研修　講師：本校教諭　菅原　弥生

６　研究の成果

(1) 問いを引き出す課題の提示や発問の工夫をすることにより、児童は意欲的に課題に向かい主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。また、自分なりの考えをもたせてから問題解決に向かわせることができた。

(2) 「主体的・協働的な課題を解決させるための働きかけ」が意識されたことで、自分の考えを他者と比較しながら話し合う場面を設定し解決に向かわせることができた。また、ICT を活用して考えを交流し合う活動も多く見られた。

(3) 学級担任全員が研究主題に沿った提案授業を公開し、成果や課題を交流したことが、授業力の向上につながった。

７　研究の課題

(1) 主体的・協働的に課題を解決させるために対話場面を設定し、考えや意見を交流し合うことはできたが、考えを広げたり深めたりするような活動には至らなかった。深い学びを目指し、話し合う土台となる多様な考えを引き出すためのしかけや発言をつなげる指導力など、児童が対話的に学習を進めるための工夫をしていく必要がある。

(2) 主題を達成させるために、児童が自分事として課題を捉え、必要感や切実感をもって問題解決に向かうような授業改善を行い、「わかった！できた！身についた」が実感できるような授業づくりをしていく必要がある。

（記入者　児玉　友絵）

豊崎小

主体的に学びに向かう子の育成

～児童が自ら取り組む働きかけの工夫を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　町田　晋一

１　研究主題について

本校では、教育目標として「たくましく生きる子」を、学校目標として「自分の思いを大切にし、学びに向かう力をもつ子」を掲げている。この具現化のため、昨年度から研究主題を「主体的に学びに向かう子の育成」、副題を「課題意識をもち、達成感が得られる学習指導の在り方」として、授業のみの関わりだけではなく、普段から児童が課題を意識し、自分で考える習慣がつくことを大切にしながら、３年計画での研究を開始した。

昨年度は、課題提示や発問の工夫を行ったことで、児童に課題意識や見通しをもたせることができ、主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。また、対話させるねらいを指導者が明確にして、対話の内容や形態、思考の可視化に取り組んだことで、児童に自分の考えをもたせたり、理解を深めさせたりすることにつながった。そして、日常において児童に自分の考えをしっかりもたせる関わり方の共通理解を図り実践してきたことで、児童に意思決定する力の向上がみられるようになってきた。

しかし、各指導過程での「学びに向かう子」の具体的な姿が曖昧であったことが課題にあげられ、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業実践や児童に考えをもたせる教師の関わり方についてさらに研究を深める必要が出てきた。

そこで、今年度は「学び」とは「何かをできるようになることの全て」とし、「向かう力」を「指示や提案をされるのではなく、自分の意思で考え、行動に移せる力」とした。そして副題を「児童が自ら取り組む働きかけの工夫を通して」と変更した。それを受けて研究内容は授業の中で取り組むものと、各学級担任が日常の中で取り組むものとの２本の柱で行っていくこととした。授業の中で取り組むものとしては、(1) 知的好奇心を高め、考える必要感がある課題提示や発問の工夫、(2) 自分の考えをもち、深める手立ての工夫、(3) 学びを深め、次への意欲を高める振り返りの工夫とし、日常の中で取り組むものとしては、(4) 児童が自ら取り組む働きかけの研究と実践としていく。

自分の考えをもち、主体的に学びに向かう「たくましく生きる子」を目指して、研究を進めていきたい。

２　研究のねらい

主体的に学びに向かう子の育成のためには、児童が自ら取り組む働きかけを工夫することが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童が自ら取り組む働きかけの工夫を行い、日常的に自ら考えることの大切さを伝え、実践する活動を推進することによって、児童は興味・関心を高め、進んで課題を発見したり、よりよい意見や方法を考えたり、悩んだりすることの楽しさを知り、主体的に学びに向かうことができるようになると考える。

４　研究内容

(1) 知的好奇心を高め、考える必要感がある課題提示や発問の工夫
(2) 自分の考えをもち、深める手立ての工夫
(3) 学びを深め、次への意欲を高める振り返りの工夫
(4) 児童が自ら取り組む働きかけの研究と実践

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名
６	１６	第１回授業研究　４学年　国語　「一つの花」 授業者　松生　章乃
７	１４	第２回授業研究　５学年　総合的な学習の時間　「豊崎のよさを発信しよう」 授業者　花田　貴光
１０	２０	第３回授業研究　１学年　道徳　「ぼくは　いかない」 授業者　濵田　真弓
１１	１９	第４回授業研究　６学年　理科　「てこのはたらき」 授業者　木村　允一 指導助言：八戸市教育委員会　教育指導課　小野寺　良治主任指導主事
１２	８	第５回授業研究　２・３学年　道徳　「わたしの　したこと」 授業者　福田　智恵子

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
５	２６	１人１台端末活用法 講師　八戸市総合教育センター　石井一二三主任指導主事
８	２０	AED による救命講習会 講　師：尻内分遣所署員

６　研究の成果

(1) 児童の思考の流れに即しながら、興味関心を高めたり、考える必要感がある課題提示や発問の工夫を継続して行ってきたことで、主体的に課題解決に向かう姿が見られた。
(2) ねらいを明確にした、教師や児童同士の関わりを通して、内容や形態、思考の可視化に取り組んだことで、自分の考えをもち、学びに向かう力の育成につながった。
(3) 日常において、児童が自ら取り組む働きかけの研究と実践を積み重ねてきたことで、自分の考えを大切にし、行動に移せる力の向上が見られてきた。

７　研究の課題

(1) 指示や提案をされるのではなく、児童が自ら考え、行動に移せる力をより発揮できるようにしていく必要がある。自分の考えをもち、より学ぶことを楽しめるよう、課題設定の在り方や単元の見通し、児童に応じた友達との関わり方や教師の支援の仕方等について、さらに研究していきたい。

（記入者　松生　章乃）

新井田小

主体的・対話的で深い学びのできる子の育成

～問題解決的な授業展開を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　成田　　明彦

１　研究主題について

本校では、教育目標に「夢に向かい　考え　行動する子」、努力目標に「考えぬく、なかよく、がんばりぬく」、学校目標に「他者や集団との関係の中で、自分に自信をもち、生き生きと活動できる子どもの育成」を掲げている。

昨年度まで、児童の思考に沿った学習問題「問い」を生み出す工夫、その問いを共有し課題解決の「見通し」をもたせる工夫について研修を進めてきた。問いを生み出す場面では、教材を工夫したり、発問・指示を工夫したりしたことで思考のずれが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題解決に取り組む児童の姿が見られた。また、問いを共有する場面では、児童の発言や思考を板書などで可視化したことで、思考が整理され課題解決につながった。また、既習事項との関連の仕方を工夫したことで、どの児童も安心して課題解決に取り組むことができた。

その一方で、学習課題「問い」の設定に時間がかかり、自力解決の時間が十分に確保できないこと、多様な考えを認めると本時のねらいからそれてしまうこと等の課題も多数あがった。

課題はあるものの、問題解決的な学習を進めてきたことで、主体的に学習に取り組む姿勢が身についてきている。そこで、今年度も研究主題及び副題を継続し、昨年度までの研究成果を生かしつつ、課題としてあげられたことに留意しながら、問題解決的な学習の充実・改善を図っていくこととした。日常の授業実践の中で、目指す児童像の育成につなげていきたい。

２　研究のねらい

主体的に学ぶ子の育成のために、問題解決的な授業展開をどのように工夫していけばよいかを、国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業のねらいを明確にし、問題解決的な授業展開の中で様々な手立てを工夫することによって、自分の考えをもち、主体的に学ぶ子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫

ア　児童の興味・関心を高める教材を工夫する。

イ　発問・指示を工夫する。

(2) 「問い」を共有し、課題解決の見通しをもたせる工夫

ア　思考を助けるために、思考過程の可視化「見える化」をする。

イ　既習の考えを引き出しながら、考えの見通しをもたせる。

ウ　解決方法の見通しをもたせる。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
7	１４	第１回授業研究（２学年） 算数「図を使って考えよう」 授業者　教諭　近藤睦美	分からない数を□とし、問題文の順に沿ってテープ図に表すことで、加法になるか減法になるかを考えさせた。
9	1	第２回授業研究（４学年） 国語「ごんぎつね」 授業者　教諭　泉山武志	ごんはどんなきつねか「○○ぎつね」と考えさせることで、ごんの気持ちの変化を読み取らせた。
9	8	第３回授業研究（３学年） 国語「すがたをかえる大豆」 授業者　教諭　宮古和行	「問い」がないことに気づかせ、「答え」が書かれている中のまとまりから「問い」になりそうな一文を見つけさせ、「問い」につなげた。
9	２２	第４回授業研究（６学年） 算数「円の面積」 授業者　教諭　谷川泰史	３通りの式の中にある共通の数字に着目させ､隠れている既習の図形に気づかせることで、複雑な図形の解き方を考えさせた。
9	２９	第５回授業研究（１学年） 国語「うみのかくれんぼ」 授業者　教諭　佐々木広美	「場所」「体の特徴」「隠れ方」のセンテンスカードを並べ替えさせることで、生き物の体の特徴と隠れ方のつながりに気づかせた。
1	１８	第６回授業研究（５学年） 算数「速さ」 授業者　教諭　石村飛生	道のりと時間を使うと、速さを求められることに気づかせ、数をそろえるために単位量当たりの考え方を使うことで、速さを比べさせた。

(2) 一般研修

月	日	研修内容	講師
6	2	生徒指導における児童の共通理解について 特別支援教育について（授業参観・情報交換）	本校教諭　宮古和行 本校教諭　小泉由香利
6	３０	外国語教育について（授業参観・講話）	本校教諭　小橋共絵 三浦祐子
8	２０	１人１台端末の活用について（演習・講話）	総合教育センター 主任指導主事　石井一二三
1	１２	算数科における授業づくり（演習・講話）	初任者指導教官　峯明紀
2	１６	学年研修報告会	各学年の授業者

６　研究の成果

(1) 「問いを生み出す工夫」では、興味関心を引く教材を工夫したり、ゆさぶりの発問を工夫したりすることで、子ども達の思考のズレが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題に取り組む児童が増えた。

(2) 「見通しをもたせる工夫」では、既習事項を効果的に活用したことで、問いの焦点化を図ることができた。また、見通しをもたせたことで、低位の子も問いを共有し、学習課題に向かうことができた。

７　研究の課題

(1) 課題解決の見通しを子ども達が自力で導き出すのは難しく、教師主導になりすぎたり、見通し待ちの子がいたりする傾向が見られた。教師は手立てを多数準備しながら、児童の実態や反応に合わせて、与える内容や量を精査する必要がある。

(2) 「問い」を生み出す時間、自力解決の時間、練り合いの時間、振り返りの時間のバランスが難しい。発問・指示を吟味したり、意図的な指名をしたり、与える教材を精選したりしながら、問題解決的な学習をこれからも進めていきたい。　（記入者　横沢　深雪）

旭ヶ丘小

関わり合いながら　深く考える子の育成

～対話的な授業づくりを通して～

（２年計画の１年次）

校長名　　中奥　尚子

１　研究主題について

⑴　主題設定の理由

本校は教育目標を「生き生きと　心も体もたくましく」と定め、子どもの明るい声が響き、学力・思いやりの心・体力・生活力を確実に育てる学校を目指している。教育目標、これまでの研究経過と、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点を踏まえ、研究主題を「関わり合いながら　深く考える子の育成」と設定した。

昨年度は「対話」を子ども同士の話合いだけではなく、自分の思考の過程を問い直す「自己内対話」、教材と向き合い、解釈しながら粘り強く取り組む「教材との対話」と捉え、「深く考える」ことに結びつく授業の在り方を探った。今年度はこれまで推進してきた問題解決的な学習の「問いの共有」を「思考のズレ」と重ね合わせ、授業の導入をより重点化した。「～しよう」という課せられた問題ではなく、「～はどうすればよいか」などといった、児童の思考を表した学習問題を意識し、授業研究・個人研修を通して研究のさらなる推進に努めた。

⑵　これまでの研究内容の推移

ア　令和２年度の実践研究の成果から

感染症対応の授業の中でも、対話を「自己内対話」「教材との対話」と捉え、自分の考えを再構築する授業を構成することによって、深い学びにつなげることができた。また、振り返りの観点をはっきりさせ、「まとめ」と区別することよって、子どもたちが自分の学びを振り返り、理解を深めたり、計画・調整して次の自分の学びにつなげたりする様子が見られるようになってきた。また、アンガーマネジメント研修やQ-Uの分析を一般研修として盛り込み、全校で取り組んだことによって、子どもたち同士の関係づくり、学級づくり、学習の中での認め合いにつながった。

イ　令和２年度の課題から

対話を含め、子どもたちの考えをより深めるための教師の関わりや課題設定、見通しのもたせ方について、今後の授業研究の中でより明らかにしていく必要がある。また、１人１台端末の活用など、ＩＣＴの授業での活用や、情報を活用して主体的に学習を進めていくための資質・能力を身に付けさせるための研修をさらに推進していく必要がある。

２　研究のねらい

問題や他者との関わりの中で子どもたちが思考し、学びを深めるための授業の在り方や指導方法について授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童の追究意欲を喚起する課題を設定し、対話を通して解決しようと取り組ませることにより、深く思考する力を伸ばすことができると考える。

４　研究内容

⑴　研究仮説を検証するための視点について授業の中で実践する。

ア　視点１：子どもたちの解いてみたいという願いと教科・教材の目標を踏まえた学習課題になっているか。

イ　視点２：思考力・判断力・表現力につながる言語活動を意識した授業になっているか。

ウ　視点３：対話による子どもたちの思考の過程を大切にする授業の流れになっているか。

エ　視点４：子どもたちが身に付いたと実感できる振り返りの場を設定しているか。

⑵　学習課題の吟味・焦点化を図ることで、主体的に課題を解決する学習の充実を目指す。

⑶　個人研修による授業公開を推進する。

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・授業の概要
7	5	教育指導課・センター訪問（計画訪問）授業研究（要請訪問） ２年　乙山百恵　体育「マットを使った運動遊び」　講師：教育指導課　主任指導主事　竹井　亮　氏 コースを選択し、様々な動きを試す活動を通して、挑戦したい運動を考えて選ぶ授業
10	5	個人研修４年（初任者研修）花田杏野　国語「ごんぎつね」叙述をもとにごんと兵十の心の距離を考える授業
10	27	個人研修５年　久田麻子　特別活動「５の１オリンピックをしよう」学級目標達成のための工夫について話し合う授業
10	28	個人研修３年　井畑英夫　社会科「店ではたらく人」消費者の願いに合わせた販売者の工夫について理解する授業
11	5	授業研究５年（録画・視聴）　福田陽奈　道徳科「本当の自由とは」　講師：桔梗野小学校　校長　吉田　朝子　氏 ２つの「自由」の捉え方を比較し、話し合う活動を通して、自由に伴う自立や責任について考える授業
11	8	個人研修１年　下野由佳子 国語「じどう車くらべ」提示された絵と文章を結びつけ、意味段落を捉える授業
11	11	個人研修３年　竹高のどか 外国語活動「This is for you.」必要な表現を用いて持っているカードを尋ね合う授業
11	15	個人研修１年　髙橋園生　算数「かたちづくり」シルエットに当てはまる形と並べ方を探り、形について捉える授業
11	17	要請訪問４年　下村亘　社会科「ひなん所シミュレーション」　講師：教育指導課　主任指導主事　大野　勉　氏 避難所運営の疑似体験を通して、多様な人への理解を深め、自助・共助の意識を高める授業
11	26	個人研修２年　南舘尚子　算数「かけ算」同じ数のまとまりに着目し、かけ算を用いて数を求める授業
12	8	個人研修のぞみ学級　長尾康子　自立活動「気持ちをうまく伝えるためには」 いろいろな言い方を試す中で、正しく気持ちを伝えるために言葉が必要なことを考える授業
12	9	個人研修専科　佐々木新樹　理科「電気とわたしたちのくらし」 電熱線の実験を通して、電気の熱変換など、多様な利用について考える授業
12	10	個人研修かがやき学級　熊谷恵美子　国語「冬の言葉」冬に関する言葉を集めたり、文章を作ったりする授業
12	16	個人研修６年　市村徳子　社会科「世界に歩みだした日本」不平等条約改正に向けた日本の姿勢について考える授業

(2) 一般研修

月	日	研　修　内　容・講　師
5	27	個別の指導計画の作成：本校　教諭　長尾　康子
6	2	１人１台端末活用①：本校　教諭　下村　亘、市村　徳子
8	20	体育科　体力向上を意識した体育科授業：長者小学校　校長　島浦　靖　氏
8	23	１人１台端末活用②：是川小学校　教諭　佐々木　俊介　氏
9	2	Q-U の理解と活用：弘前大学教職大学院　准教授　吉原　寛　氏
9	22	アンガーマネジメント・ソーシャルスキルトレーニング：本校　校長　中奥　尚子
12	15	１人１台端末活用③：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏

6　研究の成果

(1)「問いの共有～自力試行～学び合い～振り返り」というプロセスを共通理解し、授業研究・個人研修によって多様な教科・領域の中で問題解決的な学習を進めることで、本校の目指す「関わり合いながら深く考える子の育成」に迫ることができた。特に、「自己内対話」「教材との対話」を進めるため、「思考のズレ」を起こすような学習問題の設定を全校で意識して進めることができた。そのことが子どもたちの追究意欲につながり、思考しようとする態度、考えの変容を自覚した振り返りに表れるようになった。

(2) １人１台端末についての研修を重点的に行うことによって、ストリームや Jamboard の活用など、学年の発達段階に応じた日常的な活用がなされるようになった。

7　研究の課題

(1) 子どもたち一人一人の考えを引き出し、考えを再構築させるための発問や問い返しの仕方など、対話を進めていくための教師の役割について継続して検討していく必要がある。

(2) １人１台端末の活用など、どうすればＩＣＴを効果的に使用できるのか、教師が授業の中で活用方法を選択・判断し、資質・能力を身に付けさせるための研修をさらに推進していく必要がある。

（記入者　下村　亘）

南郷小

自ら考え、進んで表現する児童の育成
～話す・聞く・話し合う力を育てる授業づくり～

（３年計画の３年次）

校長　乗松　朋博

１　研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「すすんで学習する子（知）」を掲げ、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指している。また、学校目標を「学びに向かう力、思いを伝える力の育成」とし、基礎学力の定着を土台にしながら、主体的に学ぶ力や表現力を身に付けさせることを目標としている。

昨年度の研究では、算数科の授業実践において、発達段階に応じた課題設定や課題提示（ＩＣＴ機器を活用した「見える化」）、発問などの工夫によって、児童が課題意識をもって進んで学習に取り組むことができた。また、必要な場面で効果的な数学的活動を取り入れることで、問題解決の仕方を一人一人に身に付けさせることができた。

令和２年度のＣＲＴ学力検査における算数科の結果では、どの学年もおおむね全国比を上回っており、観点別では、「主体的に取り組む態度」が一番高い得点率を示し、児童の学習への関心・意欲の高さがうかがえた。しかし、「思考・判断・表現」に関わる問題の得点率は他教科よりも低く、物事を筋道立てて考えたり、自分の考えを整理したり、分かりやすく説明したりする力が十分に身に付いていないことが分かった。

そこで、今年度は、昨年度十分に行えなかった「交流活動」を充実させ、話す・聞く・話し合う活動を軸とした表現力の育成に力を入れたいと考え、本主題・副題を設定した。まず、表現するための準備段階として、数学的活動を効果的に取り入れ、児童一人一人に考えを十分にもたせたい。更に、「学び合うための学習ルール（話し方・聞き方・話し合い方）」の習慣化を図りながら、双方向に働く交流活動を行い、友達と考えをつないだり深めたりする楽しさを味わわせたい。このように、児童が自分の考えを明確にし、伝える大切さや表現する楽しさを実感することで、主体的に学ぶ児童を育成できると考える。

２　研究のねらい

主体的に学び、進んで表現する児童の育成を図るための授業づくりの在り方について、算数科の授業を通して明らかにする。

３　研究仮説

算数科の授業において、一人一人が課題意識をもって学習に取り組み、考えをもつための指導を工夫し、「話す・聞く・話し合う」の習慣化を図りながら交流活動を展開させることで、自ら考え、進んで表現する児童を育成することができる。

４　研究内容

(1) 考えを明確にするための手立て

ア　言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いて、自分の考えを整理し明確にするための活動や場の設定、指導の工夫。

(2) 考えを交流させるための手立て

ア　「学び合うための学習ルール」を基本とした話し方や聞き方・話し合い方の習慣化。

イ　目的を明確にした交流活動の工夫。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・授業の概要
６	３０	第１回授業研究（２学年） 授業者：教諭　石木田 美保子（Ｔ１）、講師　上田 公子（Ｔ２） 題材名「１０００未満の数の表し方」 (授業の概要) 生活に身近な買い物の場面を問題として取り上げることで、児童は興味をもって学習に取り組むことができた。また、児童に答えを選択させることで全員が自分の立場をはっきりさせ、根拠を明らかにしながら話そうとする意欲にもつながった。更に、３人一組になり、売る人、買う人、見守り役を交代しながら「買い物ゲーム」を行うことで、分かりやすく話したり、大事なことを落とさずに聞いたりする力につなげることができた。
７	１４	第２回授業研究（４学年） 授業者：教諭　渡邊　尚美（Ｔ１）、講師　上田 公子（Ｔ２） 題材名「小数の大小」 (授業の概要) 本時の問題に入る前に、復習や練習問題を繰り返し行い、解き方のパターンを確認することで、児童は見通しと自信をもって課題に取り組み、進んで考えることができた。また、自力解決の場面で、解決方法２つに絞り、選択して考えさせたことで、同じ答えでも多様な考え方があることに気付かせることができた。
１１	１５	第３回授業研究（５学年） 授業者：教諭　工藤　真子　題材名「高さが外にある三角形の求積の仕方」 指導助言：総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉 先生 (授業の概要) 自力解決の前に課題解決の方法について全体で考えさせ、その中から自分が解けそうな方法を選択させたことで、児童は、見通しをもって学習に取り組むことができた。また、同じ方法で解いた人同士でグループを作り、決められた３つの条件（算数用語）を使って説明させたことで、児童が相手意識をもち、進んで交流することにつながった。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師
４	３０	特別な支援を要する児童の共通理解のための研修
７	１２	一人一台端末に関する研修
８	２０	プログラミング教育に関する研修
１１	２４	ＪＳ研修会（授業公開）
１２	１	特別支援教育に関する研修(あおぞら学級、わかくさ学級授業公開)
２	１６	研修報告会、生活科・総合的な学習年間指導計画の修正

６　研究の成果

(1) 場面に応じて教師が様々なしかけを準備することで、児童は進んで考えることができるようになった。また、赤白帽子やネームプレートを使うことで個々の立ち位置が明確になり、「自分の考えを伝えたい。」「友達の考えを聞いてみたい。」という表現意欲につながった。

(2) 答えの選択肢や考える方法の選択肢を与えたことで自分の考えに自信がもてない児童に見通しや安心感をもたせることができた。これは、本校児童の実態に適した手立てであった。

(3) 児童の発達段階や単元の特性に応じて、交流活動の形態や方法を工夫することで、児童の話し方や伝え方に成長が見られた。周りと確かめ合いながら、安心感と自信をもって取り組む児童が増えた。

７　研究の課題

(1) 表現意欲や表現力にはまだまだ個人差が見られる。今後は、個人差を縮めながら、どの教科や場面においても自分の考えを伝えられるような児童の育成を目指していきたい。

（記入者　石木田　美保子）

島守小

主体的に学び合う子どもの育成

（３年計画の２年次）

校長　日山　寿康

１　研究主題について

昨年度は、研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」として研究実践を通して研究を進め、次のような成果が得られた。

① 課題提示の場面において、挿絵を使って前時との違いに目を向けさせて考えさせたり、説明の場面においては、定型文やキーワードを用いて説明させたりすることで、子ども同士が積極的に関わり合い、意欲的に学習に向かうことができるようになった。

② 学びを振り返る活動に継続して取り組んだ結果、単元を通して課題意識をもって学習に取り組む子どもが見られるようになった。また、自分の考えの変容について振り返ったり、自分と友達の考えを比較して振り返ったりして、次への意欲につながる振り返りができる子が増えてきた。

一方、課題として次のようなことが挙げられた。

① 完全複式になることを見据え、学年が上がってもスムーズに学習を進められるように、昨年度の研究内容にあった「複式授業の手順」「学習形態の工夫」「ガイド学習の仕方」「ノートの使い方」「振り返りの仕方」などについて学年に応じた段階を具体的に提示するための実践やまとめが必要である。

② 主体的な学びにつながる手立てとして「一人一台端末」の有効な活用方法について研究していく必要がある。

そこで、今年度は昨年度の研究を受け、主体的な学びをより深い学びにつなげていくための振り返りの仕方や複式指導の授業の工夫について研究していく。今年度から完全複式となったことにより、低学年から発達段階に応じたリーダー学習の進め方を身に付けさせ、特に間接指導時の学習を充実させていく必要がある。そこで、一人一台端末を効果的に利用したり、ティーム・ティーチングを工夫したりすることにより、基礎・基本の確実な定着を図ることができると考える。そして、身に付けた基礎学力を軸に新しい学習へと取り組ませていく中で、学習の理解度や考えの変容とその理由、原因、きっかけ等について振り返らせていく。そうすることにより、子どもの次の学びへ対する意欲が高まり、新たな問いが生まれ、学びが深まっていくと考える。

以上のことから、基礎・基本を確実に定着させるとともに、学びへの意欲を高め、学びを深める学習指導のあり方を研究することで、主体的に学び合う子どもの育成につながると考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

基礎・基本を確実に定着させるとともに、学びへの意欲を高め、学びを深めさせる学習指導のあり方を、算数科の指導を通して明らかにする。

３　研究仮説

複式授業における一人一台端末の利用や、ティーム・ティーチングの工夫により、基礎・基本の確実な定着を図るとともに、学びへの意欲を高め、学びを深める効果的な学習指導をすることで、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 基礎・基本を確実に定着させる複式指導のあり方

ア 学年に応じた学習手順の工夫、学習リーダーの育成

イ 一人一台端末の利用のさせ方

ウ ティーム・ティーチングの工夫

(2) 意欲を向上させ、学びを深める振り返りのさせ方の工夫

ア 次の学習へとつながる振り返りの内容

イ 振り返りを次の学習へ生かす手立て

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業の概要
９	２２	第１回授業研究 第５・６学年　授業者：髙島　正成 題材名　５学年『分数のたし算・ひき算』　６学年『比を使った問題』
１１	１	第２回授業研究（要請訪問） 第１・２学年　授業者：大山　美江 題材名　１学年『ひきざん(2)』　２学年『かけざん(2)』
１２	２１	自主公開授業研究 第３・４学年　授業者：佐々木　耕造 題材名　３学年『間の数』　４学年『小数のかけ算やわり算』

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
７	７	１人１台端末活用に関しての研修会 講師　八戸市総合教育センター主任指導主事　石井　一二三先生
７	１４	１人１台端末活用に関しての研修会 講師　八戸市総合教育センター主任指導主事　石井　一二三先生
１１	１７	AED 講習会 講師　八戸消防署　南郷分遣所

６　研究の成果

(1) 導入時や終末時などの間接指導にあたる時間を中心に、どの学年でも学習リーダーの指示のもと、一人一台端末を利用する授業に取り組んできた。その結果、一人一人のペースに合わせて習熟の時間を確保することにつながり、基礎・基本の定着が図られた。

(2) 振り返る場面で、授業中の児童の様子や習熟の時間をもとに振り返る視点を与えて書かせるようにした。その結果、わかったこと、わからなかったことだけではなく、本時の学習を理由づけながら振り返るようになり、次の学習へ向けて意欲を高める児童が見られるようになった。

７　今後の課題

(1) 複式の授業において個人差に対応した学習指導を進めるためには、学習リーダー以外の児童にも見通しをもって授業に取り組ませることが必要である。次年度はリーダーの育成とともにリーダー以外の児童の学び方についても共通理解し、取り組んでいきたい。

(2) 深い学びに向けて、児童一人一人の振り返りの内容を充実させるためには、つまずきの原因や、見方、考え方の違いを共有する必要がある。そのために、複式であっても児童の考えの変化に気づけるような同時間接指導の導入などを視野に授業展開の工夫を図っていきたい。

（記入者　大山　美江）

令和３年度

中学校

１	第　一	８	白　銀	１５	北　稜	２２	東
２	第　二	９	白銀南	１６	是　川	２３	中　沢
３	第　三	１０	鮫	１７	三　条	２４	島　守
４	長　者	１１	南　浜	１８	明　治		
５	小中野	１２	根　城	１９	市　川		
６	江　陽	１３	白山台	２０	豊　崎		
７	湊	１４	下　長	２１	大　館		

第一中

主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成

～言語活動の充実を図る工夫を通して～

（３年計画の２年次）

校長名　　佐々木　敏文

１　研究主題について

昨年度の研究の成果として、次のようなことが挙げられる。
○授業でＩＣＴ機器を活用することが生徒の興味を引く取組となり、学習内容の定着につながっている。
○グループ、ペアでの活動、教え合い活動など、学習形態の工夫を図ったことが主体的な学びにつながってきている。
○調べ学習の場面を設定することで、深く学ぼうとする姿勢が見られるようになってきた。
○振り返りの時間を設定することで、達成感をもたせたり自分の進歩に気付かせることができた。

研究の課題として、次のようなことが挙げられる。
●振り返りの時間を設定したことは前述の成果を感じさせた。しかし、振り返りの方法の工夫や振り返りシートの改善、そして継続性をもたせていくことはこれからの課題である。
●視聴覚機器の一層の活用が課題である。タブレットを用いるなど、ＩＣＴの活用を主体的で深い学びにつなげていきたい。
●言語活動充実のため、学習形態の工夫が必要である。じっくりと考えたり互いの意見を交換できる学習形態の工夫を行ったりしていきたい。それを、対話的な学びの高まりにつなげたい。

昨年度より設定してきた研究主題のもと、「主体的・対話的で深い学び」、「言語活動の充実」を目指しての取組を実践してきた。成果も見いだせているが、各教科、領域とも一年間の取組から、実践方法の改善や研究継続が必要であると認識している。
八戸市の学校教育指導の方針と重点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に一層迫っていくために、今年度も昨年度の研究主題を継続することとした。

２　研究のねらい

言語活動の充実を図りながら、「まとめ振り返る学習」、「協働して問題を解決する学習」を設定し、その実践を通して、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現することにつながることを明確にする。

３　研究仮説

問題の解き方や考え方を自分の言葉や専門用語を使って説明したり、まとめたりする力や、コミュニケーション力を高めるような言語活動を充実させることで、物事を多面的・多角的に捉えることができ、深い学びにつなげることができる。

４　研究内容

(1) 毎時間または単元ごとなど内容や時間のまとまりを見通しながら、学習したことをまとめたり振り返ったりすることで、次の学習につなげていく工夫をする。

(2) 生徒同士の協働により、問題解決をする場面の設定の工夫をする。

(3) 知識を相互に関連付けて、理解を深める課題設定の工夫をする。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等
５	１２	計画訪問（教育指導課・総合教育センター）
７	１	授業参観月間（７／１～２１） ・「アイディア、流れ、まとめ及び振り返り、問題解決場面、課題設定、特別支援教育の視点、授業のねらいの明確化、学習の流れがわかる板書の工夫」を視点に、各教科部会で授業を互いに参観した。
１０	４	授業参観月間（１０／４～１１／３０）　・７月と同じ観点で参観し合った。
１	７	授業参観月間をもとにした話し合い ・授業参観月間で提出された「授業参観シート」をもとに、各教科部会で参考になった点や校内研主題に迫る取組について、協議と発表を行った。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２	校内研修 ・研究主題と研究計画について共通理解を図った。また、「観点別評価」と「学習の手引き：学習の仕方」について確認や検討を各教科で行った。
４	５	校内研修　・教科ごとの経営方針と年間計画について各教科で検討した。
５	２６	校内研修（ＮＲＴ分析、「研修主任連絡会」からの伝達） ・各教科からのＮＲＴ分析結果の発表、そして研修主任より「研修主任連絡会」で指導主事より話された内容の伝達を行った。
７	１	指導課・総合教育センター要請訪問（一般研修等支援） ・「１人１台端末の活用について」（オンライン） 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一　先生
８	１１	校内研修（令和３年度青森県教育課程地区研修会） ・教科ごとに分かれて、資料の読み合わせや検討、意見交換を行った。
８	１８	ジョイントスクール合同研修会 ・「通常学級における支援が必要な子への理解と支援」 講師　青森県発達支援センター「Doors」　センター長　分枝　篤史　氏
９	１５	校内研修　・ジョイントスクールアンケート結果と考察の伝達
１	２６	校内研修　※新型ウィルス感染拡大防止のため延期（評価に関する講演）

６　研究の成果

(1) 学び合いや話合い活動の場面を取り入れることで、自ら学ぶ姿勢を育成したり、自分の考えを深めさせることができた。
(2) 振り返りの時間を設けることで、生徒の学習目標への到達状況を把握したり、また、生徒に自らの進歩や課題に気付かせることができた。
(3) ジョイントスクールでは、小中３校で「学習課題設定」や「授業の流れがわかる板書」の工夫に取り組み、３校の共通事項である「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」を多く実践することができた。

７　研究の課題

(1)　ＩＣＴ機器をペア・グループ活動に効果的に活用し、それを「深い学びを実現する生徒の育成」につなげていきたい。
(2)　生徒が自ら課題を探究し、自分の言葉で表現する力を高める課題設定を工夫していきたい。更に、生徒が自分の変容を感じられる振り返りや評価の在り方も探っていきたい。
(3)　コロナ禍の中、行事や特別活動の制限があり、絆づくりに向けて工夫が必要である。

（記入者　　山田　勝司）

第二中

見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成

～特別支援教育の視点を生かして～

（３年計画の３年次）

校長　　管　　宏

１　研究主題について

昨年度は、「見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成」を研究主題、副題として「特別支援教育の視点を生かして」のもと、全教職員が「授業のユニバーサルデザイン」の内容を共通理解し、研修・実践を行った。その結果として、どの教科でも安心して授業に臨み、基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて取り組ませることができた。

昨年度は、グループ学習やペア学習等での話合い活動に積極的に取り組ませることで、個々の意見がグループや学級の中で共有され、理解が深まり、課題解決に向けて主体的に学ぶ生徒が育成されるのではないかと考えた。ところが、コロナ禍で話合い活動を自粛せざるを得ない状況になり、十分に研修を進めることができなかった。そこで今年度は、生徒の一人一台端末を活用しながら、課題解決に向けて主体的に学ぶ生徒の育成を目指したいと考え、研究主題を設定した。

２　研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、特別支援教育の視点を生かしながら、一人一台端末の活用を取り入れた授業を実践することで、主体的に学ぶ生徒の育成につながることを明らかにする。

３　研究仮説

授業における適切な支援を「①見やすい板書・構造化された板書、②ねらいや授業の見通しの明確化、③目で見てわかる手がかりの活用」の三つに絞ることにより、全教職員が共有し、実践することで成果をあげてきた。これまでの取組を継続して、見通しをもった授業の実践研究を続けるとともに、今年度はさらに、デジタル教科書や一人一台端末を活用しながら、学習活動について生徒自らが探究し、互いの考えを伝え合う活動等を取り入れることによって、主体的に学習に取り組む生徒を育成することができる。

４　研究内容

(1)「授業のユニバーサルデザイン」について研修し、具体的な取組について共通理解をする。

(2) 一人一台端末の活用を通した授業実践と、互いの実践について学び合うための授業参観や研究協議を行う。

(3) 生徒理解や授業改善のために、外部講師（八戸学院短期大学野口和也氏）をお招きし、研修する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月日	授　業　等	全　体　会　等
５月１７日	教育指導課・センター計画訪問 ・校内研究主題の「見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成」～特別支援教育の視点を生かして～のもと、①見やすい構造化された板書、②ねらいや授業の見通しの明確化、③教材の視覚化等の観点を意識した授業実践	
７月５日～ １６日	・授業参観週間 （共有化） ・話合いがどのように手立てでなされているか。 ・個々の意見が班や学級の中で共有化されているか。 （明確化・焦点化） ・授業のねらいや見通しが明示されているか。 （視覚化） ・目で見てわかる手がかりが掲示されているか。 （その他） ・個別指導のための意図的な机間指導 ・肯定的な評価 ・振り返りシートの活用	
各学期	・ユニバーサルデザインの授業実践 ・授業の原則 10 か条を意識した授業実践とその振り返り ① 趣意説明の原則　⑥ 細分化の原則 ② 一時一事の原則　⑦ 空白禁止の原則 ③ 簡明の原則　⑧ 確認の原則 ④ 全員の原則　⑨ 個別評定の原則 ⑤ 所持物の原則　⑩ 激励の原則	
１０月１３日	・初任者研修　教科研究授業（数学）　授業者　佐藤花純教諭 「比例と反比例」	
１月１９日	・初任者研修　道徳研究授業　授業者　佐藤花純教諭 「夢をあきらめない」―「ねぶた師」北村麻子 〈内容項目 A-(4) 希望と勇気、克己と強い意志〉	
２月１６日	・まとめと次年度の方針	

(2) 一般研修

月日	内容・講師・概要等
４月　２日	校内研修（研究主題について） 「見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成」 ～特別支援教育の視点を生かして～（３年次計画の３年次）についての共通理解 ・授業のユニバーサルデザインによる授業改善項目の共通理解全体会 ・生徒指導情報交換
５月１７日	校内研修（出前講座） 「指導と評価の一体化について」 講師：八戸市教育委員会教育指導課 副参事（実践グループリーダー）兼主任指導主事　日向端　聖氏 ・学習指導要領について内容構成と考え方を理解。 ・学習評価の意義を確認。 ・上記を踏まえて、今後の取り組む方向性を確認。
７月１５日 ８月　４日 ８月　６日 12 月 23 日	校内研修（スクリーニングと生徒理解） 「特別支援教育の視点での専門家によるスクリーニングと担当教員への指導・助言」 講師：八戸学院大学短期大学部 教授　野口　和也　氏 ・本校全生徒のスクリーニング ・スクリーニングに基づく特別支援を要する生徒についての担当教職への指導・助言 ・指導が困難な生徒、困り感が強い生徒についてのケース会議 ・本校の特別支援教育の体制・方向性について管理職への指導
８月２０日	校内研修（一人一段端末への対応） 「一人一台端末」オンライン研修 講師：八戸市総合教育センター主任指導主事　　大下洋一氏 ・八戸版　ＩＣＴの学びへの共有（考えの共有・meet） ・授業での活用事例　Jamboard，スプレッドシート、ドライブの共有

６　研究の成果

(1) 授業のユニバーサルデザイン

今年度は、校内研究主題「見通しをもち、主体的に学ぶ生徒の育成」～特別支援教育の視点を生かして～」の３年次として授業実践に取り組んだ。教師、生徒ともに見通しをもった授業の実践、主体的に学ぶ姿勢を向上させるために問い・学習課題の設定、終末での振り返り・指導と評価の一

体化の実施に力を入れた。現在、ほとんどの授業で、デジタル教科書、ICT 機器を使っており、授業のユニバーサルデザイン化も進んだ。

(2) 一人一台端末の活用を通した授業実践

出前講座「指導と評価の一体化」、オンライン研修「一人一台端末研修」で学んだ事を踏まえ、全教職員が校内研究主題を意識し、授業実践に取り組むことができた。

また、夏休み中にオンライン授業への対応のための研修を実施したところ、時をおかず 8 月下旬の急激な感染拡大に伴い実践の必要に迫られ、急速に教職員の意識・技能が高まった。Meet での授業配信や動画投稿の課題などを行った。生徒会執行部による全校アンケートにも使用され、効果的なタブレット活用の可能性が確認できた。

(3) 特別支援教育の視点を生かした生徒理解や授業改善

スクリーニングやケース会議等を通して、教職員が特別支援教育についての視点を獲得し、生徒理解が深まったことにより、生徒の不適切行動が減り、学習に対する意欲、集団への適応が徐徐に見られるようになってきた。

7　研究の課題

(1) 学習指導要領と学習評価について、まだ各教科の改善が十分ではないと感じている。授業作り、定期考査を含めた評価、家庭学習など、指導と評価の一体化に向けて、見直していかなければならない点が挙げられる。

(2) Chromebook の使い方に詳しい教員に、質問などが集まりがちであり、負担が増える傾向がある。また、教室で活用したいと思う教員の中には、予期せぬハプニング等に対応できる自信がないなどの理由で、積極的に使用しない現状がある。

(3) 一人一台端末使用に関わる約束事や、端末の管理の仕方について、教員間で充分に共有、確認ができないまま使い出したので、教員の間で疑問や心配の声があがった。

（記入者　大越宏子）

第三中

意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成

～「共有化」を意識した授業づくりを通して～

（３年計画の２年次）

校長　　前田　篤志

１　研究主題について

昨年度は「共有化を意識した授業づくり」を重点施策に掲げて取り組んできたが、コロナ禍において、どのように生徒同士のやり取りをしたり伝えあったりする場面を設定していくか、今後も模索していく必要があるという課題が挙げられた。その方法の一つとして、昨年度から導入された一人一台端末の活用方法についての研修を求める声も多い。

また、今年度から新学習指導要領が全面実施となり、問題解決的な学習を推進したり、３観点における評価について学んだりする必要がある。

本校生徒は、素直でまじめな生徒が多く、授業での学習態度はおおむね良好である。教師の説明を聞いたり与えられた課題を頑張ったりする受動的な学習には集中して取り組める生徒が多い反面、自分の意見を話すなど表現することが苦手な生徒も少なくない。

これらの現状を踏まえて、今年度の学校目標を「互いに認め合い、高めあえる生徒の育成」とし、重点施策を「＜共有化を意識した授業づくり＞友と学ぶ喜びをもって学習に取り組み、将来の目標に向かって努力する生徒」と設定した。自分の考えやわかったことについて仲間と交流する場面を意図的に設定することで、学びが深まるだけでなく、学習内容の一層の定着が期待される。さらには、探求的な学びや諸活動への意欲につなげていきたいと考え、上記主題を設定した。

２　研究のねらい

「共有化」を意識した場面を授業に意図的に取り入れる研究を通して、意欲的に学び、友と高めあう生徒の育成を図る。

３　研究仮説

(1) これまでの「焦点化・視覚化」の取組を全員で継続することで、「わかった！できた！身についた！」を実感させる授業づくりが進み、生徒一人一人が興味をもって主体的に授業に臨むようになる。

(2) 「共有化」を意識した場面を授業に取り入れることで、学びが深まるとともに学習内容の一層の定着が図られ、さらに探求的な学びへとつなげることができる。

４　研究内容

(1) 授業づくりの共通の取組として以下のことを職員間で共通理解する。

ア　本時のねらいを焦点化し、それを黒板の決まった場所に生徒に明示することにより、生徒が学習の見通しをもてるようにする。

イ　課題解決や振り返りの場面において、話合い活動等の「共有化」を意識した活動を取り入れる。

(2) 授業参観月間を設定して教員が互いの授業を公開し合い、「共有化」を有効に取り入れる授業改善を行う。

(3) 教科部会を設定して評価について話し合い、意欲的に学ぶ授業づくりにつなげる。

(4) 外部講師を招き、支援の必要な生徒への手立てについて学ぶ機会を設ける。

(5) 一人一台端末を「伝え合う、共有化」の手段として活用できるよう、研修の場を設ける。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	教科・授業者等
5	11	八戸市教育委員会教育指導課計画訪問
5	28	授業参観研修(小・中ジョイントスクール推進事業) ※中学校授業公開
11	26	授業参観研修(小・中ジョイントスクール推進事業)

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	21	特別支援教育に関しての研修 講師:本校通級学級・支援学級担当者
5	12	新学習指導要領・評価規準についての研修
8	19	『1人１台端末を活用した授業づくり』研修 講師:八戸市総合教育センター主任指導主事　石井一二三氏
10	13	1人１台端末の活用についての研修

６　研究の成果

(1) １人１台端末の利用について

①講師に依頼してリモートで研修することで、端末の基本的な操作方法やリモート研修の行い方について知ることができた。昨年度からの引き続きの研修を通して、操作方法についてより理解し、授業での「共有化」の場面においてどのように活用するかについて、考えを深めることができたと感じる。

②授業や家庭で端末を利用する際のルール等について、校内研修で時間を設けて話し合った。授業や家庭において、「タブレットを用いた課題を設けること」について、その意義等について考えを深めたり、適正なルールを決定したりすることができた。

(2) 新学習指導要領における評価規準について、全体で趣旨を再確認した上で各教科で話し合い、発表しあった。そのことで、３観点での評価をどのようにするかについて具体的なイメージがもて、授業づくりにもつながった。また、タブレットを用いて研修をすることで、これまであまりタブレットを使用してこなかった教員にも基本的な操作をする機会となった。

７　研究の課題

(1) 今年度は、タブレットを用いた授業づくりについて主に研修を重ねたが、基本的な操作方法から発展して、より「共有化」に特化した場面の設定等を研究していきたい。

(2) 支援の必要な生徒について、今年度も実施できなかった「講師を招いての研修」への希望が多い。

（記入者　　佐々木　京）

長者中

主体的に学び、自己の生き方を探究する生徒の育成

～「学ぶ意義」を意識した授業づくりと学習習慣の関連を通して～

（３年計画の２年次）

校長　西　山　康　巳

１　研究主題について

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等による社会の急速な変化のもと、今を生きる中学生は、これから厳しい挑戦の時代をたくましく生きることが求められている。本校では、変化の激しい時代を生きるために、キャリア教育の視点を生かし、基礎的・汎用的能力の育成を意識することが重要であると考えた。基礎的・汎用的能力の育成が学習意欲の向上及び学習習慣の定着につながり、思考力・判断力・表現力の育成を図ることができると考え、本主題を設定した。

本研究を進めるにあたっては、次の２点を重点項目に掲げた。

１点目は、キャリア教育の視点を授業に生かし、「学ぶ意義」を理解させる取組を行うことである。

(1) 教職員・生徒がともに基礎的・汎用的能力の意識を高める工夫。
　「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」
　「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」

(2) 日常と学習内容を結び付けるなど、受検以外の学ぶ意義を意識させる授業展開。

(3) 自己理解をもとに、生徒それぞれの学ぶ意義を考えさせる場の設定。

(4) 学ぶ意義の理解につながる日常的な自己管理とキャリアプランニングの場の設定。

２点目は、生徒の主体性と対話的な学習及び思考力・判断力・表現力の育成を支援するために、特別支援教育の視点を取り入れることである。

(1) 「焦点化」…「何を学ぶか」を明確化する工夫。

(2) 「視覚化」…「どのように学ぶか」を明確化する工夫。

(3) 「共有化」…「何ができるようになるか」を集団として共有する場面の工夫。

これらを意識した授業づくりの推進は、生徒の授業における「学ぶ意義」の喚起と理解につながった。しかし、授業における「学ぶ意義」の喚起と理解が、学習習慣の定着・向上に結び付いているかは不透明である。そこで、今年度は、キャリア教育の視点（学ぶ意義）と特別支援教育の視点（焦点化・視覚化・共有化）に基づく授業改善を継続しつつ、生徒が家庭でも学習を頑張ろうと思える授業の工夫に取り組み、アンケート等を通して、生徒の変容を確かめていきたい。

２　研究のねらい

授業を中心とした教育活動にキャリア教育と特別支援教育の視点を取り入れた授業展開を工夫することを、教員が共通理解のもと協働実践する。それによる生徒一人一人の学習意欲、学習習慣、思考力・判断力・表現力に関する変容を明らかにする。

３　研究仮説

授業を中心とした教育活動にキャリア教育と特別支援教育の視点を取り入れ、自己の生き方を意識した「学ぶ意義」を考えさせ、理解させることにより、生徒一人一人が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を育成することができる。

４　研究内容

(1) 研究協議と発表の機会を設けるために、３人１組のグループによる相互公開授業を実施する。

(2) 授業改善と生徒の変容の状況把握をするために、生徒・教員によるアンケートを実施する。

(3) 学習委員会を活用し、課題を生徒自身のものとして、主体的に解決させる活動を取り入れる。

(4) 日常的な自己管理能力を育成するために、生活記録ノート「私のあゆみ」を活用する。

(5) 基礎的・汎用的能力を育成するために、キャリア・パスポートを活用する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授業研究	全体会等
４	２ ５ ２７	 指導案作成に関する伝達講習	全体会（研究の方向性の共通理解） 教科・領域部会 全体会（具体的な取組の共通理解）
５	１７ ２５	 教育指導課・総合教育センター計画訪問	教科部会（NRT 分析）
７		授業公開（庄内）	
８	１９		全体会（１学期の成果と課題） 学年部会（QU 考察）
９		授業公開（作山）	
１０		授業公開（馬場、名久井）	
１１	８	 授業公開（沼岡、慶長）	教科・領域部会（成果と課題）
１２	２２	 授業公開 （館美、小比類巻、三浦直、鈴木、蹴揚）	学年部会（QU 考察）
１	１１ ２６	 授業公開（進藤、立場、柏﨑）	全体会（まとめ） 教科・領域部会（次年度に向けて）
２		授業公開（舘、小山内、佐々木、三浦留）	

(2) 一般研修

月	日	内容･講師･概要等
５	１９	生徒理解研修
８	２０	「一人一台端末」の活用に関する一般研修 （講師　八戸市総合教育センター主任指導主事　大下洋一氏）

６　研究の成果

(1) 新学習指導要領の完全実施に伴い、今年度はできる限り同じ教科で３人１組を作り、キャリア教育と特別支援教育の視点を生かした授業実践について理解を深めた。

(2) アンケートの実施により、教員・生徒の課題の共有化を図ることができた。また、「学習の約束」に焦点を当てて、生徒主体の授業改善に結びつけることができた。

７　研究の課題

(1) 計画訪問後に行事が続いて公開授業が実施できず、後半に集中した。早めの計画・実施により、一層効果的な実践研究を進めたい。

(2) 昨年度、生徒の授業における意欲が家庭学習に結び付かないことが課題となり、その解決に向けて授業改善を進めたが、教科の授業だけで「学ぶ意義」を意識させることは難しく、教科の指導以外で、「学ぶ意義」を意識させる機会が必要である。方向性としては、外部講師等を活用し、働く大人の話を聞く機会を設定することにより、自分の進路や将来設計に関心をもたせ、今の学習が将来役に立つことを理解させることで、主体的に学ぼうとする意欲の向上につなげたい。

（記入者　立場　里香）

小中野中

課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成

～身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　高 橋　直 浩

１　研究主題について

本校生徒の実態として、ここ数年「学習意欲・学力の差の拡大」が課題として挙げられたため、言語活動を意識した学び合い、ユニバーサルデザインを意識した板書、家庭学習ノート（こなノート）等の取組を行ってきた。昨年度は、問題解決型学習を取り入れたり、学びの過程を生徒自身が理解したり、既習事項を想起できるようなワークシートを作成するなど、生徒が主体的に取り組める場面を設定し取り組んだ。例年に比べてペアやグループ活動が制限されるなかで、その授業形態を見直し、生徒同士が身に付けた知識・技能を生かし協働的に活動できる場面を各教科で考え授業に組み入れるように努めた。

その結果、生徒は課題を発見したり解決する方法を試行錯誤したりしながらも、主体的に取り組む姿勢がみられるようになった。また、言語活動の場面では、どのように伝えたら相手により分かりやすく理解してもらえるかなど、コミュニケーションの取り方にも意識して取り組む姿も見られた。しかし、中位・下位の生徒の中には既習事項を忘れているためにワークシートやヒントを見ても気付くことができない、活動にすぐに取りかかれず止まってしまう、相手に話しかけられるのを待つ生徒もいた。「主体的」という点において、まだ不十分であり、生徒自身が気付き、判断できるような学習内容の提示、定着を図るという課題が残った。改めて主体的に学ぶ生徒の姿とはどういうものか、その育成には何が必要かを見直し、共通理解した。

今年度は、課題解決に向けて生徒自身がどのようにすれば解決できるか見通しや目標をもたせることに加え、身に付けた知識・技能を生かすために、授業と家庭学習の連動や朝自習、各教科のコンテストの実施等による学習内容の定着を図ることとした。また、生徒自身の言葉で課題解決の過程を振り返らせ、他者に説明することで、理解を深め、達成感や成就感を実感させることにも重みを置くこととした。主体的に学ぶ場面を考え様々な授業形態を工夫・実践し、お互いに参観しあうことで教師同士の資質を高め、主体的に授業に取り組む生徒集団を育成したい。

２　研究のねらい

課題解決に向けて生徒自身がどのようにすれば解決できるのか見通しをもたせたり、身に付けた知識・技能を想起させたりするなど、主体的に課題に取り組ませ、振り返りの場面を設定することにより、生徒のさらなる学習意欲の向上に努める。

３　研究仮説

(1) 各教科及び学級活動、総合的な学習の時間において、課題解決のために生徒に目標や見通しをもたせ自分の言葉でまとめる振り返りの場面を設定することで生徒は達成感や成就感を味わい、学習意欲の向上が図られるであろう。

(2) ユニバーサルデザインを意識した板書やワークシートを工夫し、学びの過程を生徒自身が理解することにより、学習内容の定着および学力の向上が図れるであろう。

４　研究内容

(1)　「わかった・できた・身に付いた」を実感できる授業の工夫（授業力の向上）

ア　主体的に学習課題に向かわせるための工夫

①　課題に対して目標をもたせる　興味や関心・見通し・自分と結び付ける

②　自分の言葉で振り返らせる

(2) ユニバーサルデザインを意識したワークシート・板書

ア　ワークシート　思考の仕方・スキルの定着化・家庭学習との連携

イ　板書　　授業のポイントがわかる

(3) 学校図書館を活用した授業の設定

(4) お互いの指導技術を学ぶ機会の設定

(5) 諸検査の結果を生かす授業の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業研究　全体会等
4	8	第１回校内研究　全体会 研究についての共通理解
7	6	教育指導課・総合教育センター学校訪問
8	17	第２回校内研究 ｈｙｐｅｒ―ＱＵの結果分析、一人一台端末活用研修
9	1	ローテーション道徳、授業参観（～12 月）
10	5 25	第３回校内研究（要請訪問・授業研究）数学　授業者　小笠原　純子教諭 初任者研修研究授業（保体・日向）
11	25	第４回校内研究 小６による授業参観
12	13	中堅教諭研究授業（英語・一ノ渡）青森県英語教育推進研修　研究授業（英語・土川）
1	7 24	第５回校内研究全体会(Q-U 分析 2 回目・今年度の反省と次年度に向けて、一人一台端末活用練習) 第６回校内研究（授業研究）道徳　授業者　教諭　日向　祐弥

(2) 一般研修

4	22	生徒に関する情報交換（生徒指導・健康面など）
8	17	一人一台端末活用研修　講師 八戸市総合教育センター主任指導主事 大下洋一先生

６　研究の成果

(1)　一人一台端末活用研修を生かし、授業でも各教科において、場面に応じて端末を使用することにより、生徒が主体的に授業に取り組む場面が増えた。

(2)　自己評価シートや撮影した動画の振り返りなど生徒自身で授業目標に対しての振り返りをすることで、次時の学習意欲へつなげることができた。

７　研究の課題

(1)　端末導入により主体的に取り組む生徒が増えた一方、受身的で学習に集中できていない生徒もいる。授業形態、サポート体制について引き続き学校全体で対策を考え取り組む必要がある。

(2)　職員の端末利用スキルや「主体的」に対する概念にも差があるため、現状に即した研修の充実やきめ細やかな共通理解を図る必要がある。

（記入者　土川　真紀子）

江陽中

自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成
～対話的・協働的活動を通して～

（３年計画の２年次）

校長　富　樫　克　輝

１　研究主題について

本校では前年度の研究から、主体的に考え、発言する態度や意識を引き出すために、授業におけるコミュニケーション能力の向上を目指して研究に取り組んできた。グループ活動などの共有場面を効果的に設定することで、自分の考えを積極的に発表しようとする生徒が増えてきている。これは、本校が八戸市学校保健会研究指定校として取り組んできた「ピアサポート活動」が浸透してきたことも大きく影響していると考えられる。ピアサポート活動により、人と協力すること、話合い活動を通して自分の意見を形にすること、相手の立場を考え、共感することの大切さを認識し、安心して自分の考えを述べることができ、仲間の意見を吸い上げ、認め合える集団の醸成ができつつあるということである。そのため、授業に主体的・対話的に参加しようとする意識の高揚が多くの生徒にみられた。その成果として授業を理解できる生徒も増えたことにつながったと考察する。

生徒の成長している部分を学力の定着に直結していくために、生徒の学習習慣のさらなる確立と教師の授業力の向上が不可欠である。家庭と連携して学習習慣の確立を図る手立てを講じることも必要となってきている。また、授業規律の徹底も大事な要素となってくる。「磨き合い、高め合い、深い意見交換をする」ことができるような発問の工夫も今後の大きな課題である。

そこで、今年度は向上してきたコミュニケーション能力を授業の中で生かしていくことと正しいコミュニケーションを図るための授業規律の徹底を目指していくことはもちろんのこと、授業の中で自分の意見が仲間に認められたり、さらに磨かれたりする経験の積み重ねが自信となり、それによって生徒間のレジリエンスの向上を図ることが「主体的・対話的に学び合う態度の育成と学力の定着」につながると考え、この研究主題を設定した。授業の中でしっかりとした自分なりの意見をもち、主体的に活動できる生徒の育成を目指し、授業や諸活動の中で他者に依存するのではなく、自分の言動に責任をもつことができる生徒に育てたいと考える。

２　研究のねらい

ピアサポート活動で高まった、相手の立場を考え、共感することの大切さを認識し、安心して自分の考えを述べることができるお互いを認め合える活動を通して、各教科や各領域において生徒の主体的な学習意欲を高めるための活動や授業形態などについて実践を通して研究する。

３　研究仮説

導入から課題設定までの工夫や、グループ活動などの対話的、協働的な活動を多く取り入れ、アウトプット作業を意識的に設定することで、深い学びができる授業内容と、自分なりの考えをもち、共に認め合って成長することができる主体的に学習することができる生徒の育成につながると考える。

４　研究内容

(1) 授業内で、導入から課題設定までの工夫を行う。
(2)「学習六則」を徹底させる。学習規律の向上を図る。また、取り組み状況を定期的、継続的に評価し、改善に努める。
(3) 各教科や各領域において、対話的、協働的な活動場面を効果的に設定する。
(4) 教員間の授業内共通理解項目を設定し、指導技術の向上を図る。（見せ合い授業月間の強化）

５　年間計画

(1) 授業研究等

月	日	授　業　研　究	全　体　会　等
４	２１	第１回校内研修	今年度の研究についての共通理解 研究テーマ及び研修計画について
５	１９	第２回校内研修 見せ合い授業参観ポイント吟味	見せ合い授業参観ポイントの共通理解
７		見せ合い授業月間	授業参観
９	２８	渡邉養護教諭命の授業	授業内容に関してアンケート記入
１１		見せ合い授業月間	授業参観及び研究協議
２	２１	第７回校内研修　　見せ合い授業月間	研修のまとめ（今年度の成果と課題）

※新型コロナウイルスの感染防止体制の状況により授業参観や協議会の形態は変更もある。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	２８	第３回校内研修
８	１８	要請訪問 「指導と評価の一体化」 八戸市教育委員会　教育指導課副参事　日向端　聖様
８	１９	要請訪問「１人１台端末の活用」八戸市教育委員会　主任指導主事　大下　洋一様
１０	２６	第５回校内研修　センター・教育指導課訪問
１１	１８	第６回校内研修　ハイパーＱ－Ｕの検査結果分析

６　研究の成果

(1) 今までの授業実践をより効率よく行うため、ＤＬＴＧサイクル（授業実践 DO →指摘 Look → Think 分析・解析→ Grow 論理化)、ピアサポートの精神を組み込んだ校内研修を軸に、新学習指導要領の趣旨に則った指導案を教員同士で作成し、お互いの技術を学び合う機会を設けることができた。見せ合い授業の強化月間を例年の３倍にすることで教員間の意識も高まった。

(2) 教員で学習６則や５つの共通理解項目「１　導入から課題設定までの工夫をする。(今年度八戸市共通指導項目）２　指示・発問は限定して短く、簡潔に述べる。(指示を多く出さない。）３確認を授業内で数回行う。できた生徒をほめる。(生徒の達成度チェック）４　口頭発表・小テストなどのアウトプット作業を多く取り入れる。５　授業形態ではグループ学習・話合い活動等の協働作業を多く取り入れる。」を設定し、目標をもって授業づくりに取り組むことができた。
　生徒対象の授業アンケートにおいても５つの項目に係る質問に対して良好な回答が得られている。

７　研究の課題

(1) コロナ渦において協働作業の場が制限されることが多く、生徒がお互いの知識を共有しながら深い学び合いにもっていく授業形態の設定をすることが難しかった。

(2) １人１台端末を使用し、画面内で意見交流することで相手の意見を吸収し、深い学びにつなげていくことができた。クロームブック内の有効なソフト利用の定着を目指し、よりよい授業形態を考えていくことが必要となってきている。

（記入者　　和田　浩志）

湊中

問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究

～導入段階における課題設定の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　　野田　明広

１　研究主題について

文部科学省が約 10 年ごとに改定する「学習指導要領」が本年度から完全実施され、新学習指導要領による指導が始まった。新しい学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力など」「学びに向かう力、人間性など」の三つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいくことを目指し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重要視している。

昨年度まで本校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり（授業の目標・流れ・まとめ・振り返りの明示、環境・組立て・説明の工夫や個人差への配慮など）をテーマとして研究と実践に取り組んできた。

本年度からの校内研究は新学習指導要領の完全実施にともない、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善として、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりをベースにしながら、新たに問題解決的な授業づくりの研究に取り組んでいきたい。具体的には、研究 1 年目は「授業の導入における課題設定の工夫」、2 年目は「授業の展開部分での学習活動の工夫」、3 年目は「授業のまとめ部分としての評価の在り方」について研究し、生徒にとって「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業を目指したい。

２　研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、問題解決的な学習の充実を図り、生徒が導入段階で解決したくなる学習課題を設定した授業づくりに取り組むことで、各教科で目指す生徒の資質・能力の育成を目指す。

３　研究仮説

教科担任が協働し、学習の系統性を踏まえ、単元で育成を目指す各教科における資質・能力を明確にするとともに、生徒の疑問や気付きを基にして、必然性があり解決したくなる学習課題を設定し、既習の知識や技能を活用して問題を解決していく授業づくりに取り組むことで、問題解決的な学習が充実し、各教科で目指す生徒の資質・能力を育成することができるだろう。

４　研究内容

(1) 単元で育成を目指す各教科で考える資質・能力の明確化

① 各教科の年間指導計画に単元ごとに 3 観点の評価規準を明記する。

② 各単元で最低 1 時間は問題解決的な授業を行う。

(2) 必然性があり解決したくなる導入段階における学習課題設定の工夫

① 学習課題に求められる要件の共通理解を図る。

② 「問い」を引き出す課題設定を工夫する。

・実物を通して　・実演を通して　・対話を通して

(3) 校内研チェックシートによる教師の自己評価（Plan Do Check Action）

① 月ごとに校内研チェックシートを活用して自己評価を行う。

② 学期に１回生徒から授業アンケートをとる。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者　等	全体会等
4	5	・今年度の研究にかかわる共通理解	全体会（共通理解）
4	21	・指導課訪問に向けて	全体会（共通理解）
5	26	・教育指導課訪問（課題と対策）	各教科ごとで話し合い
7		・NRT 分析/考察	各教科ごとで話し合い
9	18～22	・研究授業指導案検討会	教科部会等
9	29	・導入段階における課題設定の工夫	全体会（共通理解）
11	10	第１回授業研究（数学）要請訪問 授業者　教諭　関　晨之介	全体会（共通理解）
11	12	小・中学校ジョイントスクール	全体会・分科会
1	17	・授業参観週間（～21 日）	
2	2	・今年度の成果と課題について	全体会（共通理解）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要　等
7	7	・講演(特別支援教育の視点を取り入れた授業作りについて)講師 大塚弘昭

６　研究の成果

生徒の課題意識を高め、自ら考える力や解決しようとする意欲につなげるために、教師が授業の導入場面で工夫を凝らし、生徒に図や表、新聞記事、カード、家系図、写真、実物等を提示したり音楽を聞かせたりした。そして、学習課題を設定したことで問題解決的な授業につなげることができた。

また、校内研チェックシートを作成し、毎月教師全員が自己評価することで問題解決的な授業を実践できただけでなく、特別支援教育の視点を取り入れた授業も意識して取り組むことができた。

７　研究の課題

生徒が自ら疑問をもち、興味・関心を高めながら学習したことを、どのように習得させていくのか、そして活用（ワークシートやノート作りの工夫）させていくのか、さらには家庭学習について探究させていくのかといった方策について考えていく必要がある。　（記入者　坂井恵美子）

白銀中

思考力・判断力・表現力を養うための指導方法の研究

～各教科・領域の特性を踏まえた語彙力の向上を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　高　橋　　健

１　研究主題について

本校の努力目標の一つである「目標を持ち、粘り強く学習に取り組む生徒」に迫るため上記の研究主題を設定した。今年度は３年計画の３年次である。

昨年度は、各教科・領域ごとにそれぞれの特性に応じて、どのような言語活動が生徒にとって適するものであるかを探った。教科を越えて情報を共有し、共通実践できる部分を明らかにしていく中で、語彙力の不足から相手が伝えようとしている内容を理解できていない生徒が多いことが、普段の授業や定期テスト等で明らかになった。そのため、音読や復唱の継続と同時に、新聞等を活用した意見発表や意見交換を行い、言語活動に焦点を置いて取り組んだ。

今年度は、前年度の取組を継続すると共に、「説明すること」に対する達成率が低かったことも踏まえ、相手からの情報を基に自分自身の考えを深める思考力や、自分の意見を相手に分かりやすく伝えるための表現力を身に付けさせるために、基礎となる語彙力の向上を通して研究を進めていく。

２　研究のねらい

情報を基に考えを深める思考力や、意見を相手に分かりやすく伝えるための表現力を身に付けさせるために、各教科・領域の特性を踏まえ、基礎となる語彙力を向上させることを通して、生徒の学力向上および教師の授業力向上を図る。

３　研究仮説

各教科・領域において、授業での目標（ねらい）を絞り、評価基準を明確にする。語彙力向上を目指した振り返りの場面を設定し、自らの言葉を用いて考え、他者に説明し、発表すること等を通して、「思考力・判断力・表現力」を養うことができる。

４　研究内容

(1) ア　各教科・領域ごとに、思考力・判断力・表現力を養うために効果的であると思われる語彙力を高めるための方法を考え、日々の授業実践を通して検証する。

イ　教科内での教員相互の授業参観（７月・１０月、全員参加）を通して、同じ研究に向かう。教員相互の同僚性を高め、アの方法についての検証を深める。

ウ　授業では、その日学習する課題や目標の可視化、振り返りの文字化を全教員で進め、振り返り場面では、生徒の言葉でまとめる場面を設定する。

(2) 新聞や一人一台端末を活用し、時事や地域のことについて知る活動を通して、語彙力を 増やす。また、一般研修の中では語彙力向上の一つの手段として、一人一台端末を活用していけるよう、教員のスキルアップを図る。

(3) 研究テーマに沿った内容のアンケートを生徒及び教員に行い、その結果を共有する。

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	例）学年・授業者等	例）全体会等
４	２８	校内研究テーマに向けての各教科での進捗状況の確認	教科部会
５	１３	市教育委員会教育指導課・市総合教育センター計画訪問 （授業公開・指導助言）	教科部会
６	１０	校内研に関わるアンケート実施・集計	生徒・教員
７	５～７	第１回校内研究テーマに向けての各教科の授業研究	教科部会
７	７	授業参観１回目の研究協議	教科部会
１０	５～８	第２回校内研究テーマに向けての各教科の授業研究	教科部会
１０	１８	授業参観２回目の研究協議	教科部会
１１	３０	領域部会（今年度の研究成果と課題）	領域部会
１２	１	教科部会（今年度の研究成果と課題）	教科部会
１２	３	校内研に関わるアンケート実施・集計	生徒・教員

(2) 一般研修

月	日	例）内容・講師・概要等
４	１８	校内研修についての共通理解
６	１０	「１人１台端末活用」一般研修 演題「GIGAスクール構想の実験に向けて」～各学校ができること～ 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一　氏
２	２２	今年度の研究のまとめと次年度に向けて

６　研究の成果

(1) 各教科の担当同士が相互に授業参観することにより、教材理解、生徒理解を深め、同僚性を高めることができた。語彙力の向上への取組や振り返りの仕方について話し合った。振り返りでは、語彙力向上を考え新出語句を入れて書かせたり、生徒が自らを振り返る手立てを工夫したりする姿が見られた。また、授業を進めるうえで、全教科での目標掲示、ユニバーサルデザインを意識した掲示物の厳選を行った。

(2) 新聞の語句調べや「読み聞かせ」の活動を通して、新しい語句に触れたり、文章での使い方を学んだりして、語彙力を高めることができた。一人一台端末を日常でも利用して、授業レポートや、自己評価、動画、クラスルームなど各教科の特性に応じた利用の仕方を考えて、実践した。

(3) 研修テーマに沿った生徒・教員共通のアンケート調査の結果から、３年間を通して少しずつ向上しているが、中でも「人の発表や意見を聞いて理解すること」が向上した。

７　研究の課題

様々な活動を通して、新しい語句を手に入れたものの、語句を定着する力や、語句を用いて内容を理解したり、説明したりすることが困難である生徒がまだ多く見られる。今後は、基礎・基本を定着させ、思考力・判断力・表現力を高めるための土台作りが必要である。

（記入者　石屋　純子）

白銀南中

目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成

～キャリア教育との関連を図った指導を通して～

（３年計画の３年次）

校　長　　伊 崎　　己 治

１　研究主題について

本校は昨年度まで２年連続で「授業における課題設定と振り返りの工夫を通して」を副題として設定し、「目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成」を目指した取組を行った。各教科・領域の授業において、各学年１回ずつの研究授業を行い、「課題設定」と「振り返り」の意義と方法を共有し、生徒の意欲向上につなげることができた。また、３学期に行った１人１台端末を活用した道徳の授業は、生徒が端末に入力した意見を教室前面のモニターに表示して共有し考えを深める、という実践で、「振り返り」が充実したものになった。この２年間の研究により、「課題設定」と「振り返り」を工夫することにより、生徒が自分自身を客観的に見つめ、その授業で身につけるべき力を捉え、意欲の向上が期待できるという成果を得ることができた。

今年度の校内研究の副題は、「キャリア教育との関連を図った指導」である。「キャリア教育の指針〈実践編〉」（青森県教育委員会、平成２６年３月）によると、「各教科で学ぶ内容が『日常生活のどんなところに活用されているのか』『その知識を必要とするのはどんな職業か』『社会に出たときにどんな場面で役に立つのか』などを、単元の導入やまとめの段階に加味して教えたり、本時で学ぶ内容を実際に活用している職業人の話を聞かせたりすることで、学習内容と日常生活・職業・将来との関連付けを図ることができる」とあり、「キャリア教育の視点を生かした学ぶ内容からのアプローチを、授業改善の手立てとして取り入れていくことは、児童生徒の主体的な学びへの促進へとつながっていく」とある。これまで２年間取り組んできた「単元の導入やまとめの段階」の「課題設定」と「振り返り」の工夫に加え、前述の「キャリア教育の視点」を加えることができれば、「主体的に学ぶ」態度の育成に一層の効果が期待できるのではないかと考える。

また、以前から本校で取り組んできた「わかる授業づくりのための５つの視点」（①本時の目標や指導過程の明確化、②具体的で分かりやすい指示・発問、③構造化された板書や視覚に訴える教材の提示、④肯定的な評価の実施、⑤学習の連続性を指示）を継続し、これについても「キャリア教育との関連を図った指導」につなげていきたい。

２　研究のねらい

授業における「課題設定」と「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育との関連を図った指導を通して、生徒の主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。

３　研究仮説

各教科及び領域において、キャリア教育との関連を図った指導を行うことにより、生徒が主体的に学習に取り組めるようになる。

４　研究の内容

これまでの「課題設定」「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育との関連を図り、次のいずれかの視点を意識した授業づくりを推進する。また、その視点に基づいた授業研究を複数回実施することにより、教師の授業力の向上を図る。

(1) 生徒が自分と異なる意見を受け入れながら、自分の考えを適切に伝えることができる話合い活動の工夫
(2) 生徒が課題や問題に対してよりよい方法等を見つけることにつながる「課題設定」と「振り返り」の工夫
(3) 生徒が学ぶことや働くことの意義を自分の生き方と重ねて考えることができる単元の指導の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
６	２	小中ジョイントスクール推進事業　中学校の授業公開
７	７	第１回授業研究（３学年・総合）
１０	７	教育指導課・総合教育センター計画訪問　※中止 第２回授業研究（要請訪問・保健体育）　※中止 １学年　授業者　教諭　嶋守健太郎
１１	５	小中ジョイントスクール推進事業　小学校の授業参観
１１	８～１５	授業見せ合い週間
２	１６	第３回授業研究（２学年・道徳）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	５	全体会（研究についての共通理解）
４	２１	配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解
５	２６	１人１台端末に係る研修　　講師　木村和光　教諭
７月下旬		中学校教育課程研究集会（各教科・領域部会にて配付資料の読み合わせ）
７	３０	・生徒指導に係る研修　「ＳＯＳの出し方教育」 講師　青森県総合学校教育センター教育相談課　工藤直子　指導主事 ・ＮＲＴ結果分析の共有
１１	３０	全体会・教科部会（今年度の成果と課題）
１	１１	配慮を要する１・２学年の生徒に関する情報交換・共通理解
１	２０	「心のケア研修」　講師　八戸学院大学短期大学部　野口和也　教授

６　研究の成果

(1) 毎月の生徒アンケート（４段階評価）で３と４の段階を合わせたものを高評価とし、１学期と２学期の高評価の割合の差が最も大きい月を学年平均で比較したところ、「その時間の学習目標や、将来どんなことに役立つのかを意識して授業を受けた」については１学年が 88.8%から 96.3%(7.5%増)、２学年が 81.7%から 91.8%(10.1%増)、３学年が 71.9%から 91.2%(19.3%増)となった。また、「話合い活動に参加し、積極的に意見を伝え合った」については、１学年が 87.8%から 96.4%(8.6%増)、２学年が 83.2%から 92.4%(9.2%増)、３学年が 80.0%から 88.2%(8.2%増)となり、今年度の研究に一定の成果があったものと考えられる。

(2) ７月の授業研究では、本校でこれまで取り組んできた「課題設定」「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育の視点を取り入れた話合い活動や、学ぶこと・働くことの意義を考えさせることのできる授業が展開され、参考例として教員全体で共有することができた。

(3) 昨年度の課題「教員相互の見せ合い授業の活性化」を図るため、「授業見せ合い週間」を設定した。全ての教員の授業を全ての教員が参観できる環境を整えたことで、多様な実践を共有でき、その後の授業改善に役立てることができた。

(4) 全体での配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解を２回、外部講師による「ＳＯＳの出し方教育」、「心のケア研修」を開催することによって、生徒の行動の意味や接し方について学ぶことができた。

７　研究の課題

これまでの研究に一定の成果は得られたが、「目標をもって、主体的に学ぶ」ことについては課題が残されたと考える。例えば、２学期に行った学校評価アンケート（４段階評価）では、「目標をもち、計画的に学習しているか」の項目において、生徒の２０％、保護者の４０％、教職員の５０％が低評価（２または１の段階）となっている。

今後の授業改善に当たっては、生徒の興味・関心を喚起するようなはたらきかけに加えて、各教科等の特質を生かした問題解決的な学習を取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりが必要と考える。

（記入者　山道　律人）

鮫中

生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究

～自分の考えをもたせる活動を中心として～

（３年計画の１年次）

校長名　　上野　裕治

１　研究主題について

本校生徒の実態として、「自己の生活をよりよく向上させようとする意識」、「学ぶことに対する意欲」、「コミュニケーション能力」の低さが課題として挙げられる。そこで本校では生徒が自らの生活を見直し、学習意欲を高めることができるように、「課題の提出」・「１分前着席」・「授業道具の準備」から成る「学習三原則」を定めており、日頃から教師が声を掛けたり、生徒会や学年プログラム委員会などと連携して達成状況を調べたりしながら、生徒に対し意識づけを図ってきた。また、コミュニケーションの活性化を目指して、各種調査や面談を通じて良好な人間関係づくりに努めるとともに、授業ではグループ活動やお互いにアドバイスをし合う対話活動を重点的に取り入れることで、発言しやすい雰囲気づくりを心がけてきた。特に年間６回の「学級話合い活動」では、自分の意見を表現しようとする生徒が増えてきている。

一方で、特に教科の授業においては自分の考えに自信がもてないことや、考えを分かりやすく伝えるための言語能力が乏しいことから、なかなか意見を表現できない生徒がみられる。さらには基礎・基本の定着が不十分であることから、自分の意見をもつことができない生徒も少なくない。これらの点を改善し、受け身の学習から主体的に参加する学習へと変えていくことが急務である。

そこで、今年度から改めて３年計画で「自分の考えをもつ」、「自分から表現する」、「互いに深め合う」と順を追って研究を進める。今年度は昨年度までの取り組みに加えて、言語能力の向上や基礎・基本の定着も大切にしながら、生徒全員が「自分の考えをもつ」ことを目標に、実践を行っていきたい。

２　研究のねらい

生徒に基礎・基本を定着させるとともに、言語能力の向上を図るとともに、生徒自身の「学びに向かう力」を育成する指導法の確立を目指す。

３　研究仮説

授業における導入場面や学習形態の工夫､授業と家庭学習との連携を図る取り組みを通じて、生徒に基礎・基本を定着させることや､授業などで自分の考えを表現する場を取り入れながら、生徒の言語能力の向上を図ることで、生徒が自信をもって発言したり考えを深めあったりできるようになり、ひいては主体的に学習に臨むようになるのではないか。

４　研究内容

(1) 基礎・基本の定着や言語活動の充実などの、教科の特質に応じた授業改善の推進
(2) 家庭学習の充実につながる「学び方」指導
(3) 特別支援教育の視点や、ＩＣＴの効果的な活用などを土台にした学ぶ環境づくり
(4) 自主的な態度を育てる学級・学年経営の推進

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・講師・概要等
5	10	第１回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修
11	11	教育指導課・センター訪問
	29	第２回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修
1	20	授業参観月間（自分の考えをもたせる活動、特別支援の視点を取り入れた授業づくり、ICTを効果的に活用した授業づくりについて）（～２／17）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	5	第１回校内研（研究主題の共通理解～昨年度までの取り組みと今年度の方針）
	21	第２回校内研（特別支援の視点を取り入れた授業づくりについて①）
	28	第３回校内研（自分の考えをもたせる活動について①）
5	19	要請訪問　「１人１台端末活用」一般研修 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一
	20	第４回校内研（Chromebookの活用について）
8	20	第５回校内研（評価について①、指導案について）
9	15	第６回校内研（オンライン授業について）
	22	第７回校内研（評価について②）
10	20	第８回校内研（特別支援の視点を取り入れた授業づくりについて②）
11	17	第９回校内研（校外研修会報告①～GIGAスクールについて）
1	19	第10回校内研（授業参観月間①、校外研修会報告②～１人１台端末活用について）
2	16	第11回校内研（授業参観月間②、自分の考えをもたせる活動について②）
3	17	第12回校内研（年間の反省と次年度の研究方針について）

６　研究の成果

(1) 学校生活のさまざまな課題を話し合う「学級話合い活動」が、自分の考えをもち、表現することの基盤となっている。さらに今年度は、授業の導入を工夫したり、学び方を指導したりするなどの取組を通じて、生徒が自分の意見を考え、表現しようとする場面が以前に比べてみられるようになった。

(2) 「Chromebookの活用」について、校内研で共通理解を図り、相互に授業参観を行った。その結果、生徒の意欲喚起につながる活用法について、学び合うことができた。

７　研究の課題

(1) 「学級話合い活動」の時に比べ、教科の授業においては、自分の考えをもったり、表現したりできる生徒とそうでない生徒の差が大きい。自分の考えをもつためには、その基盤となる知識が必要不可欠であるため、考えをもたせる活動に加えて、基礎的・基本的事項のより一層の定着を図る方策が必要である。

(2) 「Chromebookの活用」に関する研修などを通じて、活用しようする意識の向上を図ることはできたものの、十分に活用できているかどうかについては、まだ教科や職員によって差があるのが現状である。よりよい活用法について、実践的に学ぶ方法を考えていきたい。

（記入者　中野　大輔）

南浜中

夢や希望に向かい、進んで学ぶ生徒の育成

～課題解決型学習とテーマ型家庭学習の実践を通して～

（３年計画の３年次）

校長名　　木　村　政　和

１　研究主題について

本校では校訓に「自主」「協同」を掲げ、主体的に、なおかつ個々の役割や個性を尊重しながら、お互いを高め合える集団づくりに取り組んできた。本校生徒は、小・中学校ともに小規模校で学年を超えて協力し合いながら生活しているため、自然と助け合いの精神が身についており、教室内や異学年との人間関係も良好である。授業での教え合いや課題解決に向けた取組など、学びの場面での協調性は高い。

しかし、ほとんどが小学校からの顔見知りの集団であることから、お互いの能力もよく知り得ており、それが切磋琢磨する気持ちに結びつきにくい要因と考えられる。

生徒は総じて素直であるが、その素直さゆえに、与えられた仕事に対して責任をもって取り組むことができる傍ら、自主的かつレベルアップした活動や、場に応じた表現については消極的である。そのため、もてる力を発揮しきれていない傾向があり、学習内容の定着も低い。

そこで今年度は３年計画の３年次と位置づけ、主体的な学びの実践として、課題解決型学習と家庭における自主学習ノートの取組の指導について研究を中心に進めることとする。

また、継続して「キャリア教育の指導の工夫」や「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」の研究を進めることで、よりよい学習環境を実現できると考える。そして、生徒が夢や希望に向かって明確な目標をもち、主体的に行動するための手立てをより具体的に提示することで、生徒一人一人の意欲を高めることがねらいである。

２　研究のねらい

(1) 生徒のもつ疑問や「ズレ」を拾い上げ、ともに学習課題を設定し、課題解決に向かうことが生徒の学習に対する切実感・必要感を強めると考える。また、生徒の疑問を共有することでつまづきの共有化を図ることをねらいとする。

さらには、授業づくりにおいては、教師や生徒による UD チェックの評価も参考にしながら、「様々な指導の工夫や手立て」「個に応じた適切な支援」に重点をおき、進んで学ぶ生徒の育成や基礎学力の向上を目指す。

(2) 教育目標である「夢を拓く」の実現のために、学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力を育てることをねらいとし、自主学習ノートの取組の指導を通して授業での評価観点である「主体的に学習に取り組む態度」と家庭学習との連携に力を入れる。授業で学んだ内容や学び方を利用し、自らの学習を調整したり、粘り強く取り組んだりする力を身に付けさせる。

３　研究仮説

(1) 課題解決型学習により、自ら疑問を抱き、もちえた仮説が理にかなうかどうか自分で考える過程の中に学習の目的があることに気づくことができる。また、ユニバーサルデザインとキャリア教育の視点も継続して取り入れることで、基礎的・汎用的な能力を高めることにつながり、主体的に学習に取り組むことができる。

(2) 家庭学習は「学び」という枠の中で学校教育と深く結びついている。自主学習ノートの取組の中で、授業で学習したことの定着を実感したり、新たな知識や技能を獲得したりすることで、「学び」そのものの楽しさや意義を感じさせ、目的意識をもって学習に向かうことができる。

４　研究内容

(1) 課題解決型学習の工夫

生徒が自ら問題を発見し、主体的に問題解決に向かえるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師のはたらきかけを工夫する。そこで生徒に「ズレ」の問いをもたせることにより、主体的・対話的な学びの実現につなげていく。課題についてはユニバーサルデザインの視点を生かして効果的に提示する。また、キャリア教育の４観点については、課題解決に向けて「チャレンジする力」を基盤とし、「思いを伝える力」「自分や相手の良さに気づく力」「目標に向かって計画する力」の中から、学年の発達段階に応じて必要な観点を重点的に捉えて授業を構成することとした。

(2) 自主学習ノートの指導の工夫

帰りの学活で１日の授業内容を振り返り、自分で目標や課題を見つける時間を保証する。また、教師はその学習課題を解決するのに適した内容や方法について、必要に応じて生徒と検討したり、助言したりする。生徒は「学び」そのものの楽しさや意義を感じながら、「やらされる」学習から、「やりたい」と思える学習へと変化し、夢や目標に向かって主体的に学習に向かうことができる。

学期ごとに、各生徒の「ベスト自主学習ノート」をコピーして、ポートフォリオすることで個人の成長を見届けて指導をする。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修予定（学年・授業者・講師等）	全体会等
４	５	教科研究主題　共通理解	全体会（共通理解）
５	１９	教育指導課・センター訪問	授業参観⇒授業巡回
６	１	JS 全体会（中学校授業公開）　※中止	授業参観・研究協議
９月２～３週		相互授業見学 国語⇔理科　理科⇔英語　数学⇔理科 保体⇔数学・理科	授業参観・感想交換
１１	８	JS 授業参観(種差小学校)	授業参観・研究協議
１１月 ２～３週		全クラス　道徳(校長) 「SDGs について」	授業参観・感想交換
１	１９	ローテーション道徳（１年）	授業参観・感想掲示
２	１６	今年度研究報告（研修係）	全体会（成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	研修予定内容　(担当等)
７	６	一般研修 １人１台端末活用 （八戸市総合教育センター　大下 洋一 主任指導主事）
７	９	キャリア教育講話「介護・福祉について学ぶ」 （八戸市役所市民労災課　田村 晶孝さん、 修光園介護福祉士　李澤 修大さん）
７	１５	ネットモラル講話（まなビレッジ代表　森 淑乃さん）
１０	４	薬物乱用防止教室　（青森警察署　長利 真至さん）
１０	６	いのちを育む教育アドバイザー事業　性教育講演会　※中止
１１	２４	一般研修「学びに向かう力(主体的に学習に取り組む態度)について」 （八戸市教育委員会　日向端 聖 副参事兼主任指導主事）
１２	２０	食に関する指導「おやつの食べ方について」 （東給食センター　栄養教諭　中村 孝江先生）

６　研究の成果

(1) 教師は積極的に生徒の意見をすくい上げ、全体の課題として共有した上で、可能な限りではあるが実験検証していくように努めている。自分たちの気づきやズレに皆で立ち止まり、問題解決に向かう学びの中で、生徒から「そういうことか」という言葉が発せられる瞬間がある。これまで学んだ個々の知識が生徒の中でつながり、まさに腑に落ちた瞬間であり、それが生徒一人一人の問題解決意欲を喚起・向上させることにつながっている実感がある。

(2) 生徒の学校評価アンケートでは、「テーマ型家庭学習は、学力向上に役立っていますか(授業の振り返りや学びに向かう力も含めて)」について、「そう思う」のA評価が28%、「どちらかといえばそう思う」のB評価が52%である。A＋Bで78%が肯定的な回答であり、全体的に評価が高い。不定期ではあるが教科担任も自主勉強ノートを点検し、効果的な学習方法を具体的にアドバイスするなどして連携を図りながら進めることで、生徒が学習の調整を図りながら、ねばり強く取り組む力の向上につながっている。

７　研究の課題

(1) 課題解決型学習の実践では、多くの長所がある一方で課題もある。能力差が大きく、生徒数も少ない中で、学習課題を導き出すにあたり、問題発見能力の高い生徒の発言が全体の課題として取り上げられることが多い。消極的な生徒は傍観者となってしまうことも往々にしてある。また、学習内容に興味関心をもたせることはできているが、目的意識をもって主体的に学習しようとする態度までは至っていない実態がある。教師は生徒から適切な課題を引き出すために、生徒に思考を促し、学びに向かうための働きかけをすることが常に課題としてあり、憂慮している現状がうかがえる。今後も、継続して研究を進めなければならない。

(2) 上記の６の(2)の生徒アンケート結果では、C評価が17%、D評価が5%見られ、依然として学級担任や教科担任のアドバイスをうまく生かせていない生徒もいる。学習内容や方法が、授業の振り返りとまとめに役立っているのか、資質・能力の育成につながっているのか、生徒にとって効果的なのか、学習改善や学習意欲につながっているのか、などについて、教科担任がさらに深く介入し、検討しなければならない。そして、学習の調整を図りながら本当に個々の能力に応じた「学び」の楽しさや意義を導き出せるよう、継続した指導が必要である。

（記入者　小峠佐和子）

根城中

主体的に学ぶ生徒の育成

～課題設定の工夫と振り返りを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　竹　花　和　人

１　研究主題について

昨年度までの校内研究も同じ主題で取り組み、「課題設定」「振り返り」について、新学習指導要領に沿って、さらなる研究が必要であるという結論に至った。そこで、今年度からも、校内研究主題を変えずに、研究の視点を変えたり深めたりして、進めていくことにした。

具体的な研究目標を、①問題解決的な授業づくりのための「課題設定」②内言をつなげ、熟考させるための「振り返り」とその活用であるとし、ＩＣＴの活用についても追究したい。

今年度は、研究目標①を中心に研究し、音楽科で研究授業を行い、生徒自身から問いが生まれてくるような課題設定や導入のしかけについて研究した。また、総合的な学習の研究授業も行う予定だったが、コロナ禍で計画が進まず、実施に至らなかった。来年度は研究目標②について、最終年度はまとめとして研究目標①・②について授業実践と仮説の検証をし、まとめたい。

２　研究のねらい

「しかけ」「思考のズレ」「問題発見」をキーワードに導入や課題設定を工夫した「問題解決的な授業」を目指し、文字言語を用いた適切な「振り返り」とその蓄積、活用によって主体的に学ぶ生徒を育成する。

３　研究仮説

教師が「問題解決的な授業」を意識して、実践することによって生徒は興味・関心をもち、自ら学び課題解決に向かうようになる。また、自己の学びについて熟考し、文字言語によって、のちに生かせる振り返りを行うことによって、主体的に学ぶ生徒が育成される。

４　研究内容

(1)　「課題設定」の工夫

ア　「思考のズレ」を生み出し、生徒自ら「問題発見」につながるような「しかけ」作りを考え、実践する。

イ　実践したことを教員同士で共有し、互いの取組を振り返り今後の実践に生かす。

(2)　その他の研修

ア　自発的な行動を促進する「コーチング」について、講師に生徒対象の講座を開いてもらい、教員が研修する。その後、教員同士で振り返り、意義や手法を学ぶ。

イ　一人一台端末研修

授業や行事、特別活動等での、さらなる活用を目指す。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等
5	25	要請訪問　音楽科研究授業（３学年） 授業者：青木なお子　教諭　　助言者：石井　一二三　主任指導主事 「しかけ」として、①自分たちの現時点での歌声を録音したものを聞く②先輩や他校生の歌声を比較鑑賞することを行った。これによって、実力を客観視し、イメージとのズレを自覚し、必要感と改善すべき観点をもつことができていた。さらに、「理想的な歌声」はどうあるべきかを比較鑑賞から考え、曲の構造を理解することで上達していた。「比較」や「実態を録画や録音で俯瞰する」こと、「振り返りながら進める」ことの有効性が明らかとなった。指導助言から、指導（課題設定）と評価（振り返り）の一体化が課題として残った。
6	15	教育指導課・総合教育センター訪問 音楽科以外の教科で授業を行い、助言をいただいた。教師から課題を提示している授業が多いので、生徒から引き出す工夫が課題である。
1	7	「総合的な学習と学校作り」研修　　講師：校長　竹花　和人 生徒の考えや実践が、地域を巻き込むことでアップデートされていく総合的な学習作りの事例を交えた講話により、来年度からの総合的な学習の展望が示された。
1	14 ～ 31	校内授業参観週間 延べ２８人が授業を参観した。互いに見合うことで、自分の授業を振り返ったり、新たな指導法に気づいたりすることができた。また、校長による道徳授業が複数回行われ、授業改善の指標が得られただけでなく、研修に向かう雰囲気が高まった。

(2) 一般研修

月	日	内容等
4	2	「ロジャー研修」　メーカーの方による取り扱い方に関する研修
4	28	「一人一台端末の活用」研修（オンライン）　　講師：石井一二三　主任指導主事 ChromeBook を利用し、クラスルームを作ったり入ったり、MEET への入り方など、基本的な操作方法についてオンラインでご指導いただいた。
8	19	生徒対象「わくわくする未来の作り方」 教師対象「コーチング研修」　講師:NPO 法人　夢コーチング RYOMA 塾　津村　柾広　氏 生徒対象の 1 時間半の講座を教師が見学し、そのあと教師対象の 75 分間の研修を実施した。メンタルには「強さ」「弱さ」があるのではなく、整っているか、ぶれているかの違いが結果の違いとなるという話から、心の整え方の演習が行われた。体や言葉を使う方法や、結果目標ではなくチャレンジ目標を立てるなど、自律する人間を育てるための多くの示唆が得られた。継続してご指導いただきたいという声が多く上がった。
10	28	「心のケア」研修会　講師：八戸学院大学短期大学部　幼児保育科　教授　野口　和也氏 一人一人の生徒の特性に対して、どう接していくかを具体的にご指導いただいた。本人が使う言葉のレベルと文の長さで語りかけること、自分を強く大きく見せたい発言を、言い換えさせてあげることなど、大変参考になった。

６　研究の成果

(1) 研究授業は１回しかできなかったが、比較することで生徒から問いを引き出す手法や、「振り返りは」は終末だけではないこと、また、学び取らせるべき内容をしっかりと教える場面と、生徒が主体的に課題を追究していく場面を教師が意図的に作っていくことの必要性も確認できた。

(2) 「コーチング」と「心のケア」研修において、生徒の心にどのようにアプローチするべきか具体的な手法を多く学ぶことができた。この研修は、これからも継続して機会を設けたい。

７　研究の課題

(1) 「問題解決的な授業」のための課題設定について、どのようなやり方があるかさらに研究が必要である。また、「しかけ」を工夫すると、時間がかかるので効率よくできる方法を模索していく。

(2) 「指導」と「評価」の一体化について、ChromBook を活用しながら、さらなる研修と研究が必要である。

（記入者　元沢　優佳）

白山台中

主体的に思考・判断・表現する生徒の育成

～積極的に話し合う授業づくりの研究を通して～

（２年計画の１年次）

校長　小笠原　徹

１　研究主題について

本校の教育目標である「夢と友情をはぐくむ生徒」の育成を図るために、平成３０年度から３年計画で、研究主題を「グローバルな社会を生きるための『学ぶ力』の育成」として取り組んできた。その結果、「いつ・どの場面で・どのように」を明確にしてＣＴ機器を活用した授業が多く見られ、誰もが安心して学びに参加するようになり「学ぶ力」が育ってきた。一方で、ＩＣＴ機器を活用した学習活動が、指導者側からの一方向になりがちであり、生徒との双方向でのやりとりまでは到達できなかった。また、「自律貢献」の観点から生徒が相互に関わり合う力（コミュニケーション力）や表現力・発信力、ねばり強くやり遂げる力について課題を残した。

そこで、今年度から新たに研究主題を「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」と設定した。本研究を進めることで確かな学力の向上を図りたい。特に、今年度から全面実施される学習指導要領は基礎的・基本的な知識・技能の習得、習得した知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成、学習意欲の高揚を目指している。以上のことから、「主体的に思考する力」「他との交流を通して思考を深める力」「自ら言葉で伝え合う力」の育成を目指し、指導力の向上に焦点を当て、研究に取り組んでいく。そのために副題を「積極的に話し合う授業づくりの研究を通して」とした。

２　研究のねらい

今年度は、「一人一人が主体的に思考し、思考を深める授業づくり」をねらいとし、主体的・対話的で深い学びの実現を図りながら、授業の充実を目指す。その根底には、「確かな学力の育成」があり、「基礎的・基本的な知識・技能の定着」と「思考力・判断力・表現力の育成」を相互に関連させ、生徒の意欲を高めるような導入段階の工夫、課題提示・発問の工夫、話合い活動の設定の工夫など、授業の改善を継続していく。

３　研究仮説

各教科・領域の授業において、学習課題に対して見通しを立て、考察し、意見交流をする中で考えが深まり、基礎的・基本的な知識・技能を習得させることができる。また、教師の「語り」や課題の投げかけ方の工夫によって、生徒の関心・意欲、思考力・判断力・表現力等を高めることができる。

さらに、一人一人が主体的に思考し、その意見を共有したり整理したりする中で課題解決の方向性を導き出したり、新たな課題を発見したりすることができ、学びを深め、学びの楽しさを広げることができる。

４　研究内容

⑴　学習課題への見通しをもつための課題設定とねらいに即した授業の振り返りの工夫（各教科・領域における指導と評価の一体化）

⑵　特別支援の視点を踏まえたユニバーサルデザインに基づく授業づくり

⑶　思考・活動・表現の連動を意識した授業展開（単語を組み立て、言語・表現活動をする）

⑷　誰もが安心して参加することができる学び合いの充実（学びを深める場面の設定）

⑸　ＩＣＴを活用した思考力、発信力、自己表現力の育成

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究（内容）
１０	１ ７ ２６	・校内研究授業 ３学年・学級活動（キャリア教育）　３年２組　授業者：井上恵美 助言者　教育指導課主任指導主事　梅村光江　先生 ２学年・学級活動（特別活動）　２学年全員　授業者：藤田友紀 助言者　小中野中学校教頭　森外勇一　先生 １学年・学級活動（特別活動）　１年３組　授業者：菰田聖一 助言者　市総合教育センター主任指導主事　中村美穂　先生 ※共同研究者：宮崎充治（弘前大学教育学部　教授）
１１	１６ １６ ２５	・初任研授業研究　授業者：出河優（２年４組　社会） ・中堅研前期授業研究　授業者：・西史奈（１年４組　国語） ・中堅研前期授業研究　授業者：百目木美佐紀（１年４組　英語）
１２	３ １４	・中堅研後期授業研究　授業者：藤田友紀（２年５組　理科） ・中堅研後期授業研究　授業者：山田五月（３年１・２組　保健体育）
１	２５	・初任研授業研究　授業者：出河優（２年４組　道徳）

(2) 一般研修

月	日	一般研修（内容）
４	２ ２８	学年・学級経営に関する研修　講師：柳谷貴広　教頭 校内研修計画についての共通理解　　新学習指導要領における評価について クロムブック活用のルールについて
５	中旬	特別活動に関する研修と年間指導計画について 講師：特活部長　柏崎悠生　教諭
６	１０	「指導と評価の一体化」について 講師：教育指導課　副参事　日向端　聖　先生
７		校内研究授業（特活・キャリア）に向けた指導案検討会（領域部会・学年）
８	４ １７ ２４ 下旬	令和３年度中学校教育課程研究集会（教科部会） 令和３年度中学校教育課程研究集会（領域部会） 校内研究授業（特活・キャリア）に向けた指導案検討会（領域部会・学年） 中堅研（前期・後期）に向けた指導案検討会（教科部会）
１１	中旬	中堅研（前期・後期）、初任研研究授業に向けた指導案検討会（教科部会）
３	上旬	次年度の校内研修について

６　研究の成果

新学習指導要領の完全実施を受けて、「指導と評価の一体化」を踏まえた授業改善について教師間の共通理解を図るため、八戸市教育委員会日向端聖副参事を講師に招いて校内研修を実施した。

研究仮説について、１学年・２学年特別活動・３学年キャリア教育の校内研究授業を、主な検証の場として研究を進めた。「主体的な思考・判断・表現につながる発問・活動指示・教材提示・問題提示の工夫」「課題を見出すための話合い活動や共有した課題の解決を図るための話合い活動の工夫」「指導と評価の一体化の工夫」に重点を置いて研究し、生徒の主体的な学習活動を促す指導について充実を図った。

ユニバーサルデザインを踏まえた授業作りの一つとして、板書の際に「学習課題」「今日の予定」「まとめ」の表示をすること、それらの表記の色を学区内の小学校と統一することを、全ての教科における共通実践事項とし、配慮が必要な生徒に対する小・中一貫した対応の実践を図った。

７　研究の課題

生徒自身に課題を見つけさせる工夫、学習用端末の活用のしかた、指導と評価の一体化等に関する、有効な手法について一層の共通理解を図り、教員間で共有できる体制を整える必要がある。

また、「積極的に話し合う授業」の土台を確かなものにするため、相手を尊重して話し合う態度、根拠を明確にした意見の述べ方等について全教科、全領域において共通した指導を行っていくことが課題である。次年度、学区内の小学校とも連携し、継続的な指導によって、生徒へのしっかりとした定着を図る予定である。

これらの課題解決に向けて職員一丸となって取り組むことを可能にする研修を提案していきたい。

（記入者：四戸壮一郎）

下長中

意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成

～自ら学び考え表現できるための効果的な発問の工夫～

（３年計画の３年次）

校　長　　三　浦　　一　純

１　研究主題について

昨年度は、新型コロナ感染予防対策により、様々な研修会等が予定されていたが、そのほとんどが行われなかった。そこで昨年度は、研究主題の具現化のため、授業のはじめに学習内容（ねらい）について伝え、板書等で明示するとともに、ねらいに沿ったより分かりやすい発問や明確な指示を意識した授業を行った。また、学力定着につながる学習活動の設定を模索し、その結果を確認する作業を行った。それらの実践により、生徒が意欲的に授業に臨む姿勢や、主体的に活動するための発問の工夫が髄所に見られ、学習内容もある程度定着していることが明らかになった。

一方、学校における ICT 活用は、指導する立場の教師が、まだまだ使いこなすことができていないのが現状である。昨年度は研修会を実施し、今年度も５月に校内研修を実施する予定である。今後、各教科で学期に１回タブレット端末を使って授業を行う予定である。特別な支援を必要とする生徒を含め、生徒が意欲的・主体的に活動させるために有効であるため、一層研修を進め、生徒が教育活動においてタブレットを効果的に使えるようにするために取り組んでいきたい。

授業者の意図を生徒に理解させ、「分かる授業」を展開するために、「効果的な発問の工夫」に視点をあてて指導していきたいと考えている。また、より効果的に自ら学び考え表現できるための「ICT 機器の利活用」の研修も同時並行で進めていきたいと考えている。以上の理由により、上記の主題を設定した。

２　研究のねらい

生徒の積極的な発表を促し、自ら学び、考え、表現できるようにするための効果的な指導として効果的な発問の工夫をし、生徒相互の話合いなどを通して「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業実践を行う。そのことにより、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができることを実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

次の３点を実践することにより、効果的な発問を工夫した授業において、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができるものと考える。

⑴ 授業の構成では、始めに学習内容（ねらい）について伝え、板書等で明示する。
⑵ 発問がきちんと理解されているかを確認するとともに、考えさせるための時間をとる。
⑶ 教材教具の精選や学習形態の工夫を行い、生徒が意欲的・主体的・協力的に活動できるよう働きかける。

４　研究内容

⑴ 研究主題に関わる研修を「研修Ａ」、主題以外の研修については「研修Ｂ」として実施する。
⑵ タブレット研修を実施。各教科で学期１回以上タブレットを使った授業を行う。
⑶ ローテーションに従い集中授業を行う。(諸事情により今年度は実施しないこともあり得る)

Ｒ０３年度→英語	Ｒ０４年度→国語	Ｒ０５年度→美術	Ｒ０６年度→数学

⑷ 授業参観月間の実施（５～６月）
空き時間で授業参観し、テーマに向けての実践を確認し、参観者は視点表に記録後、授業者に提出し、授業を振り返る。各教科ごとで、視点表をまとめ、データで入力後保存する。

⑸ 中教研領域発表(予定では１０月１日であったが、コロナ対策のために教員の集まりを少なくし、更に実施時期をそれぞれの部会においてずらしながら行った。)

授業者	：佐々木　昌彦　先生	視聴覚(１年理科　蒸留法における沸点の違い)
	：２学年	総合的な学習の時間(防災をとおして地域とつながる)
	：　特別支援教育	問題提起(多様な特性をもつ生徒に対する支援のあり方)

(6) 要請訪問

（１１月８日:センター訪問と同日の午後）

授業者　：荒谷　陽子先生　　英語（３年　関係代名詞）

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究授業「研修Ａ」

月	日	学年・授業者等	全体会等
4	5		全体会(共通理解)
5	5月～6月	第１回　授業参観月間	校内研修
１０	1	第１回研究授業　(中教研領域発表) １学年　授業者　教諭　佐々木昌彦 ２学年　授業者　教諭　佐々木　崇 問題提起　特別支援　渋谷　恵子	○ 研究授業 (コロナ感染予防対策をとった。視聴覚、総合的な学習の時間については校内のみで行い、ガバットのフォーラに指導案をアップしたが、特別支援は、資料を個別に配布した。)
１０	10 月～11 月	第２回　授業参観月間	校内研修
１１	8	教育指導課センター(計画)訪問、 第２回研究授業　(要請訪問) ３年　授業者　荒谷　陽子	要請訪問・指導助言　教育指導課 梅村 光江 主任指導主事

(2) 一般研修「研修Ｂ」

月	日	内容・講師・概要等
5	３１	１人１台端末タブレットの有効活用　講師　総合教育センター主任指導主事 石井 一二三　(オンライン研修)

6　研究の成果

(1) １１月に行われた教育指導課訪問では、「分かる授業」を展開するために、「効果的な発問の工夫」に視点をあてて行った。①導入段階、②展開段階、③終末段階における明確な指示と発問をすることで、生徒が意欲的に授業に臨む姿勢や、互いの考えを認め合ったり、主体的に活動したりする場面が随所に見られ、学習に効果的であることがわかった。

(2) ５月に行われた校内研修では、学校におけるタブレットの有効活用を目指してオンライン研修を行った。教師全員が、まだ十分に使いこなすことができていないのが現状であり、使い方の形態はさまざまな方法ではあるが、昨年度より多くの教科で１，２学期に１回タブレット端末を使って授業を行うことができた。

7　研究の課題

(1) 授業において参考となる点や改善点についての意見交換の場となるように、「見せ合い授業」の機会を期間に幅を持たせることで昨年度より増やしたが、新型コロナ対策や学校行事や研修会などの時期と重なり、見せ合いの授業の計画が立てづらかったため予定通りに実施できないことがあった。したがって期間に幅を持たせたり、授業参観の仕方の工夫をするなどが必要である。例えば、導入の１０分間だけでも見れるように、参観する教員は授業のクラスではワークなどの自習課題をさせるようにして、教員が一人一回見に行くような方法を教科部会のなかで設定してもらう。後でそれを持ち寄って部会で話し合う方が現実的ではないかと考えている。また、学習内容をはじめから書くのではなく、導入の段階で、生徒とのやり取りのやり取りの中で学習課題を板書するようにしていきたい。

(2) 大型 TV やモニターなどの整備も進んで来ていることから、授業での ICT 機器の活用を来年度以降も進めていきたい。また、ICT 機器が授業の中でどう活用できるか、そのためにはどんな機器が他に必要なのか、どのように使えばいいのか、一方ではセキュリティやマナーの面でもリテラシーの研修も進めていきたい。

（記入者　佐藤　孝雄）

北稜中

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方

～生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　藤田　浩司

１　研究主題について

令和３年度から施行された学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」がうたわれており、「対話的」な学習を通して「深い学び」を実現することが求められている。本校ではそれに向けて、一昨年度までの三年間、「主体的・対話的で深い学び」を主題に掲げて授業改善に取り組んできたが、その成果として、「主体的な学び」「対話的な学び」については、ある程度の成果が得られたものと思われる。しかし、「深い学び」については、まだ不十分な面があると言わざるをえない。

「深い学び」が実現しない要因としては、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した授業づくりができていないことが挙げられる。学習指導要領解説において充実を図るよう配慮することが求められている学習活動等は、いずれも「見方・考え方を働かせること」が前提となっているため、「深い学び」を実現するためには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した学習場面を設定することが必要である。

以上のことから、昨年度から「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方」を研究主題とし、副題を「生徒が『見方・考え方』を働かせる学習場面の工夫」として研究を進めてきたが、まだ研究が深まっているとは言えない状況にある。そこで、今年度も研究主題を継続し、「深い学び」の実現に主軸をおいた授業づくりを進めていきたいと考える。

２　研究のねらい

生徒が主体的に参加する対話的な学習場面の中に、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を効果的に設定することを通して、深い学びを実現する。

３　研究仮説

各教科・領域において、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を設定することにより、深い学びを実現できる。

４　研究内容

(1) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の設定の工夫
(2) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面を意識した指導計画の工夫
(3) 生徒が自ら課題を発見できるような問題提示の工夫
(4) 授業の流れと到達目標を明確にした授業の工夫
(5) 授業アンケート結果を踏まえた指導法の改善

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
4	5	全体会（主題・研究内容の確認、指導案の形式等）
6	1~11	第１回授業研究(授業参観週間)
	1~11	授業内容検討会（教科部会） ※「見方・考え方」を働かせる学習場面、課題を発見させる導入場面の設定について
7	1	第２回授業研究（計画訪問） 第３回授業研究（要請訪問） ３年　数学　「平方根」　　授業者：大前　拓視
１１	1~12	第４回授業研究（授業参観週間）

(2) 一般研修

月	日	内　　容
5	１３	エピペンの使用に関する研修
5	１８	指導と評価の一体化に関する研修
7	5	「見方・考え方」を働かせる学習場面を意識した指導計画の見直し
8	2	オンライン授業の作り方に関する研修 教育課程地区研究集会　資料読み合わせ ＮＲＴの分析
8	１９	授業アンケートの分析・考察① １学期の取り組みの反省と年間計画の見直し
１１	１８	今年度の課題、来年度に向けての改善点の洗い出し
１２	１５	中教研、各領域の発表に関する資料読み合わせ等の研修
1	２０	授業アンケートの分析・考察② ２学期の取り組みの反省と年間計画の見直し
2	9	授業アンケートの分析・考察③　３学年のみ 今年度の反省と来年度の研究の方針についての話し合い
3	２３	授業アンケートの分析・考察④　１、２学年 今年度の研修のまとめ

６　研究の成果

(1) 出前講座を活用するなどして、クロムブックを活用した授業実践に取り組むことができた。

７　研究の課題

(1) 「見方・考え方」を意識した授業展開について、クロムブックの効果的な活用法も含めて日々の実践の中で工夫していく必要がある。

(2) クロムブックは便利だが、使わない方が効果的な場面もあるので、どのような場面で生徒に使用させるかを判断する力が教師側に必要である。

（記入者　　鮫ノ口　正恵）

是川中

基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり

～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　吉田　浩之

１　研究主題について

本校の学校目標は、「自分から学習に取り組む生徒の育成」～楽しく、わかる授業の工夫を目指して～である。本校が抱える課題として、基礎・基本が身に付いていない低学力の生徒が一定数いること、発達障害やそれに類した特性を示す生徒が年々増加していること、苦しいことや辛いことへの耐性が弱く、頑張りがきかない生徒が少なくないことなどが挙げられる。

本校の学校目標である「楽しく、わかる授業」を具現化し、全ての生徒に学ぶ喜びを感じさせ、確かな学力を身に付けさせるためにも、特別支援教育の視点に立った深い生徒理解と、日頃の授業における「授業のユニバーサルデザイン」の実践が必要不可欠であると考える。

そこで、今年度も昨年度に引き続き、「基礎・基本の定着（確かな学力）を目指した授業づくり」～特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫～を本校の研究主題として設定した。

特に今年度は、「授業のユニバーサルデザイン」の中でも、昨年度までの取り組みである「学習の流れ、めあての提示」に加え、新たに「視覚的・具体的な指示や説明の工夫」に重点的に取り組みたいと考える。

２　研究のねらい

基礎・基本の定着（確かな学力）を目指すために、特別支援教育の視点を取り入れた学習指導の工夫をすることによって、全ての生徒が学ぶ喜びや楽しさを感じ、学力の向上につながることを明らかにする。

３　研究仮説

特別支援教育の視点を取り入れた授業を工夫し実践することで、全ての生徒が意欲的に授業に参加し、基礎・基本の知識や技能の習得が図られ、主体的に学習する生徒を育成することができる。

４　研究内容

(1)　「授業のユニバーサルデザイン」による分かる授業づくり

ア　授業構成の工夫

イ　つまずき防止、解消の工夫

ウ　学習の流れ、めあての提示

エ　参加意欲を高める工夫

オ　視覚的・具体的な指示や説明の工夫

①簡潔で具体的な表現を用いた指示

②視覚的に提示しながら指示や説明

③文字の大きさ、文字量、色、まとまりを工夫した板書やワークシート

④実物・カード・写真の活用

⑤課題に取り組むための手順表の提示

カ　肯定的な評価

(2)　１人１台端末の有効活用の仕方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
5	31	授業参観週間①(~6/10)
7	7	＜午前＞　教育指導課訪問　　＜午後＞　授業研究（要請訪問） 教　科：道徳科　　学　級：３年２組　　授業者：教諭　戸田　洸介　先生 題材名：人命救助～踏切で倒れている人を助ける～、「生命」松山千春 講　師：教育指導課主任指導主事　大野　勉　先生 ・研究授業についての研究協議 ・道徳科の指導法と評価の在り方について
11	5	授業参観週間②(~11/18)

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
7	28	１人１台端末を活用した授業づくり 講師：八戸市総合教育センター主任指導主事　石井　一二三　先生 内容：講義・演習（Google Workspace、デジタル教科書の活用方法を中心に）
8	19	ＪＳ研修会①　特別支援教育の視点を生かした指導の工夫 講師：教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖　先生 内容：特別支援教育の視点を生かした指導の工夫について
11	22	ＪＳ研修会② 小学校の授業の参観、全体会、分科会

６　研究の成果

(1) 授業参観週間を２回実施するとともに、導入を工夫した授業を行うことによって、生徒の課題追究意欲を引き出すことができた。また、授業のユニバーサルデザインを取り入れることによって、支援が必要な生徒をより意識した授業を進めることができるようになり、教師の授業力向上につながった。

(2) 教科の授業だけでなく、学校行事等様々な場面で積極的に１人１台端末を活用することによって、生徒の個に応じた学習や主体的な学びの機会が増えるとともに、作業の効率化や合理化が図られた。

７　研究の課題

(1) 学力格差に対応した指導の在り方（上位層を伸ばす工夫、下位層への個別指導）

(2) 新学習指導要領に対応した評価方法の吟味（指導と評価の一体化、生徒同士の相互評価、自己評価）

(3) 授業のまとめや振り返りにおける記述力の育成

（記入者　増田　美保子）

三条中

自ら課題を見つけ、主体的に取り組む生徒の育成
～探究的な学習活動を通して～

（２年計画の２年次）

校長名　安田　眞理子

１　研究主題について

現代社会はグローバル化が進み､急速な情報化や技術革新が生活を劇的に変化させて　いる。このような変化の著しい社会の中で、将来を予測することが困難な時代を、子ど　もたちは自分を取り巻く様々な事象に主体的に向き合い、関わり合い、よりよい社会を　自ら創り出していくことが求められている。平成２９年告示の「学習指導要領解説総則　編」では「第１章総説」の中で、「学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に　向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念　的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値をつなげていくこと、複雑な状　況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」と書　かれている。このことから、多様に変化する社会を生きていく生徒に対し、変化に対応　する力、経験から学ぶ力、他者と共に協働的に行動する力が求められることが分かる。　本校では「豊かな心をもち、自ら学び、考え行動できる生徒の育成」を今年度の学校目　標として掲げている。基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるとともに、それらを　活用しながら、より深まりのある考え方のできる生徒を育んでいきたいと考えている。

本校生徒の昨年度の学習アンケート結果からは、「学ぶことが楽しい」という肯定的な考えをもった生徒が比較的多いというよい傾向が認められる一方で､「分からなくても質問しない」「発表をあまりしない」という主体性に課題がある生徒も認められた。　また、日常の授業の様子から、自分の考えを整理して表現するといった学習活動に苦手意識があることも感じられる。

そこで、今年度は総合的な学習の時間を中心に既存の学習で得た知識と経験をもとに自ら課題を見つけ対話を通して協働的に学びを進めることにより、思考を深めることの実感を生徒がもてれば､生徒の主体的・協働的な学びが深まり､共に生きる力を育むことにつながると考え、本研究課題を設定した。各教科で習得する「技能や知識」が相互に関連付けられ、状況に応じて適用したり、適切に活用したりできるように「思考力・判断力・表現力等」を育成し、学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性の取得につながるよう、授業改善とカリキュラムデザイン等について研究を進めていきたい。

２　研究のねらい

主体的に取り組む態度を育成するためには、自ら学ぶ意欲を喚起したり、生徒の心理的欲求を充足したりすることが大切である。「主体的に学習に取り組む態度」を発現させるために、生徒の「問い」を大切に、「学習者の視点」で「問題解決的な授業づくり」を目指す。生徒が解決したい課題を設定できるように、「授業の導入」や「動機付け」の工夫を行う。

３　研究仮説

「探究」を核として、教科と領域との関連を図りながら、生徒の「問い」を大切にした導入を工夫することにより、「自ら学ぶ意欲」が喚起され、自律的な学習過程をたどることができ、主体的に取り組む態度が育まれるのではないか。

４　研究内容

探究的な学習活動を支えていくために、各教科、領域において特に以下の項目を研究する。

(1)　「授業の導入」や「動機付け」を工夫する。
(2)　「学び方」の指導をする。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	校内研・授業の概要　等
4	2	校内研　経営方針・研究主題の共通理解、授業開き、三条中生の「話し方・聞き方」、中教研領域発表会までの取組について
5	19	校内研　防災教育について 講　師：弘前大学教育学部　教授　小岩直人 内　容：「三条中学校区の自然災害の特徴と防災教育」
6	25	校内研　道徳「中教研領域発表授業・道徳」研修会
10	1	中教研「領域・道徳」授業研究 学　年　教　材　名　授　業　者　指導助言者 １学年　捨てられた悲しみ　佐藤多圭志　教諭　高橋英臣（中沢中教頭） ２学年　「桃太郎」の鬼退治　油川　健　教諭　松倉知秀（白銀南中教頭） ３学年　闇の中の炎　工藤　睦深　教諭　大野　勉（市教委指導主事）
11	10	授業研究（計画訪問） 授業研究（要請訪問） 授業者：　夏坂　勝　教諭（３学年、総合的な学習の時間・防災教育） 指導助言：市教委教育指導課　石田　純也 主任指導主事

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
9	8	校内研　三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの考察①
9	16	校内研　クロームブック活用法 講　師：本校教諭　田中康友　教諭　油川　健　教諭 内　容：１人１台端末の操作について、はじめての遠隔授業について
10	18	授業参観週間（～10/22）
12	23	校内研　三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの考察②
2	18	校内研　次年度の研究主題について
3	17	校内研　三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒アンケートの考察③

６　研究の成果

(1) 道徳科の授業では、市中教研の領域・道徳の授業研究を通して、「考え議論する道徳」を展開していくための学習形態の工夫や発問の吟味等、授業改善に取り組むことができた。同時に全教師で意見を交換することで、研究を深めることができた。今年度の校内研のテーマの一つである導入の工夫について、動画や生徒の実生活に沿ったアンケートを用いる等、道徳的価値への動機付けのための工夫をすることによって、授業に対する生徒の興味・関心を高め、学習意欲につなげることができた。発問については、これまでの３年間、テーマ発問を意識して取り組んできたが、導入の発問と終末の発問を揃えることが考えの深まりにつながるということが確認できた。

(2) 総合的な学習の時間で「防災教育」に取り組んだが、「自助」「共助」「公助」の意識のもと学習を進めていくうちに、全教科に関わる、横断的な学習の要素がとても重要であることを認識できた。探究的な見方・考え方をもち、自ら課題を設定し、主体的に学習に取り組むことで、自分の将来を見つめ、地域や社会の一員であることの意義を考え、積極的に社会に参画しようとする態度を養うことができるということを学ぶことができた。

７　研究の課題

(1) 各教科、各領域の学習内容の特色を生かしながら、指導案の作成や授業改善に取り組んできたが「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業を完成することができたとは言えない。今年は特に授業の導入から課題設定までの教師の働きかけの工夫に取り組んできたが、まだ「教師が中心となって課題を設定してしまう」授業が多く見られる、引き続き、導入の工夫に取り組むとともに、総合的な学習の時間を核とした、教科横断的な探究学習に力を入れて取り組むことが必要である。

(2) 「三条中生の『話し方・聞き方』」については、ジョイントスクール推進事業で小学校と連携しながら進めている。小学校で指導されてきたことを土台として、自分の考えを整理して分かりやすく発表する態度を伸ばしたいと考えたが、学年が上がるにつれて不十分になる傾向が強い。生徒の意識の向上のための手立てを工夫したい。

（記入者　夏坂　勝）

明治中

「学びに向かう力」の育成
～主体的な学びを支える学習場面の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　岩　舘　　昇

１　研究主題について

山や川といった大自然に恵まれた環境で育った本校の生徒たちは、素直で純朴である。一方、人口の流動が少なく、幼少時からの固定化した狭い人間関係や社会の中で生活しており、他からの刺激や情報が少ないため、向上心や粘り強さに欠ける面がある。また、通常学級に在籍していても、授業の内容を理解するために、特別な支援を必要とする生徒が複数おり、学力の二極化が見られている。そのため、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに力を入れ、適切な配慮や支援のあり方の研究を進めてきた。

このような取組により、基礎力コンテストや学力診断テストの結果等において、徐々に学習意欲や基礎学力の向上という成果が見えてきた。一方、支援されることに慣れてしまい、生徒が自ら進んで考えたり、工夫して学習を進めたりといった、主体的に学んでいこうとする力が不足しているという課題が見えてきた。幼少時からの人間関係の固定化の影響による「関わりのスキル」の弱さや、進んで自己表現することや根拠をもとに話合いを深めることを苦手としている、という生徒の実態が影響していると考えられる。そういった面を乗りこえさせ、たくましく未来を切り開いていく力を身に付けさせる必要がある。そこで、主体的に学ぶことができる環境を整え、協働や対話活動を通して自己の考えを広げ、幅広く学んでいくことができるように工夫していくことが必要であると考え、本研究主題を設定した。

昨年度は感染症防止対策により実施・徹底が不十分だったため、研究２年目である本年度は生徒が主体的に学ぶ意欲を高めるために、生徒間の相互意見交換、探究活動を取組の中心に据え、到達目標の明確化や思考過程の可視化を通して、目標達成のための教材や学習活動を工夫していくこととする。年間を通して授業改善チェックシートの集計結果をもとに、教員自身の授業の成果や悩みについて共有、あるいは協議するとともに、到達目標や指導の手立てが主体的に学ぶ意欲を高める上で効果的であったかどうかを生徒に調査することにより、授業改善に役立てていきたい。

２　研究のねらい

生徒が自分で考え問題解決に取り組む力を育てるために、明確な到達目標の提示、生徒同士が協働・対話を通して解決する場面の設定、思考過程の可視化（思考ツールやホワイトボード等の活用）を通して、教材・学習形態・授業の導入を工夫する。また、生徒自身に学習意欲と授業内容の理解の高まりを実感させる指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業において明確な到達目標を示し、生徒が主体的に取り組めるように学習形態や教材、授業展開を工夫し、実践を積み重ねることにより、生徒の主体的・対話的に学ぶ意欲が向上するとともに、学習内容への理解が深まって基礎・基本が定着し、学びに向かう力を育成することができる。

４　研究内容

(1) 相互授業公開の実施
- ア　明確な到達目標の提示と、目標達成のための学習形態や教材、授業展開の工夫に留意した相互授業公開を行う。
- イ　公開授業後に生徒対象アンケートを実施し、集計・分析する。
- ウ　研究協議を行い、授業改善に努める。

(2) 授業改善チェックシートの実施
- ア　教員対象の授業改善チェックシートの項目を精選し、実施方法を工夫する。
- イ　定期的に授業改善チェックシートによるアンケートを行い、研究実践内容を確認する。

(3) 生徒理解を目的とした諸検査および基礎力コンテストの実施と活用
- ア　知能検査やその他諸検査の結果を、全教員で共有、分析し、授業改善に活かす。
- イ　年に２回、Ｑ－Ｕ検査を実施し、その結果を全教員で分析、共有し、生徒理解に活かす。
- ウ　学習意欲向上のための手段として基礎力コンテストを実施し、学習習慣の確立を図る。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
4	5	全体会（共通理解）研究主題・副題
4	19	第１回授業研究（全校Chromebook活用学習） 総合的な学習の時間　授業者　太田　也主志
4	26	第２回授業研究（全校Chromebook活用学習） 総合的な学習の時間　授業者　岩舘　昇
5	26	全体会（共通理解）学習指導案の書き方
5	31	第３回授業研究（相互授業公開） １年技術・家庭　授業者　北川　里佳「衣服の手入れ」」
6	25	全体会（授業改善チェックシート結果の共有と方向性の検討）
10	27	全体会（授業改善チェックシート結果の共有と方向性の検討）
11	4	教育指導課・総合教育センター計画訪問
12	14	第４回授業研究（相互授業公開） ２年道徳　授業者　戸田　恵美「秀さんの心」」
1	19	全体会（授業改善チェックシート結果の共有と方向性の検討）
1	25	第５回授業研究（相互授業公開） １年道徳　授業者　夏坂　久美子「私が働く理由」
2	1	第６回授業研究（相互授業公開） ３年道徳　授業者　太田　也主志「鮨職人小野二郎さんの生き方」
2	3	第７回授業研究（相互授業公開） ２年理科　授業者　蔦谷　康司「結露とはどういう現象か」
2	7	第８回授業研究（相互授業公開） １年数学　授業者　髙橋　昭「空間内の平面と直線」
2	8	第９回授業研究（相互授業公開） １年数学　授業者　石沢　正彦「作図の演習」
2	9	第10回授業研究　（相互公開授業） 1年音楽　授業者　沢森　真奈美「日本の民謡」
3	2	道徳校内研究（要請訪問） 講師　教育指導課　主任指導主事　大野　勉「発問の工夫～ゆさぶり発問」

(2) 一般研修

月	日	内 容 ・ 講 師 ・ 概 要 等
4	5	第１回生徒理解会議
8	18	第１回道徳適性検査の分析・考察と共通理解
8	18	第１回Ｑ－Ｕ検査の分析・考察と共通理解
1	19	第２回Ｑ－Ｕ結果の分析・考察と共通理解
1	19	第２回生徒理解会議

６　研究の成果

(1) 話し合いや教え合いの活動により作業の進度差が少なくなった。観察や生活アンケートの分析から、自分の考えを発表できる生徒が徐々に増え、授業が楽しいと感じる傾向が高まった。

(2) 単元の終わりに学習内容と自分を結び付けられるように、自分の考えを文章化する課題を出し評価に活かした。既習事項の確認やまとめる場面では、思考ツールの活用が効果的で生徒が興味をもって参加するようになった。

(3) Chromebookを活用し、感想の記入・分からないことを調べる・資料の共有、協同でまとめさせることへの活用を試みた。周囲から学ぶなか、各学年で発表が上達した生徒が見られた。また、デジタル教材をICT機器で示して授業内容のまとめ動画の視聴やシミュレーション活動を取り入れたことで、主体的な学びに向かうきっかけ作りができた。

７　研究の課題

(1) 授業改善チェックシートの集計結果より、「根拠や理由をつけて話す」指導が難しいと教師が感じていることが分かる。今後は発問のしかたや話合いの深め方の工夫が重要であり、根気強い指導が継続して必要である。

(2) 道徳や総合的な学習の時間の授業をはじめ、諸活動を通してChromebookを活用した取組を重ねてきたが、学習を補助するはずが充電不足や家に忘れてくる等の生徒が見られたため、学習規律の徹底を図り、さらに自律した行動ができる生徒の育成を図ることが必要である。

（記入者　戸田　恵美）

市川中

見方・考え方を働かせながら、
自分の考えを広げ深める学習指導の在り方

～言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　老久保　智

１　研究主題について

本校は昨年度から、今年度より全面実施される新学習指導要領において、学習内容を学ぶことで「何ができるようになるか」という視点を重視するとともに、「資質・能力」を育むための、各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・考え方」と捉え、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んできた。しかし教育指導課・総合教育センター訪問の縮小実施や校内での研究授業を行うことができず、校内研究のテーマに迫った研究が思うようにできなかった。そこで、昨年度にそれぞれ各自で進めてきた授業における学習課題や場面の設定の工夫と、振り返り活動の取り入れ方の工夫を共有できるよう、改めて本主題を設定することにした。

２　研究のねらい

自分の考えを広げ深める学習指導の在り方を、各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫すること、言語活動を取り入れ論理的な思考場面を取り入れること、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を工夫して設けることを通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫することと、言語活動を取り入れ論理的な思考場面を設定することで、知識・理解の質を高め資質・能力を育むことができる。

(2) 生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を工夫して設けることで、目標をもって学習に向かう姿勢や多面的、多角的にものごとを捉え考える力を養うことができる。

４　研究内容

(1) 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせやすい学習課題を設定した授業を実践する。また、言語活動を取り入れ、論理的な思考場面を設定する。

(2) 授業の中に振り返りの場を設定し、「何ができるようになったか」を明確にし、次への意欲につなげるようにする。振り返りシートなどを活用し、変容を見取る評価の方法を工夫する。

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等
１０	１３	授業研究①（初任者研修）１年社会　授業者　中村　鴻作 講師　坂井　一史（初任者研修拠点校指導教員） 題材名「都市化が進む東南アジア」
１０	１５	授業研究②（要請訪問）　３年社会　授業者　山端　研人 講師　大下　洋一（八戸市総合教育センター主任指導主事） 題材名「あなたは将来何のために働く？」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	２６	新学習指導要領における観点別評価と５段階評価の整合性に関する研修 講師　日向端　聖（八戸市教育委員会教育指導課副参事）
6	2	通信票に掲載する各教科の観点別評価基準に関する研修
7	7	教育指導課・総合教育センター訪問の指導案の書き方に関する研修
8	１７	教育課程報告書の読み合わせ（領域部会・教科部会） ＮＲＴの分析（教科部会）
１１	4	言語活動の工夫、振り返りの場の設定の工夫に関する研修
１１	１８	学校等における法務相談体制整備に関する研修 講師　上野　大輔（たいよう総合法律経済事務局弁護士）
2	2	次年度における校内研修研究主題の確認

６　研究の成果

(1) １人１台端末を活用した授業研究を２回行い、活用方法やその有効性を教員同士で共有することができた。

(2) 新学習指導要領における観点別評価と５段階評価の整合性について、全教員で共通理解を図ることができた。

７　研究の課題

(1) 校内研究のテーマに基づいた授業研究を行うことで、言語活動の工夫、振り返りの場の設定の工夫について意見交換をすることができた。様々な領域や教科での実践例を交換し合うことができたので、次年度はお互いにそれらの良いところを取り入れ、さらに工夫改善に努めていきたい。

（記入者　澤田　新吾）

豊崎中

「なぜ」と問い、見通しをもって共に学び合える生徒の育成はいかにあればよいか

（３年計画の３年次）

校長　　横　濵　由　紀

１　研究主題について

昨年度の研究成果は以下の通りである。

・課題の工夫により生徒の学ぶ目的が明確化し、学びが活性化した。その結果、学びの中から疑問が生まれ、探究心の向上につながった。また、自分の意見を積極的に発信することで話合いが活発になり、学びが深化した。

・授業の始めに今日の流れを視覚化しゴールイメージをもたせることで見通しができ、授業の終わりに振り返りをすることで､自分ができたことや今日のポイントを文字化することができた。その結果､「わかった！できた！身についた！」を実感することができた。

・スクリーンにプリントや教科書を投影したり､プレゼンテーションソフトを導入した説明など、教材を視覚化したりすることで、生徒の内容理解がスムーズであった。また、全職員による道徳実践、オリジナル道徳ノートの活用、議論する道徳の実践により、正解のない問いに自分なりの考えをもち議論することで、最適解（納得解）を導き出すことができた。

一方、急速に社会が変化する中、次代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや他者と切磋琢磨しながら変化に対応する能力や資質が一層求められている。そこで、今年度は、昨年度までの探究型授業の充実に加え、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成と発信力の向上を目指し、研究を進めたい。

２　研究のねらい

「なぜ」と問い、見通しをもって共に学び合える生徒を育成するために、各教科・領域の特性を踏まえた見方・考え方を核とした「深い学び」の在り方を研究する。

３　研究仮説

(1) 学びや変容を自覚する場面を設定することで、生徒は「わかった！できた！身についた！」を実感することができる。

(2) 「なぜ」「何のために」と学びの本質を捉えることにより、自分事として捉え、生徒自ら主体的に学ぼうとする意欲や態度を育成できる。

(3) 生徒一人一人の特性に応じた授業のユニバーサルデザインや互いに教え合い学び合える授業の工夫により、考えを深めることができる。

４　研究内容

(1) 確かな学力を育むために、教師の授業力の向上を図る。

ア　導入部分や発問の工夫により生徒の学習意欲を喚起し、主体的な学びにつなげる。

イ　見通しと振り返りの場の設定の工夫により、学びや変容の自覚を図る。

ウ　探究型・課題解決型の授業を展開するために、生徒が考える場面と教師が教える場面の組み立て方を工夫し、学びの深まりを図る。

(2) 「なぜ」と問い、自ら進んで発信できる生徒の育成を図る。

ア　各教科等の授業のみならずあらゆる教育活動を通して、“問いを立てる”“発信する”をテーマに生徒の主体的な取組や言語活動を推進する。

イ　インクルーシブ教育の視点に立った教育を推進する。

①　授業のユニバーサルデザインやＩＣＴの活用など効果的な指導の手立てを、全教職員が共有できる環境整備を行う。

②　少人数のメリットを生かして、一人一人の特性を捉え、正しい生徒理解と個別指導の充実を図る。

(3) 道徳の推進やキャリア教育講演会等の取組による学び合いの質の向上と生徒が議論し探究するための技能と態度の育成を行う。

(4) その他

諸検査やアンケート調査の結果を分析し、生徒の実態に即した指導を行うことにより、基礎的・基本的な知識・技能の習得や活用できる力の育成を目指す。

以上の実践を、実効性あるものとするために、全員が授業公開し、授業技術の向上を目指す。

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等　　全体会等
10	12	教科：音楽　　学年：３年　　授業者：沢口　美津子 題材：変化と対応 仮説：曲を比較しながら聴くことで、生徒の音楽的な見方・考え方を働かせることができ、深い学びを実現することができる。 検証：グループ活動、ワークシート 成果：・楽譜を忠実に読むことができるようになった。 ・わからない音楽用語を周りに聞いたり調べたりすることができた。 ・グループ活動をすることで、自分以外の意見を聞き新たな発見に気付くことができた。 課題：・興味をもって活動する生徒とそうでない生徒の差があるので、しかけを工夫していかなければならない。 ・「なるほど～」と瞬時に思うだけで、生活に活かしてみようというところまでの結びつきがまだ弱いので、こちら側の発信が必要である。
11	5	教科：英語　　学年：３年　　授業者：葛西　良子 題材：Lesson 4 The World's Manga and Anime 仮説：逆算的な単元構想に基づき舞時間の目標設定を工夫することで、生徒が文法を習得する必要感をもち、主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てることができる。 検証：グループ活動、ワークシート 成果：・「『最終的には初見の長文（２００語程度）の概要を読み取る』ことをゴールとし、そのために『関係代名詞（主格)』の役割を知る必要がある」ということを理解した上で、見通しをもった学習を進めることができた。 ・個人で約５０語の概要→グループで約３００語の概要→個人で入試風問題（グループと同じ問題）→個人で２００語の概要（初見）と徐々に長文に慣れさせることができた。 ・グループに問いを与え、分割された長文をグループ内で読み取り、その情報をワールドカフェ式に話し合っていく中で答えを見出していくという段階を踏んだ演習を行うことで、長文読解に対する抵抗感が払拭できた。(生徒アンケート結果) ・教師側で生徒に目的意識をもたせる工夫をしたため、生徒は文法を学ぶ必要性を感じた上で活動に取り組むことができた。また、本時で学習したことをもとに、思考・判断・表現を意識した試験問題を教師が作成し実施した。 ・本時の活動を受けて、生徒は自分たちで他の資料を調べ、英語でプレゼンを行う活動につなげることができた。さらに、そのスライドを使用してパフォーマンステスト（記憶に残る評価）をできた。 課題：・能力に応じたプリントやグループ活動のさせ方の吟味など、全ての生徒が個々に課題に取り組めるような教師側の工夫が必要である。 ・力がついたかどうかの検証方法を工夫する必要がある。 ・生徒の本来の問いになるために、教師側の提示の仕方を工夫する必要がある。

11	12	教科：数学　　学年：１年　　授業者：伊藤　広哉 題材：変化と対応 仮説：・教え合い、学び合う場の設定 ・本時の流れが一目で分かるような板書の工夫 ・演習問題の精選と工夫 を意識した授業を展開することにより、教え合い、学び合い、計算技能の習得や内容の理解が進化する。 検証：授業中の話合い活動とワークシート、単元テスト 成果：・全員解答を目指し、教え合い活動、学び合い活動が活発化した。 ・発表させる場面を多く設定することで､生徒の説明する力も向上した。 課題：・授業者側でかなり誘導しないと解決にたどり着けないことが多い。次年度は「かなり」の部分をとれるようこちらも課題提示の仕方を工夫する必要がある。 ・できたつもり、わかったつもりになっている生徒もいる。あまりに明確に答えを導く授業よりも、疑問をもたせ確認・検証するような授業形態を研究する必要がある。
11	24	教科：保健体育　　学年：３年　　授業者：尾崎　元子 題材：フットサル 仮説：・学び合い教え合う場面の工夫 ・視覚化を意識した板書の工夫 ・学習ノート（振り返り）の工夫 を授業の中で意図的に設定し、他者と関わり合い、諸問題を自分のこととして考えさせることで、技能の習得や内容の理解が深まる。 検証：グループ活動を通しての学び合い 成果：・学習課題を全員で達成しようと、建設的な話合いになった。 ・どうしたらできるのか、自分よりできる仲間に聞きにいける。聞かれた仲間もできるようなるまで献身的に教える。 ・ゲームが終わるたびの振り返りでは、自分のできなかったことを自分で話せる。 課題：・学び合いの場を設定しても、ポイントを掲示しないと、ポイントが何かわからず、ただ運動をしているだけのグループがあった。（巡回中に指摘する） ・練習してからのゲームの内容が、練習が活かされていない。ゲームに活かされるような意識をもっての練習が必要である。
11	30	教科：英語　　学年：１年　　授業者：丸屋　百合奈 題材：数をたずねる疑問文とその答え方 仮説：学びや変容を自覚する場面を設定することで、生徒は「わかった！できた！身についた！」を実感することができる。 検証：ワークシート 成果：振り返りの場面で、できるようになったことを多く書くことができ、生徒は身についたを実感することができた。 課題：生徒の意欲が持続するために教師側の仕掛けが必要である。
12	3	教科：理科　　学年：１年　　授業者：大嶋　知子 題材：混合物から純粋な物質を取り出す（蒸留） 仮説：学びや変容を自覚する場面を設定することで、生徒は「わかった！できた！身についた！」を実感することができる。 検証：ワークシート

		成果：既習事項を振り返る場面や終末の本時の振り返りの場面を設定することで、生徒にわかったことを実感させることができた。 課題：学びを深めるために、実験が成功したか失敗したかだけでなく、「なぜ失敗したのか」と振り返る視点が必要である。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	21	校内研修 キャリア教育研修会 ・キャリアノートの使い方について １人１台端末活用研修会 ・クラスルームの作り方について
5	26	要請一般研修 授業改善と評価の工夫について 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一　氏
5	27	要請一般研修 １人１台端末活用研修 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏
7	10	特別支援教育に関する研修 講師：山形大学教職大学院　特別支援教育分野教授　三浦　光哉　氏 演題：特別支援教育の理解と支援 内容：①巡回相談とスクリーニング ②学級経営の基本（環境調整） ③発達障害の理解と支援 ④スクリーニング結果の情報共有
7～8月		夏期講習会等への参加(校外研修)
8	4	道徳模擬授業研修会（小中JSにて） 講師：八戸市立是川小学校　校長　佐々木　宏恵　氏
8	18	校内研修 ・指導案検討会
8	18	要請一般研修 特別な支援を要する生徒への支援の在り方 講師：八戸市こども支援センター　主任指導主事　佐藤　佳子　氏
10	6	校内研修 ・生徒に関する情報交換 ・新体力テストから見た本校生徒の実態分析 ・諸検査分析と今後の指導の方針検討会

６　研究の成果

(1) 教師が教える場面と生徒が考える場面、まとめる場面の組み立て方を工夫し、生徒の学びの深まりを図ることができた。
(2) 全教員による道徳の授業実践を通し、学び合いの質の向上と生徒が議論し探究するための技能と態度の育成を行うことができた。実践が教科や行事、係活動など他の活動にも活かされた。
(3) 全教員が公開授業を行うことで、お互いの授業を見合うことができ、授業改善に役立った。

７　研究の課題

(1) 生徒から出てきた問いで課題を設定するために、生徒の「なぜだろう」を引き出す導入の仕方の工夫が必要である。
(2) 指導と評価の一体化を図るために、主体的に取り組む態度の適切な評価のための研修が必要である。
(3) 探究的な学びを推進するために、総合的な学習の時間を柱とする計画の見直しが必要である。

（記入者　　大嶋　知子）

大館中

主体的に学習に取り組む生徒の育成

～生徒の学習改善につながる評価の工夫～

（１年計画の１年次）

校長　　本　間　孝　浩

１　研究主題について

本校の学校目標である、「自分の良さを強みに変え、目標に向かい努力する生徒」に迫るため、上記の研究主題を設定した。

昨年度までは、『説明力・表現力の向上』を研究主題とし、「わかりやすく伝え合う学習を通して」を副題として取り組んだが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、授業内の活動も制限されたため、「伝え合う」場面を十分に設けることができなかった。

今年度は感染症対策を意識した授業を継続しながらも、教員に対するアンケートから、新学習指導要領の全面実施にともない「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法について課題意識をもっている教員が多いことが分かったので、研究テーマとして設定した。目標やねらいと学習活動の整合性を図り、生徒自らが学習改善に取り組めるような評価場面を意図的に設定することで、本校の研究テーマである「主体的に学ぶ生徒の育成」を目指す。また、この研究が全生徒の「わかった、できた、身についた」の実感となり、学校目標「自分の良さを強みに変え、目標に向かい努力する生徒」の具現化に迫るべく研究を進めていきたい。

２　研究のねらい

生徒の学習改善や学習意欲の高揚につながることをねらいとする評価の実施により、主体的に学習に取り組む生徒を育てる。

３　研究仮説

(1) 授業の目標や学習活動のねらいを明確に示し、学習方法を生徒同士が改良・調整を促す場面や、教師による学習方法の軌道修正や動機づけの場面を意図的に設定することで、生徒の主体的な学習改善につながると考える。

(2) 各教科において評価結果や振り返りを通して、自分の成長や身についた力を自覚することで、学習に対する意欲の高揚や理解の深化につながると考える。

４．研究内容

(1) 年間指導計画・単元指導計画を参照し、「本単元を通してどのような力をつけさせるのか」という単元の最終目標と、そのために「本時ではどのような方法で、どのような力をつけさせるのか」という本時の目標及び各学習活動のねらいのつながりを明確にする。

(2) 生徒から「問い」や「思い」を引き出し、自分自身の学習課題として取り組めるよう、資料や課題の提示の仕方を工夫する。技能教科や知識・技能を身に付ける場合でも発問を工夫し、生徒が主体的に学習に取り組めるような課題提示をする。【市の重点内容】

(3) 学習課題と学習内容の整合性を図り、教師が学習の状況を適切に見取ったり、生徒自身が振り返ったりする場面を意図的に設定する。【校内研の重点内容】

(4) 教師の見取りや生徒の振り返りが生かされるよう、同じまたは類似した内容を繰り返し扱ったり、同じまたは類似した方法で解決できる学習課題・学習内容を設定したりするなど、(3)で評価したことが生かされるよう学習過程の構造化を図る。

５．研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
４	５	第１回校内研 概　要：生徒の学習改善につながる評価の工夫についての研究 今年度の校内研についての共通理解
４	２７	第２回校内研 概　要：指導案の書き方等共通理解
７	１４	第３回校内研・公開授業　今(社)　中園(数)　苫米地(国)　窪田(英)　池田(数)
８	１９	１学期生徒授業評価（仮説検証及び授業改善に向けての分析）：各教科部会
１０	６	第４回校内研・公開授業　石谷(理)　久慈(数)　相馬(技)　窪田(英) 田端(数)　佐々木(誉)(体)　池田(数)
１１	５	第５回校内研・公開授業　今(社)　寺井(国・特)　教頭(英)　木南(英) 三浦(音)　佐々木(信)　窪田(英)　池田(数)
１２	１	第６回校内研・公開授業　今(社)　岩舘(家)　教頭(英)　田中(社・特) 窪田(英)　池田(数)
１	５	２学期生徒授業評価（仮説検証及び授業改善に向けての分析）：各教科部会
１	１９	第７回校内研・公開授業　橋本(体)　今(社)　栃木(理)　窪田(英)　池田(数)
２	２	第８回校内研・公開授業　今(社)　教頭(英)　廣田(美)　窪田(英)　池田(数)

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	５	生徒理解研修
５	２５	一般研修　『　１人１台端末活用研修　』(リモート) 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　先生 内容：休校措置に伴う一人一台端末によるリモート授業の運用について
７	２１	青森県中学校教育課程研究集会（各教科で資料研修）

６　研究の成果

(1) 自らの学習方法を振り返る場面を設定することで、学習方法を分析したり、分かったことやつまずきを自覚させ、自分自身の成長や変容が、次時への意欲につながった。
(2) 生徒同士の活動や振り返りによって、次の学習の動機付けや軌道修正につながり、そのことが良好な集団づくりと安心感のある学習環境づくりにつながった。
(3) (1)(2)を指導者が見取ることにより、指導者が生徒の理解の状況やつまずきを把握し、授業改善につなげることができた。

７　研究の課題

(1) 授業評価アンケートによると、仲間からの指摘やアドバイスが自分の学び方を選んだり工夫したりする際に最も参考になると感じた生徒が６２％であった。知識・技能、思考力・判断力・表現力を身に付けさせるために、生徒同士の活動場面をより多く、意図的に設定し、生徒の振り返りや評価が生かされるような学習課題の設定や単元計画が必要である。
(2) 年６回の全教員による公開授業を設定したが、共有したり議論したりする時間がなかったため、授業者の達成感が得られなかった。参観する目的や観る視点を明確にし、授業参観の必要性を感じ取れるような工夫が必要である。

（記入者　今　　昌子）

東中

課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成

～「自発的行動力」の向上を促す指導を通して～

（２年計画の１年次）

校長　　千　葉　　誠

１．研究主題について

本校では，昨年度まで「自己実現に向けて主体的に取り組む生徒の育成」の研究主題のもと，キャリア教育や特別支援教育の視点を生かした授業づくりに取り組んできた。しかし，自ら課題を設定し，その達成に向けて取り組んでいこうとする課題設定能力や解決能力，主体的に取り組んでいこうとする姿勢を充分に育成することができなかったという課題が残った。

今年度は上記の課題を解決していくために，「自発的行動力」の向上を促す指導を取り入れることとした。「自発性」の向上を促す指導を継続して行うことを通して，他からの働きかけがなくても，自ら進んで取り組もうとする内的な欲求の高揚が見られ，さらに行動力を訓練していくことを通したスキルの向上との相互作用により，課題の解決に向けて主体的に取り組める生徒が育成できると考え，本研究主題を設定した。

尚，本研究では「自発的行動力」を，「自発的」は自分から行動を起こしていこう，起こしていきたいとする内的な欲求，「行動力」とは自ら考えたことを実行に移すことができるスキルと捉えている。

２．研究のねらい

主体的な行動力を育成するためには，課題設定やその解決も含めて生徒の内面に宿る「自分から動きたい」という欲求が大きなウェートを占めていると考える。また，効果的な目標達成をサポートするコミュニケーションの手法であるコーチングの手法を用いることによって，内的な欲求を高めていくことが可能となる。加えて，考えたことを実行に移していくトレーニングを，単発的ではなく繰り返して行う指導を通して行動力が育成され，「自発的行動力」の向上を促すことができることを検証したい。また，「自発的行動力」が身に付くことが，課題の設定や解決の能力，主体的に取り組んでいく姿勢の向上などにも繋がり，「主体的・対話的で深い学び」を実践していくための根幹となるスキルであるとも考える。

３．研究仮設

先述の通り「自発的行動力」は，「自発性」を促し，「行動力」を習得させることにより育成されるスキルである。これを身に付けさせるためには，内的な欲求の高まりを促していくことと考えたことを実行に移すことができるスキルを育成していく必要がある。「自発性」を促すために，コーチングの手法（コーチングセッション）を取り入れた指導を継続的に実践していくことが効果的であると考えた。これは，ニュートラルな状態で話を聴いてもらう（傾聴してもらう）経験が思考訓練に繋がり，自分の目的や目標の設定，行動計画，自己理解を深めていくことがいくことのきっかけとも成り得ると考える。また，「行動力」については，例えば，今できることをすぐに実行するとか実行すべきだと思うことを明確にしておくなど，習慣化させることによって身に付いていくスキルだと考える。そのためには，実際に行動に移していくための計画や留意点等を考えさせる継続的な指導をしていく必要があるとも考える。

以上のように「自発的行動力」の向上を促す指導を継続的に行っていくことにより，課題の設定や解決の能力，主体的に取り組んでいく姿勢の向上等にも繋がるものと考える。

４．研究内容

(1) コーチングについての理解を深める。

ア コーチングの定義や考え方についての理解を深める。

イ コーチングセッションのステップについての理解を深める。

(2) ９blocks を効果的に活用する。

(3) １人１台端末を効果的に活用する。

(4) 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

(5) ＩＣＴ機器を効果的に活用した授業づくり

５．年間計画

(1) 研究仮設に基づく授業研究

実施していない。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
５	１３	１人１台端末の活用について　「Ｍｅｅｔ」によるオンライン研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井一二三　氏 今年度の校内研究の主題について
６	２４	コーチングについて 傾聴スキル，承認スキル，質問スキル
８	１８	コーチングについて 「コーチング」と「ティーチング」の違いについて 発達障害について 政府広報オンラインより
１０	２７	９BLOCKS（マンダラチャート）について
１１	１６	９BLOCKS（マンダラチャート）について
１	１９	校内研究のまとめ

６　研究の成果

(1) コーチングの手法（コーチングセッション）を取り入れた指導については，傾聴，承認，質問の仕方について研修を行い，今までの質問の仕方から変えていきたいなどの声が上がっていたことから，教師側がコーチングの手法を取り入れていこうとする意欲や変化が見られた。

(2) 行動力については，９blocs に全学年で取り組み，生徒自身が自らの目標を設定し，その達成のための見通しを考え，考えたことを実践していく活動を展開することができた。

７　研究の課題

(1) コーチングの手法を取り入れたことによって，生徒の「自発的行動力」を促すことができたのかについての検証が不十分である。

(2) ９blocs を用いて，生徒自身に見通しを立てさせ，ブランチ（枝）が達成できたかを判断させたが，判断基準が曖昧であるやトランク（幹）そのものの立てさせ方が重要であるなどの意見があった。

（記入者　新保　義彦）

中沢中

自ら学ぶ力の育成
～自己調整学習を通して～

（２年計画の１年次）

校長　　瀧野　貢二

１　研究主題について

本研究主題は、昨年度までの研究主題「主体的に学習する生徒の育成～焦点化、動作化、視覚化、共有化～」にもとづく３年間の研究を経て、本年度新たに設定した。昨年度までの研究は、教師側の授業技術の向上を目指して行われたものであり、その結果、授業技術向上のためのさまざまな手法を教師間で共有できたので、それを各教師が実践しつつ、今年度は生徒の学習意欲や学習方法にダイレクトに関与していく方法として「自己調整学習」の考え方に基づいた研究をしていくこととした。

「自己調整学習」は、「予見段階（課題を分析し、計画を立てる）」「遂行段階（実践しながら自分で自分を観察する）」「自己内省段階（自己評価と結果と原因の分析など）」の「循環的段階モデル」と呼ばれるプロセスにのっとった学習方法であるが、本校では学習に限らず、行事や一年間の目標などにも「自己調整学習」のプロセスを取り入れ、「予見・遂行・自己内省」の一連の流れを繰り返すことで、生徒の「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。

２　研究のねらい

「自己調整学習」の考え方の中の「循環的段階モデル」という学びのプロセスを、学習を含めた諸活動に取り入れていくことで、生徒自身が自分の学びを計画し、実践し、自己評価して次につなげていく姿勢を身につけることを目指す。その姿勢を身につけさせることが「自ら学ぶ力の育成」であり、それによって諸活動に向かう際の意欲や主体性を高めることができるのではないかと考えている。そのためには、ただこのプロセスを取り入れるだけではなく、教師が積極的に模範を示す「モデリング」の役割を果たす必要がある。生徒がより効果的に、意欲的に学べるよう、よりよい計画の在り方や学び方、適切な自己評価の在り方などを示し、導いていくための方法を研究し、「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。今年度は１年目であるので、どの行事や学習活動の中で「自己調整学習」が取り入れられるのか、また、教師の効果的な導き方などを研究し、年２回行うＱＵの学習意欲に関するアンケートや、学校独自で作成する学習意欲に関するアンケート結果の分析などを行い、生徒の変容を見ていきたい。

３　研究仮説

「自己調整学習」の「予見・遂行・自己内省段階」のプロセスを、学習を含めた諸活動に繰り返し取り入れていくことで、生徒自身に自然にそのプロセスが身についていくと考える。また、そのプロセスを形だけ導入するのではなく、各段階において教師が良い計画の立て方、学習の仕方、適切な自己評価の在り方などを示すことで、生徒がよりよい方法を学び、選べるように導いていくことができる。その結果、自分で自分の学びをコントロールし、より良い方法を選びながら意欲的に学ぶ生徒の育成が果たされると考える。

４　研究内容

(1) 「自己調整学習」のプロセスを諸活動に取り入れていくタイミングやワークシートの在り方を研究する。
(2) 課題解決のためにどんな力が必要とされ、どんな考え方や学習方法があるのかを生徒に明示できるように、教材研究を徹底する。
(3) 生徒の「予見・遂行・自己内省」の様子を見守り、生徒の意欲を高めるためのアドバイスのタイミングや在り方を研究する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究等
４	５	第１回校内研……校内研テーマの確認「自己調整学習」について
５	２１	第２回校内研……「自己調整学習」の授業への取り入れ方について
５	２６	第３回校内研……「自己調整学習」に基づいた教材研究
６	４	ＪＳ中学校公開授業
８	４	第５回校内研……「自己調整学習」を取り入れた授業実施予定
８～９月		授業参観月間
１０	５	教育指導課・センター訪問
１２	８	第８回校内研……「自己調整学習」（教科の授業）の実践報告と課題
１	２６	第９回校内研……今年度の研究のまとめと次年度に向けての協議

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２８	臨時校内研……発達障害について
６	３０	第４回校内研……ＱＵ①（６月実施）のアンケート結果分析と考察
９	２９	第６回校内研……一人一台端末研修会（オンライン）
１１	１７	第７回校内研……食育発表会に向けての検討・確認
１１	２４	ＪＳ情報交換会（小中の実態把握と今後の取り組みについて）
１	２６	第９回校内研……ＱＵ②（１１月実施）のアンケート結果分析と考察

６　研究の成果

(1) 各種アンケート（自尊感情アンケート―そばセット―・ＱＵ・自己調整学習アンケート）の分析を行い、様々な視点からの生徒理解を深め、日々の指導に役立てることができた。

(2) 自己調整学習の流れを学校行事に取り入れ、目標設定から実行、振り返りという作業を毎日繰り返した結果、行事への一人一人の参加意識が高まり、行事後の達成感を感じる生徒が多くなった。

(3) 相互授業参観月間に各教科で自己調整学習を取り入れた授業を行い、授業を実践した感想と参観した感想とをまとめ、その成果と課題を教師間で共有できた。その結果、課題が明確になり、次年度の取り組みの工夫すべき点を把握することができた。

(4) 各種アンケートの分析では、6月と11月とを比べると3年生の数値がどのアンケートでも伸びており、学習意欲や自尊感情が高まっていると判断できる。1、2年を含めた全校集計を見てみると、「自尊感情アンケート―そばセット―」（6月・11月実施）では、６月に比べて11月の数値において、18項目中10項目で上昇が見られた（数値が高いほど自尊感情が高い状態を示す）。また、「自己調整学習アンケート」では、意欲を図る項目で数値が上昇していた。以上の結果を総合して考えると、自己調整学習の流れを教育活動に取り入れたことが、生徒の学習意欲や自尊感情を高めた一つの要因になっているのではないかと推測できる。

７　研究の課題

(1) 自己調整学習を教科の学習に取り入れようとしたときに、課題を分析したり、目標を設定し、学習後に振り返るという一連の流れに多くの時間を割かれるという問題が、第８回校内研の話合いの中で挙げられた。次年度に向けて、少ない授業時数の中で、どのタイミングで、どの教材で、いかに効率的に自己調整学習を導入していくかを模索しなければならない。

(2) 教師側が自己調整学習に対する理解を深め、自己調整学習を進めていくための様々な力を向上させていく必要性がある。本校の校内研では自己調整学習の流れを諸活動の中で繰り返すことによって、そのプロセスを生徒が自然に身につけることを目指しているが、そもそも、「自己内省」自体を面倒くさがり、自己内省が十分にできていない生徒がいるように見受けられる。そのような生徒への指導・支援の在り方を模索しり、また、目標を達成するための様々な手法を示す「モデリング」の役割を担う教師側の指導・支援のテクニックを向上させていかなければならない。

（記入者　　宮重　真由美）

島守中

主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成

～ＩＣＴとツールの活用を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　米田　裕子

１　研究主題について

昨年度は、主題を「主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成～思考力・判断力・表現力の育成場面の設定を通して～」とし、研究に取り組んだ。

各教科において、言語活動を多く取り入れ、思考力・判断力・表現力の育成を目指したことで、生徒たちは根拠をもとに考え、判断し、表現することができるようになってきた。また、思考・判断するための手立てを工夫し取り組ませた結果、表現しやすい方法で答えるようになり、主体的に学び、考え、表現しようと粘り強く取り組む姿勢がみられるようになった。

しかしながら、さらなる個に応じた指導の充実のためには、学習過程や成果を的確に把握し、指導の改善につながる評価を工夫することが必要である。また、Chromebook を始めとした ICT や思考ツール等のさまざまなアイテムの効果的な活用も必須である。実践していく中で子どもたちの状況を正しく把握し、どのように変容していったかを探ることで、さらに、主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成を目指そうと考えた。

２　研究のねらい

「主体的に学び、考え、表現できる生徒」を育てるためには、目指す資質・能力を明確にし、基礎・基本となる知識・技能をしっかり身につけさせることが必要である。ICT とさまざまなツールを効果的に活用することにより、対話的で深い学びを実現し、確かな学力を身につけさせるとともに、粘り強さと自信をもって主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成を目指したい。

３　研究仮説

特別支援教育の視点を取り入れたわかる授業を基盤とし、各教科はもちろん、領域においても積極的に ICT とツールの活用を行う。これにより、身につけた基礎的・基本的な知識・技能を活用し、見方・考え方を働かせて、主体的に学び、考え、表現しようとする生徒の育成につながるものと考える。

４　研究内容

(1) Chromebook をはじめとした ICT 機器を積極的に利用し、効果的な活用方法を探る。

ア　各個人が積極的に研究を行う。

イ　校内研修等を通し、共有化を図る。

(2) 個に応じた指導の充実のため、さまざまなツールを活用しながら、学習過程や成果を的確に把握して指導の改善につながる評価を工夫する。

５　研究の過程

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業内容
7	13	第１回授業研究（３年社会）授業者：岩織　安香 「弥生時代の暮らしと邪馬台国」
9	28	第２回授業研究（全校道徳）授業者：鈴木　久美子 「えんぶりをつなぐ」C(16)郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
11	16	第３回授業研究（全校道徳）授業者：校長　米田　裕子 「カーテンの向こう」D(22)よりよく生きる喜び
2	8	第４回授業研究（全校道徳）授業者：教頭　鈴木　悟 「CM のあげる君について考えよう」C(10)公徳心

(2) 一般研修

月	日	内　容　等
4	2	第１回校内研修 ・校内研についての共通理解
4	27	第２回校内研 ・「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業に向けて ・指導案の様式について ・今後の研修計画について
6	9	第３回校内研 ・問題解決的な授業づくりについて 講師：教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖　先生
8	3	第４回校内研 ・１学期の振り返り・２学期に向けて　　・ＮＲＴの分析と考察 ・ＨＵＭＡＮ、自尊感情尺度シートの分析と考察 ・アナフィラキシーショック・エピペン・熱中症について
8	18	第５回校内研 ・1人1台端末の活用 講師：総合教育センター　主任指導主事　石井 一二三 先生
9	24	第６回校内研 ・指導案（教育指導課訪問）の書き方について ・ICT の効果的な活用について（参考資料：文科省、参考動画：NITS） ・特別支援教育について（悩み・疑問）
11	30	第７回校内研 ・特別支援について 講師：こども支援センター　指導主事　佐藤 佳子 先生
1	17	第８回校内研 ・ストレスマネジメント 講師：青森県総合学校教育センター 指導主事　工藤　直子　先生　　研究員　下山　翔　先生
2	2	第９回校内研 ・自尊感情尺度シートの分析と考察 ・校内研究のまとめ（成果と来年度に向けた改善策）

６　研究の成果

(1) ICT の積極的な活用がデータの処理や反復練習等を効率化し、生徒の集中力を高めるとともに、深い理解や考察、意欲的な表現活動の一助となって主体的な学びを促した。

(2) 思考ツール等を併せて活用することで、つまずきのある生徒も自分の思考を整理でき、主体的な表現が可能になった。

７　研究の課題

(1) Chromebook、思考ツール等の特質の理解とねらいに迫るための効果的な活用方法のさらなる研究。

(2) 導入から課題設定までのはたらきかけや振り返りを工夫し、つけたい力が身についているかを検証して、指導の改善を図ること。

（記入者　小笠原由利子）

令和３年度

小・中学校実践研究集録

編集発行：八戸市教育委員会　教育指導課

〒031-8686　八戸市内丸一丁目１番１号
電　話　0178-43-9519（直通）
ＦＡＸ　0178-47-4997